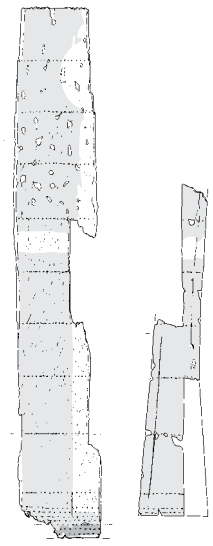
富 山 県 文 化 振 興 財 団
埋蔵文化財発掘調査報告第45集

惣領浦之前遺跡・惣領野際遺跡発掘調査報告

── 能越自動車道建設に伴う 埋蔵文化財調査報告Ⅸ ──

第一分冊



２０１０年

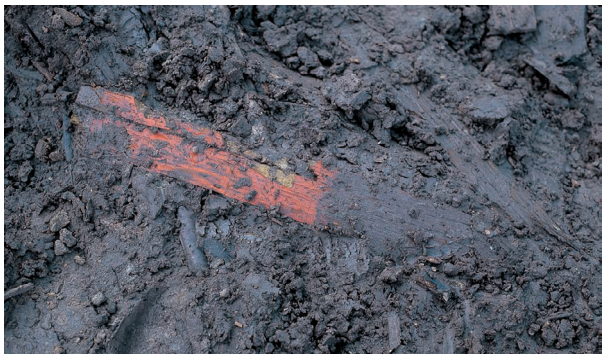
財団法人 富山県文化振興財団
埋 蔵 文 化 財 調 査 事 務 所

惣領浦之前遺跡　A地区　全景（東から）

惣領浦之前遺跡　全景（南から）

惣領浦之前遺跡　2号溝出土木製品

惣領浦之前遺跡　朱漆塗り盾



朱漆塗り盾出土状況（２号溝　南から）

（下部拡大）

惣領浦之前遺跡　２号溝出土弥生土器

惣領浦之前遺跡　古代の土器

惣領浦之前遺跡　墨書・漆書土器

惣領浦之前遺跡・惣領野際遺跡発掘調査報告

―― 能越自動車道建設に伴う
埋蔵文化財調査報告Ⅸ ――

第一分冊

２０１０年

財団法人 富山県文化振興財団
埋 蔵 文 化 財 調 査 事 務 所

序

能越自動車道は，北陸自動車道の小矢部・砺波ジャンクションから北上して，高岡市，氷見市を通り，石川県輪島市に至る高規格幹線道路として計画されました。この能越自動車道及び関連アクセス道の建設に伴い，当事務所では平成４年度から，計画路線内の多数の遺跡を発掘調査してまいりました。

本書は平成15年度に調査を実施した，氷見市に所在する惣領浦之前遺跡と惣領野際遺跡の発掘調査の成果をまとめたものです。

発掘調査の結果，縄文時代後期から近世に至るさまざまな時代の遺物や遺構がみつかり，この地で人々の生活が連綿と営まれていたことが明らかになりました。特に，惣領浦之前遺跡では，弥生時代後期の溝から朱漆塗りの盾や武器形木製品などが出土しました。この地を治めていた有力者が権力の象徴として儀式に用いたと考えられるもので，『後漢書』東夷伝に記された倭国大乱との関連を想起させてくれます。

また，平安時代から中世にかけての掘立柱建物や井戸などもみつかり，集落が広がる様子を確認いたしました。惣領野際遺跡では，柱穴に礎板を敷いて掘立柱建物の沈下を防ぐなど，低湿地に暮らす人々の工夫をみることができました。

こうした発掘調査の成果が，文献史料には表れない人々の生活をひもとく一助となり，今後の研究に活用されれば幸いです。

本書をまとめるにあたり，ご協力とご指導を頂きました関係機関及び諸氏に厚く感謝申し上げます。

平成22年３月

財団法人富山県文化振興財団
埋蔵文化財調査事務所
所長　岸　本　雅　敏

例　言

1　本書は富山県氷見市惣領地内に所在する惣領浦之前遺跡と惣領野際遺跡の発掘調査報告書である。

2　調査は国土交通省北陸地方整備局からの委託を受けて，財団法人富山県文化振興財団が行った。

3　本遺跡の発掘調査期間と本書刊行までの整理期間は下記のとおりである。

調査期間　　惣領浦之前遺跡　　平成15（2003）年５月27日～11月12日

　　惣領野際遺跡　　平成15（2003）年５月27日～12月24日

整理期間　　平成18（2006）年４月１日～平成22（2010）年３月31日

4　本書の執筆分担は下記のとおりである。編集は新宅　茜，朝田亜紀子が行った。

第Ⅰ～Ⅲ章　朝田亜紀子

第Ⅳ章　　島田美佐子

5　整理作業中に下記の方々の指導・助言等を受けた。

縄文土器　……　酒井重洋氏（富山県埋蔵文化財センター）

木製品　……　黒崎　直氏（富山大学人文学部）

　　山田昌久氏（首都大学東京都市教養学部）

墨書土器　……　鈴木景二氏（富山大学人文学部）

輸入陶磁器　……　山本信夫氏（山本考古研究所）

砥石　……　垣内光次郎氏（財団法人石川県埋蔵文化財センター）

6　遺物の写真撮影は業者に委託した。

7　自然科学的な分析は業者に委託し，その成果について報文を得た。

8　木製品の年輪年代測定は光谷拓実氏（独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所）に依頼し，分析結果について玉稿を賜った。

凡　例

1　本書は２分冊からなる。第一分冊には惣領浦之前遺跡の本文・挿図・一覧表・写真図版，第二分冊には惣領野際遺跡の本文・挿図・一覧表・写真図版と，自然科学分析を掲載する。

2　本文・挿図で扱った遺構・遺物は，一覧表に掲載している。

3　本書で示す方位は全て真北である。

4　挿図の縮尺は下記を基本とし，各図の下に縮尺率を示す。

遺構　掘立柱建物：１/100，井戸・土坑：１/20・１/40

遺物　土器・陶磁器：１/３・１/４，木製品：１/３～１/８，石製品：２/３・１/３，金属製品：１/１～１/３

5　遺構の略号は以下のとおりである。

ＳＡ：柵，ＳＢ：掘立柱建物，ＳＤ：自然流路・溝，ＳＥ：井戸，ＳＫ：土坑，ＳＰ：柱穴

6　遺構番号は，調査時に地区ごとに付した番号にある一定の数値を加算して遺構番号とした。番号は，遺構の種類にかかわらず連番とするが，建物・柵には新たに番号を付した。各地区の遺構番号に加算した数値は次のとおりである。但し複数の地区にわたる遺構は，小さい方の遺構番号で示す。

惣領浦之前遺跡　Ａ地区：加算せず，Ｂ地区：＋2000

惣領野際遺跡　　Ａ地区：加算せず，Ｂ地区：＋300

7　遺物は遺跡ごとに遺物番号を付し，斜体で示す。本文・挿図・一覧表・写真図版中の遺物番号は全て一致する。

8　遺跡の略号は，惣領浦之前遺跡「05ＳＵ－地区名」，惣領野際遺跡「05ＳＮ－地区名」とし，遺物の注記には略号を用いた。

9　施釉陶磁器の釉の掛かる範囲，黒色土器の黒色処理が及ぶ範囲は１点鎖線で示した。絵付けがされている場合はトレースの濃淡で示した。

10　遺物の煤付着部分及び赤彩部分等，遺構図中の地山はスクリーントーンで示した。以下に図示したもの以外については，図中に凡例を示した。なお，縄文土器・弥生土器・土師器煮炊具に付着する煤や炭化物は図示せず，付着部位を一覧表に記載した。また土器の墨書・漆書はトレースの濃淡で示した。

● 黒色土器

○ 赤彩（スクリーントーンと併用）

11　土層及び遺構埋土の色については，農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版　標準土色帖』を参照した。

12　遺構一覧及び本文中で用いる遺構についての用語は以下の文献を参考にした。

掘立柱建物：奈良国立文化財研究所　1976『平城宮発掘調査報告Ⅶ』

井戸：宇野隆夫　1982「井戸考」『史林』第65巻第５号

13　遺物のうち，弥生土器，須恵器，土師器，中世土師器，珠洲，輸入陶磁器，木製品の分類と編年に関する用語は以下の文献を参考にした。

弥生土器：岡本淳一郎　2006「砺波平野北部の古墳出現期土器」『下老子笹川遺跡発掘調査報告－能越自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘報告Ⅴ－』財団法人富山県文化振興財団

須恵器・土師器：田嶋明人　1988「古代土器編年軸の設定」『シンポジウム　北陸の古代土器研究の現状と課題』石川考古学研究会・北陸古代土器研究会

北野博司・池野正男　1989「北陸における須恵器生産」『北陸の古代手工業生産』北陸古代手工業生産史研究会

池野正男　2003「越中における古代前半期の土師器食器について」『北陸古代土器研究』第10号　北陸古代土器研究会

中世土師器：越前慎子　1996「梅原胡摩堂遺跡出土中世土師器皿の編年」『梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告－東海北陸自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅱ－』財団法人富山県文化振興財団

珠洲：吉岡康暢　1994『中世須恵器の研究』吉川弘文館

輸入陶磁器：山本信夫　2000『太宰府の文化財第49集　大宰府条坊跡ⅩⅤ－陶磁器分類編－』太宰府市教育委員会

木製品：奈良国立文化財研究所編　1993『木器集成図録』近畿原始編

14　遺構一覧・遺物一覧の凡例は以下のとおりである。

①遺構の埋土に切り合い関係がある場合は，特記欄に新＞古のように記号で示す。

②規模・法量の（　）内は現存長を表す。

③重量はｇ単位で示す。計測は大きさによって台秤と電子秤を使い分けた。

④胎土色調・釉色調は，農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』・財団法人日本規格協会「標準色票　光沢版」を使用し，釉調の和名は小学館『色の手帖』より似たものを使用した。なお，陶磁器のうち複数の色がみられる場合は最も多く使用されている色を記し，その他は備考欄に記す。但し透明釉の場合は記入しない。

目　次

第Ⅰ章　調査経緯 …… 1
1　調査の経過 …… 1
2　発掘作業の経過 …… 4
3　普及活動 …… 6
（1）現地説明会 …… 6　（2）遺物の展示 …… 6
4　整理作業の経過 …… 7

第Ⅱ章　立地と歴史的環境 …… 8
1　立　地 …… 8
2　歴史的環境 …… 8

第Ⅲ章　惣領浦之前遺跡 …… 12
1　基本層序 …… 12
2　遺構と遺物 …… 12
（1）縄文時代 …… 12
A　土　坑 …… 14　B　自然流路 …… 16
C　包含層出土遺物 …… 17
（2）弥生時代 …… 18
A　溝 …… 18　B　包含層出土遺物 …… 26
（3）古代・中世・近世 …… 26
A　掘立柱建物 …… 26　B　柵 …… 30
C　井　戸 …… 30　D　土　坑 …… 34
E　溝・自然流路 …… 39　F　地震痕跡 …… 52
G　包含層出土遺物 …… 53
3　ま　と　め …… 232
（1）縄文時代 …… 232　（2）弥生時代 …… 232
（3）古　代 …… 232　（4）中　世 …… 237
（5）近　世 …… 237

写真図版
報告書抄録

表目次

第1表　能越自動車道関連埋蔵文化財包蔵地・遺跡調査一覧 …… 3
第2表　調査体制 …… 4
第3表　調査一覧 …… 4
第4表　整理体制 …… 7
第5表　周辺遺跡一覧 …… 11
第6表　惣領浦之前遺跡　建物一覧 …… 196
第7表　惣領浦之前遺跡　柱穴一覧 …… 196
第8表　惣領浦之前遺跡　井戸一覧 …… 198
第9表　惣領浦之前遺跡　土坑一覧 …… 198
第10表　惣領浦之前遺跡　溝・自然流路一覧 …… 200
第11表　惣領浦之前遺跡　土器・陶磁器・土製品一覧 …… 201
第12表　惣領浦之前遺跡　木製品一覧 …… 228
第13表　惣領浦之前遺跡　石製品一覧 …… 231
第14表　惣領浦之前遺跡　金属製品一覧 …… 231
第15表　惣領浦之前遺跡　ＳＤ１出土古代食器の構成 …… 235
第16表　惣領浦之前遺跡　文字資料一覧 …… 236

巻首図版目次

巻首図版１　惣領浦之前遺跡Ａ地区全景　遺跡全景
巻首図版２　惣領浦之前遺跡２号溝出土木製品
巻首図版３　惣領浦之前遺跡朱漆塗り盾　朱漆塗り盾出土状況　２号溝出土弥生土器
巻首図版４　惣領浦之前遺跡古代の土器　墨書・漆書土器

挿図目次

第１図　調査位置 …… 1
第２図　能越自動車道関連埋蔵文化財包蔵地位置図 …… 2
第３図　調査地区割図 …… 5
第４図　現地説明会・遺物の展示報道記事 …… 6
第５図　周辺遺跡位置図 …… 10
第６図　惣領浦之前遺跡　基本層序 …… 13
第７・８図　惣領浦之前遺跡　遺構全体図 …… 56・57
第９～16図　惣領浦之前遺跡　縄文時代遺構実測図 …… 58～65
第17・18図　惣領浦之前遺跡　遺構全体図 …… 66・67
第19～46図　惣領浦之前遺跡　弥生時代・古代・中世遺構実測図 …… 68～95
第47・48図　惣領浦之前遺跡　近世遺構実測図 …… 96・97
第49～146図　惣領浦之前遺跡　遺物実測図 …… 98～195
第147図　惣領浦之前遺跡　掘立柱建物変遷図（古代）…… 233
第148図　惣領浦之前遺跡　掘立柱建物変遷図（中世）…… 238

写真図版目次

図版１　航空写真
図版２～４　惣領浦之前遺跡（縄文時代）
図版５　惣領浦之前遺跡（弥生時代・古代・中世）
図版６　惣領浦之前遺跡　溝（弥生時代）
図版７　惣領浦之前遺跡　掘立柱建物（古代・中世）
図版８・９　惣領浦之前遺跡　井戸（中世）
図版10　惣領浦之前遺跡　井戸・柱穴・土坑（古代・中世）
図版11　惣領浦之前遺跡　自然流路・地震痕跡（古代・中世・近世）
図版12～26　惣領浦之前遺跡　土器・土製品（縄文時代）
図版27～39　惣領浦之前遺跡　土器（弥生時代）
図版40～65　惣領浦之前遺跡　木製品（弥生時代）
図版66～100　惣領浦之前遺跡　土器・土製品（古代）
図版101　惣領浦之前遺跡　土器・陶器（古代）
図版102　惣領浦之前遺跡　土器・木製品（古代・中世）
図版103　惣領浦之前遺跡　土器・陶磁器（中世）
図版104　惣領浦之前遺跡　土器・陶器（中世・近世）
図版105　惣領浦之前遺跡　土製品（古代・中世）
図版106～110　惣領浦之前遺跡　木製品（古代・中世）
図版111～113　惣領浦之前遺跡　石製品（縄文時代～近世）
図版114・115　惣領浦之前遺跡　土製品・金属製品（古代～近世）

第Ⅰ章　調査経緯

1　調査の経過

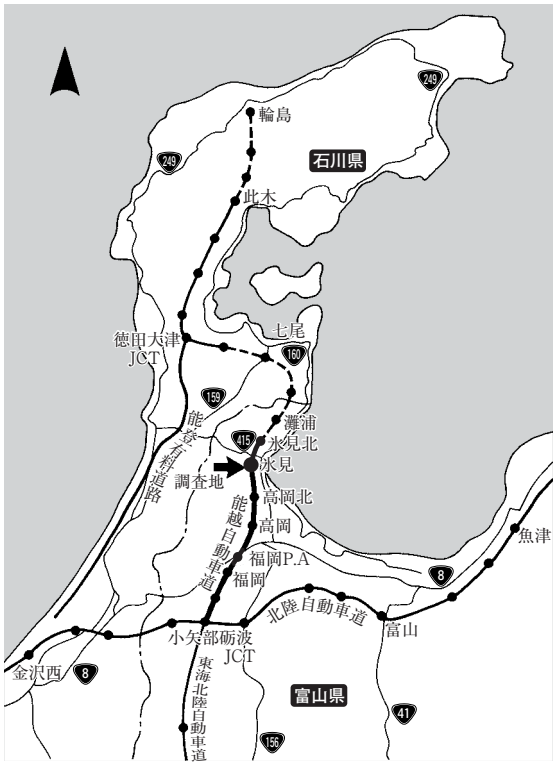
能越自動車道（一般国道470号）は，富山県砺波市と石川県輪島市を結ぶ延長約100㎞の自動車専用道路で，昭和62年（1987年）に高規格幹線道路網計画の一部として策定された。富山県内では約45㎞が計画され，これまでに北陸自動車道・東海北陸自動車道と連結する小矢部砺波ＪＣＴ（ジャンクション）から高岡北ＩＣ（インターチェンジ）までの18.2㎞（高岡砺波道路）と高岡北ＩＣから氷見ＩＣまでの11.2㎞（氷見高岡道路）が開通している。また氷見ＩＣから氷見北ＩＣ（七尾氷見道路）も開通しており，更に北上して灘浦ＩＣが設置される予定となっている。

能越自動車道の建設計画は平成２年（1990年）４月に建設省（現国土交通省）から富山県教育委員会（以下，県教委）に示され，路線予定地内の埋蔵文化財の取り扱いについて，建設省北陸建設局（現国土交通省北陸地方整備局）・県教委・小矢部市教育委員会の三者により協議が行われた。その結果，埋蔵文化財の分布状況を把握するため，小矢部市の用地買収完了地域で早急に分布調査を実施することとなった。以後，平成２年（1990年）から小矢部市・旧福岡町・高岡市・氷見市域の分布調査を県教委（富山県埋蔵文化財センター）が主体となり，当該市町教育委員会の協力を得て実施している。

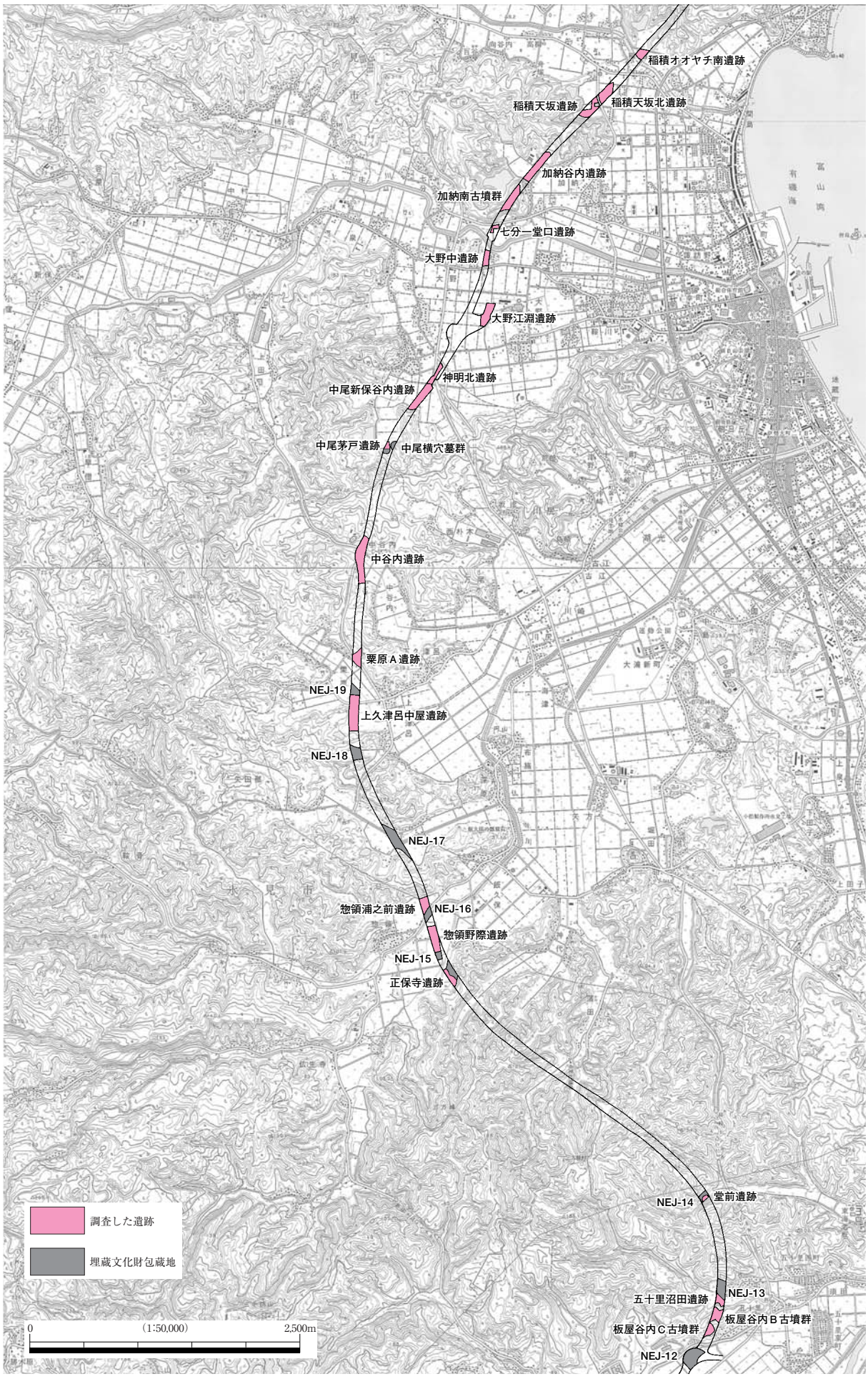
氷見市惣領地内の分布調査は平成12年（2000年）に実施し，ＮＥＪ－15・16を設定した。分布調査の結果報告から，埋蔵文化財包蔵地の今後の取り扱いについて検討が行われた。その結果，遺跡のより明確な範囲と内容について把握するため，確認調査を実施することとなった。

確認調査は建設省から委託を受け，平成２年度は小矢部市教育委員会が実施し，平成４年度以降は地元教育委員会及び財団法人富山県文化振興財団（以下，財団）が実施した。ＮＥＪ－15・16の確認調査は平成14年度に実施し，ＮＥＪ－15を惣領野際遺跡，ＮＥＪ－16を惣領浦之前遺跡と命名した。

本調査については，平成３年４月に，建設省・県教委（富山県埋蔵文化財センター）・財団の協議で，範囲が確定している遺跡について本調査の要望が出された。これに対し県教委及び財団は，東海北陸自動車道関連の調査が終了する平成４年度から，同財団埋蔵文化財調査事務所が能越自動車道関連の本調査を受託することで合意し，調査体制の整備及び調査方法の検討を進めた。以後，小矢部市，旧福岡町，高岡市，氷見市において，本調査を継続的に実施している。平成15年度は，惣領野際遺跡，惣領浦之前遺跡外で本調査を実施した。



第１図　調査位置



第２図　能越自動車道関連埋蔵文化財包蔵地位置図　（1：50,000）

年度	調査対象地	調査種類	調査主体	調査面積（㎡）	調査期間	調査結果
平成12	高岡北ＩＣ～氷見ＩＣ	分布	県教委	630,000	3/22～3/29	ＮＥＪ－15～21・埋蔵文化財包蔵推定地を設定 板屋谷内Ｂ・Ｃ古墳群・中尾横穴墓群・中尾坊田遺跡 中尾新保谷内遺跡・飯久保城跡・正保寺遺跡・ 中谷内遺跡・栗原Ａ遺跡を確認
	岩坪岡田島遺跡	本発掘	財団	17,514	5/22～12/19	古代・中世の集落を調査
平成13	ＮＥＪ－13	確認調査	財団	189（対象14,570）	5/16～5/17	五十里沼田遺跡を設定
	ＮＥＪ－14			90（対象3,700）	7/30～7/31	堂前遺跡を設定
	ＮＥＪ－20			882（対象18,100）	10/25～10/29	中尾茅戸遺跡を設定
	ＮＥＪ－21			4,194（対象99,710）	10/9～10/22	神明北遺跡・大野江淵遺跡を設定
	中尾坊田遺跡			1,143（対象21,450）	10/22～10/25	中尾新保谷内遺跡とする
	中尾新保谷内遺跡					
	岩坪岡田島遺跡	本発掘		12,435	5/22～11/30	縄文の川，古代・中世の集落を調査
	堂前遺跡			1,668	10/22～12/11	縄文の谷，古代の集落を調査
平成14	氷見ＩＣ～灘浦ＩＣ	分布	県教委	106,600	3/18～3/19	ＮＥＪ－22～27を設定 加納中程古墳群・稲積オオヤチ古墳群・八代城跡・ 北八代中山古墳・宇波高坂遺跡を確認
	神明北遺跡	本発掘	財団	3,120	7/3～9/25	古代・中世の集落を調査
	中尾新保谷内遺跡			13,076	5/22～12/6	古墳・古代・中世の集落を調査
	中尾茅戸遺跡			1,236	9/24～12/17	古墳の集落を調査
	ＮＥＪ－15	確認調査		1,064（対象16,950）	5/27～5/31	惣領野際遺跡を設定
	ＮＥＪ－16			767（対象10,200）	6/3～6/6	惣領浦之前遺跡を設定
	ＮＥＪ－17			639（対象14,890）	7/17～9/26	遺跡なし
	ＮＥＪ－18			477（対象4,910）	6/18～11/1	遺跡なし
	正保寺遺跡			228（対象16,950）	9/30～10/25	古代・中世の集落を確認
	栗原Ａ遺跡			76（対象3,100）	6/25～6/28	古代・中世の集落を確認
	中谷内遺跡			1,455（対象42,870）	6/6～12/3	縄文・古墳・古代・中世の集落を確認
	中尾横穴墓群			252（対象4,210）	6/19～7/5	遺構なし
	中尾茅戸遺跡隣接地			198（対象6,500）	11/19～11/20	遺構なし
平成15	稲積・宇波・姿～県境	分布	県教委	53,500	3/22	ＮＥＪ－28～30・２箇所の埋蔵文化財包蔵推定地を設定
	中尾新保谷内遺跡	本発掘	財団	7,415	5/27～10/3	古代・中世の集落を調査
	中尾茅戸遺跡			1,361	6/23～11/18	古墳・古代の集落を調査
	中谷内遺跡			30,672	5/26～12/25	古墳・古代の川，中世の集落を調査
	上久津呂中屋遺跡			1,020	11/13～12/16	弥生・古代・中世の集落を調査
	惣領野際遺跡			19,616	5/27～12/24	古墳・中世の集落を調査
	惣領浦之前遺跡			13,378	5/27～11/12	弥生・古墳・古代・中世の集落を調査
	栗原Ａ遺跡		氷見市教委	500	6/12～8/8	古代・中世の集落を調査
	正保寺遺跡			1,050	9/9～12/17	縄文・中世の集落を調査
	ＮＥＪ－19	確認調査	財団	1,492（対象26,555）	5/13～11/14	上久津呂中屋遺跡を設定
	板屋谷内Ｂ古墳群			279（対象13,200）	11/17～12/2	古墳２基を再確認
	板屋谷内Ｃ古墳群				11/17～12/2	古墳３基を再確認し，新たに古墳１基を確認
	栗原Ａ遺跡		氷見市教委	289（対象8,000）	5/29～6/2	弥生・古代・中世・近世の集落を確認
平成16	板屋谷内Ｂ古墳群	本発掘	財団	4,465	6/7～12/16	円墳２基を調査
	板屋谷内Ｃ古墳群			4,417	6/7～12/16	円墳３基・方墳２基を調査
	上久津呂中屋遺跡			17,490	5/28～12/14	縄文の谷，弥生・中世の集落を調査
	中谷内遺跡			26,429	5/27～12/17	古墳・古代・中世の集落を調査
	中尾新保谷内遺跡			2,839	5/25～12/9	中世の集落を調査
	大野江淵遺跡			12,229	5/27～11/9	中世の集落を調査
	栗原Ａ遺跡		氷見市教委	1,230	9/6～12/17	古代・近世の集落を調査
	正保寺遺跡			1,500	6/1～9/2	古代・中世の集落を調査
	中尾埋蔵文化財包蔵推定地	確認調査	財団	109（対象16,200）	11/18～11/19	遺構なし
	ＮＥＪ－22			184（対象1,800）	5/25～5/26	大野中遺跡を設定
	ＮＥＪ－23			630（対象12,470）	5/27～6/1	七分一堂口遺跡を設定
					12/9～12/10	
	ＮＥＪ－24			1,496（対象25,700）	5/24～6/4	加納谷内遺跡を設定
	ＮＥＪ－25			630（対象9,800）	12/6～12/9	稲積天坂遺跡を設定
	ＮＥＪ－27			864（対象18,600）	11/29～12/8	宇波西遺跡を設定
	ＮＥＪ－29			675（対象13,000）	11/29～12/3	遺構なし

第１表　能越自動車道関連埋蔵文化財包蔵地・遺跡調査一覧

参考文献

財団法人富山県文化振興財団　2002『能越自動車道関連埋蔵文化財包蔵地試掘調査報告　ＮＥＪ－13・ＮＥＪ－14・ＮＥＪ－20・ＮＥＪ－21・中尾坊田遺跡・中尾新保谷内遺跡』

財団法人富山県文化振興財団　2003『能越自動車道関連埋蔵文化財包蔵地試掘調査報告　ＮＥＪ－15（惣領野際遺跡）・ＮＥＪ－16（惣領浦之前遺跡）・ＮＥＪ－17・ＮＥＪ－18・正保寺遺跡・栗原Ａ遺跡・中谷内遺跡・中尾横穴墓群・中尾茅戸遺跡』

財団法人富山県文化振興財団　2004『能越自動車道関連埋蔵文化財包蔵地試掘調査報告　ＮＥＪ－19（上久津呂中屋遺跡）・板屋谷内Ｂ古墳群・板屋谷内Ｃ古墳群』

財団法人富山県文化振興財団　2005『能越自動車道関連埋蔵文化財包蔵地試掘調査報告　中尾埋蔵文化財包蔵推定地・ＮＥＪ－22（大野中遺跡）・ＮＥＪ－23（七分一堂口遺跡）・ＮＥＪ－24（加納谷内遺跡）・ＮＥＪ－25（稲積天坂遺跡）・ＮＥＪ－27（宇波西遺跡）・ＮＥＪ－29』

2　発掘作業の経過

発掘調査の作業工程及びその方法・内容は，平成16年10月に文化庁から示された『行政目的で行う埋蔵文化財の調査についての標準（報告）』の内容に合致したものである。

発掘調査の基準となるグリッドの設定に際しては，国家座標（平面直角座標第７系）を基にした。遺跡毎の座標は，惣領浦之前遺跡では＋89200－19100，惣領野際遺跡では＋88900－19000をＸ０Ｙ０とし[注1]，南北方向をＸ軸，東西方向をＹ軸とした。グリッドは２ｍ方眼とし，各グリッド名は北東角のＸ軸とＹ軸の座標とした。惣領浦之前遺跡の発掘範囲はＸ28～Ｘ115・Ｙ36～Ｙ79であり，調査区は用水を境に北側をＡ地区，南側をＢ地区に分けた。惣領野際遺跡の発掘範囲はＸ15～Ｘ120・Ｙ33～Ｙ88であり，調査区は市道を境に北側をＡ地区，南側をＢ地区に分けた。

出土遺物は調査年度内に可能な限り洗浄・バインダー処理・注記・分類を行った。木製品・石製品・金属製品はメモ写真を撮影し，それぞれ整理台帳を作成した。木製品及び金属製品は収納・管理の便宜を図るためオートシーラーと専用フィルムを用いてパックし，仮保管している。

調査概要については『埋蔵文化財年報』（15），『埋蔵文化財調査概要』（平成15年度）として発刊している。また『紀要　富山考古学研究』第７号において調査担当者による報告[注2]が行われている。

実施年度	調査事業担当					工事請負	航空測量
平成15	総括	所　長	桃野　真晃	調査員	文化財保護主事　内田亜紀子	株式会社氷見土建	アジア航測株式会社
		主査・副所長	関　清		〃　田中　昌樹		
		副所長・総務課長	盛田世津子		〃　植木久美子		
	総務	課長補佐	竹中　慎一		〃　森田　利枝		
		主　任	廣田　英貴		〃　石川ゆずは		
	調査総括	調査第一課長	狩野　睦		〃　小出　泰弘		
	調査員	主　任	島田美佐子		埋蔵文化財技師　朝田　要		

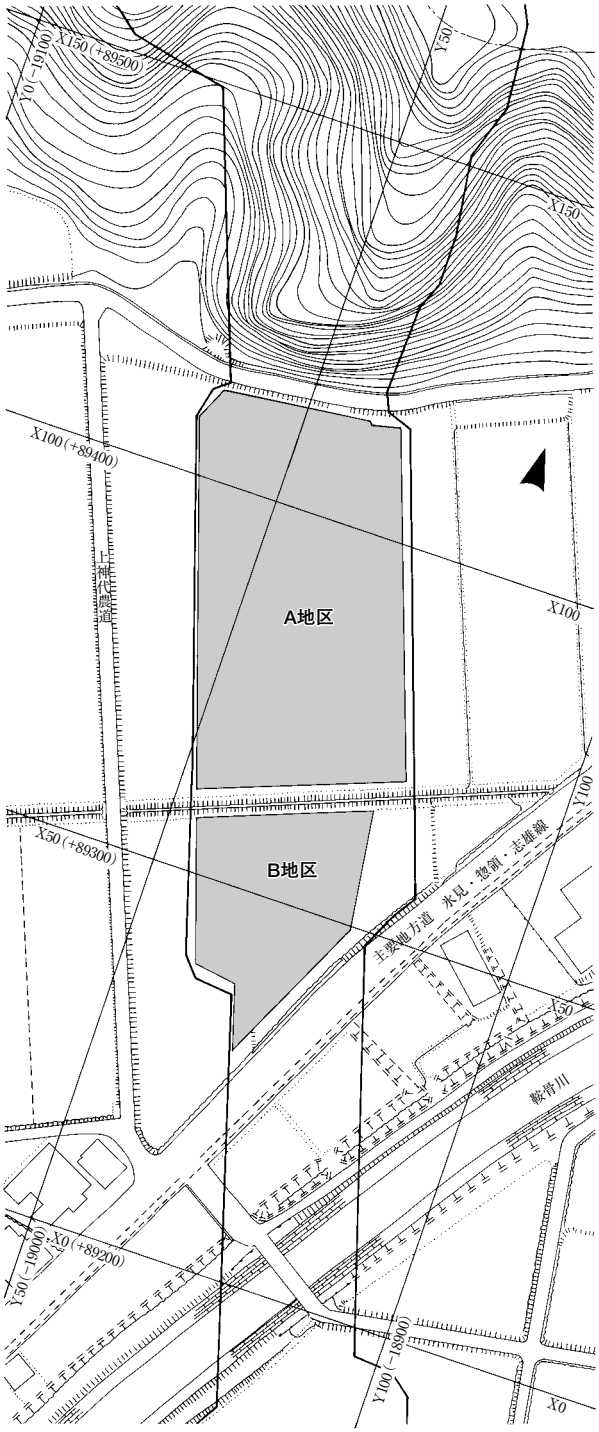
第２表　調査体制

遺跡	地区	面	調査期間	延べ日数	調査面積	調査担当者	検出遺構	出土遺物
惣領浦之前	A	近世・中世・古代弥生	平成15年５月27日～８月28日	56日	5,247㎡	内田亜紀子 森田　利枝	掘立柱建物，井戸，土坑，柱穴，溝，自然流路，地震痕跡	縄文土器，弥生土器，土師器，須恵器，黒色土器，施釉陶器，製塩土器，中世土師器，珠洲，中国製青磁，中国製白磁，近世陶磁器，土製品，木製品，石製品，金属製品，獣骨
		縄文	平成15年８月29日～11月12日	42日	3,394㎡		土坑，自然流路	
	B	近世・中世・古代	平成15年６月４日～７月25日	31日	2,021㎡	田中　昌樹 朝田　要	掘立柱建物，土坑，溝，自然流路	縄文土器，弥生土器，土師器，須恵器，黒色土器，製塩土器，近世陶磁器，土製品，木製品，石製品，金属製品，獣骨
		縄文	平成15年７月28日～10月８日	38日	2,021㎡		土坑，自然流路	縄文土器，石製品
惣領野際	A	中世	平成15年５月27日～９月18日	69日	4,247㎡	植木久美子 石川ゆずは	掘立柱建物，井戸，土坑，溝，畑，自然流路	土師器，須恵器，中世土師器，珠洲，中国製青磁，中国製白磁，青花，近世陶磁器，土製品，木製品，石製品，金属製品
		古墳・弥生・縄文	平成15年９月22日～12月16日	54日	4,247㎡		柱穴，土坑，溝，自然流路	縄文土器，弥生土器，土師器，木製品，石製品
	B	中世	平成15年６月６日～10月３日	66日	5,561㎡	島田美佐子 小出　泰弘	掘立柱建物，井戸，土坑，溝，自然流路	土師器，須恵器，中世土師器，珠洲，中国製青磁，中国製白磁，近世陶磁器，土製品，木製品，石製品，金属製品
		古墳・弥生・縄文	平成15年10月６日～12月24日	49日	5,561㎡		柱穴，土坑，溝，自然流路	縄文土器，弥生土器，土師器，木製品，石製品

第３表　調査一覧

注１　平面直角座標第７系に定められている起点は，北緯36°00′0″0000，東経137°10′0″0000である。惣領浦之前遺跡のＸ０Ｙ０の経緯度は，北緯36°48′13.75091″，東経136°57′09.32331″（日本測地系），北緯36°48′24.66429″，東経136°56′58.53233″（世界測地系），惣領野際遺跡のＸ０Ｙ０の経緯度は，北緯36°48′04.02420″，東経136°57′13.38519″（日本測地系），北緯36°48′14.93909″，東経136°57′02.59403″（世界測地系）である。日本測地系から世界測地系への変換は，国土地理院の変換プログラム（Ｗｅｂ版ＴＫＹ２ＪＧＤ）により行った。

注２　『紀要　富山考古学研究』第７号所収の報告は以下のとおりである。
石川ゆずは「惣領浦之前遺跡出土の木製品について」　森田利枝「惣領浦之前遺跡出土の出土文字資料」
朝田　要「惣領浦之前遺跡出土の漆関連遺物について－コップ形須恵器を中心に－」　内田亜紀子「惣領浦之前遺跡出土の施釉陶器」
小出　泰弘「惣領浦之前遺跡の井戸祭祀」　石川ゆずは「青磁人物像（燭台）について－惣領野際遺跡出土資料の紹介を兼ねて－」
杉山　大晋「北陸の中世鋳鉄製品について－越中の鉄鍋を中心に－」



惣領浦之前遺跡

惣領野際遺跡

平成15年度調査

0　1:2,000　100m

第 3 図　調査地区割図

3　普 及 活 動

（1）現地説明会

発掘調査の結果を広く一般に公開するために，調査行程を検討しながら対象地区を選定して現地説明会を実施した。説明会は平成15年10月26日（土）に中谷内遺跡を会場として行い，約120名の見学者が訪れた。土器が多量に出土した古墳時代の自然流路等を公開し，遺跡各所に調査員を配置し質問等に対応した。併せて遺物展示室において，中谷内遺跡，中尾新保谷内遺跡，惣領浦之前遺跡，惣領野際遺跡ほかから出土した遺物や写真パネルを展示した。

（2）遺物の展示

平成17年２月18日～３月６日に，富山県高岡文化ホールと共催で，当事務所が調査した遺跡出土遺物の展示「古代のかたりべ－大規模発掘調査の速報展－」を行った。惣領浦之前遺跡からは縄文時代の土偶や石鏃等の石器，弥生時代の土器や朱漆塗り盾，団扇形，刀形等の木製品，中世の鉄鍋を展示した。惣領野際遺跡からは珠洲壺と青磁人物像を展示した。期間中，延べ約1,300名の入場者が訪れた。

「倭国大乱」県内でも
氷見・惣領浦之前遺跡
弥生期の盾 初出土
朱塗り施し権力誇示
日本新聞
弥生人の戦い 北上
氷見・惣領浦之前遺跡
「盾やはり出たか」
専門家 大乱広がりに注目

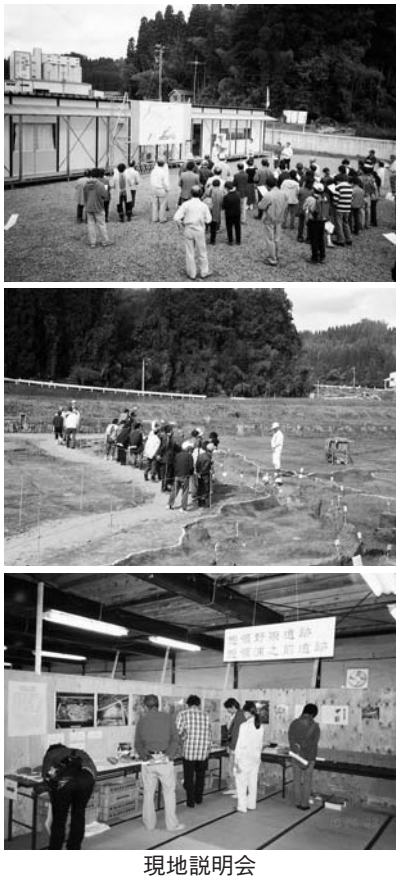
平成15年10月22日付
北日本新聞

氷見の惣領浦之前遺跡
木製盾の破片4点出土
祭祀や儀式に使用

平成15年10月23日付
読売新聞

弥生後期の盾 出土
氷見の遺跡
舞を踊る祭祀用か

平成15年10月23日付
朝日新聞



現地説明会

2005年（平成17年）2月16日　水曜日
18日から「古代のかたりべ」
生活の遺物 一堂に展示

平成17年２月16日付　北日本新聞

第４図　現地説明会・遺物の展示報道記事

4　整理作業の経過

報告書刊行に向けての本格的な室内整理作業は，平成18年４月に開始した。18年度は，木製品・石製品・金属製品の写真撮影及び実測，土器・陶磁器の接合・復元を行った。19年度は，土器・陶磁器・土製品の実測，遺構の挿図・写真図版作成，原稿執筆，20年度は，土器・陶磁器の写真撮影，遺物の挿図・写真図版作成，トレース，原稿執筆，編集を行った。21年度は編集，印刷，校正を行った。

遺物の実測は，土器・陶磁器・土製品を調査員及び室内整理作業員が行った。石製品・木製品の一部は調査員が実測を行い，その他は業者に委託した。遺物実測図は，種類別の遺物カードに直接書き込むか貼り込んで整理した。遺構実測図・写真は各台帳を作成して整理し，遺構カードとともにパーソナルコンピューターを使用してデータ入力した。遺構・遺物のデータは観察表として掲載した。

遺物の写真撮影は業者に委託した。木製品・金属製品のうち重要なものは，業者に委託して保存処理及び一部復元を行った。自然科学分析は業者に委託し，結果報告を掲載した。

実施年度	整理事業担当						委託事業					
							写真撮影	遺物実測	保存処理	自然科学分析	図面編纂	データ入力
平成18	総括	所　長	岸本　雅敏	整理総括	調査第二課長	宮田　進一	写房楠華堂	(財)大阪市文化財協会	(株)京都科学	パリノ・サーヴェイ株式会社	－	(株)プライムビジネススタッフ
		主査・副所長	山本　正敏	担当	主　任	越前　慎子						
		副所長・総務課長	加藤豊次郎		〃	金三津道子						
	総務	チーフ	浅地　正代		文化財保護主事	朝田亜紀子						
		主　任	岩田　扶紀									
平成19	総括	所　長	岸本　雅敏	整理総括	調査第二課長	河西　健二	アーガス・フォト・スタジオ	(株)文化財サービス (株)太陽測地社	(財)元興寺文化財研究所 (株)芸匠	漆器文化財科学研究所 パリノ・サーヴェイ株式会社 加速器分析研究所 (財)元興寺文化財研究所 JFEテクノリサーチ株式会社	－	(株)プライムビジネススタッフ
		主査・副所長	山本　正敏	担当	主　任	越前　慎子						
		副所長・総務課長	加藤豊次郎		〃	金三津道子						
	総務	チーフ	浅地　正代		〃	新宅　茜						
		主　任	岩田　扶紀									
平成20	総括	所　長	岸本　雅敏	整理総括	調査第二課長	河西　健二	アーガス・フォト・スタジオ	(財)大阪市文化財協会	(財)山梨文化財研究所 (株)芸匠	パリノ・サーヴェイ株式会社 加速器分析研究所	(株)セビアス	(株)プライムビジネススタッフ
		主査・副所長	山本　正敏	担当	主　任	新宅　茜						
		副所長・総務課長	加藤豊次郎		〃	髙柳由紀子						
	総務	チーフ	浅地　正代		〃	朝田亜紀子						
		主　任	岩田　扶紀									
平成21	総括	所　長	岸本　雅敏	整理総括	調査第二課長	河西　健二	写房楠華堂	－	(株)古環境研究所	(株)古環境研究所	－	－
		副所長	池野　正男	担当	主　任	髙柳由紀子						
	総務	総務課長	竹中　慎一		〃	朝田亜紀子						
		チーフ	浅地　正代									

第４表　整理体制

発掘調査風景

整理作業風景

第Ⅱ章　立地と歴史的環境

1　立　　地

惣領浦之前遺跡・惣領野際遺跡は富山県西部の氷見市に位置する。氷見市は能登半島東側基部に位置し，三方を石動丘陵・宝達丘陵・二上山丘陵に囲まれ，東は富山湾に面する。市域の約８割を占める丘陵は新第三紀と第四紀層の泥岩が広く分布し，地滑り地形が多く認められる。市北半部は宇波川・阿尾川・余川川・上庄川などの河川とその支流からなる谷地形で，扇状地は形成されず，平野の広がりは小さい。市南半部には，仏生寺川とその支流によって開析された十三谷と呼称される谷底平野がある。また，かつて仏生寺川下流一帯には布勢水海と呼ばれた潟湖が存在したが，現在は干拓されて水田が広がる。

惣領浦之前遺跡・惣領野際遺跡は十三谷の奥部，氷見市惣領地内に所在する。惣領浦之前遺跡は仏生寺川の支流である鞍骨川北岸の平野に位置し，北側を小丘陵に接する。惣領野際遺跡は仏生寺川と鞍骨川に挟まれた谷底平野中央に位置する。標高はいずれも約7.5～8.5ｍを測る。

2　歴史的環境

惣領浦之前遺跡（１）・惣領野際遺跡（２）の位置する十三谷奥部は，縄文時代前期には海であったと考えられている。縄文時代中期初頭の海退によって，十三谷に広がっていた湾が閉ざされ布勢水海が形成されるが，この頃に惣領地内は平野となったと考えられる。周辺では縄文時代から近世まで各時代の遺跡が認められるが，縄文時代の遺跡は丘陵裾部を中心に分布する。上久津呂ゴタンダ山遺跡（50），上久津呂Ｂ遺跡（48），上久津呂中屋遺跡（51），布施八ヶ田遺跡（37），万尾遺跡（62），神代羽連遺跡（17），飯久保ナガモン遺跡（15），飯久保後山遺跡（41）などがある。上久津呂中屋遺跡は万尾川右岸の丘陵裾部に位置し，平成15年から３年間にわたって調査が行われている。谷，貝塚から早期末から後期にいたる土器や木製品，石器，骨角器など多くの資料が出土している。

弥生時代は後期から終末期にかけて遺跡数が増加する。丘陵裾に矢ノ方一丁目遺跡（19），神代羽連遺跡，上久津呂中屋遺跡，飯久保ナガモン遺跡，万尾遺跡，万尾Ｂ遺跡（60），丘陵部に飯久保後山遺跡，堀田ニキ塚山古墳群（Ａ１号墳，27）が存在する。矢方一丁目遺跡と神代羽連遺跡からは終末期の土器が出土している。上久津呂中屋遺跡では後期後半の周溝建物が数棟検出されており，この時期に布勢水海周辺の低地に集落が営まれ始めたことがわかる。

古墳時代に入ると，平野部には惣領遺跡（３），惣領Ｂ遺跡（10），上久津呂Ｂ遺跡，中谷内遺跡（58），万尾遺跡，神代羽連遺跡などが確認される。丘陵上には，堀田ニキ塚山古墳群（Ｂ・Ｃ支群），堀田ナンマイダ松古墳群（24），光西寺山古墳群（13），惣領コツデラ古墳群（８），惣領古墳群（９），飯久保後山古墳群（40），万尾古墳（61），布施円山古墳（38）が築かれる。惣領遺跡は鞍骨川左岸，惣領野際遺跡の約400ｍ西に位置し，中期から後期の資料が出土している。惣領コツデラ古墳群，惣領古墳群との関連が指摘されている。惣領コツデラ古墳群は，仏生寺川左岸の丘陵上に位置する。円墳２基からなり，中期の築造と考えられる。惣領古墳群は仏生寺川と鞍骨川に挟まれた平野の独立小丘陵上に位置し，円墳３基からなる。主体部の礫床から，須恵器・鉄刀・刀子・鉄鏃・管玉・ガラス小

玉などが出土し，6世紀後半の築造と考えられる。中谷内遺跡は仏生寺川支流の中谷内川が開析した谷底平野に位置し，平成15年から3年間にわたって調査が行われた。古墳時代・古代・中世の複合遺跡で，古墳時代の遺構としては後期の竪穴住居や土器製作に関わる粘土採掘坑が特筆される。また十二町潟に面した丘陵部には園（その）カンデ窯跡（35）がある。6世紀前半頃の操業と考えられており，県内最古の須恵器窯とされる。神代羽連遺跡から当窯の製品とみられる須恵器が出土している。

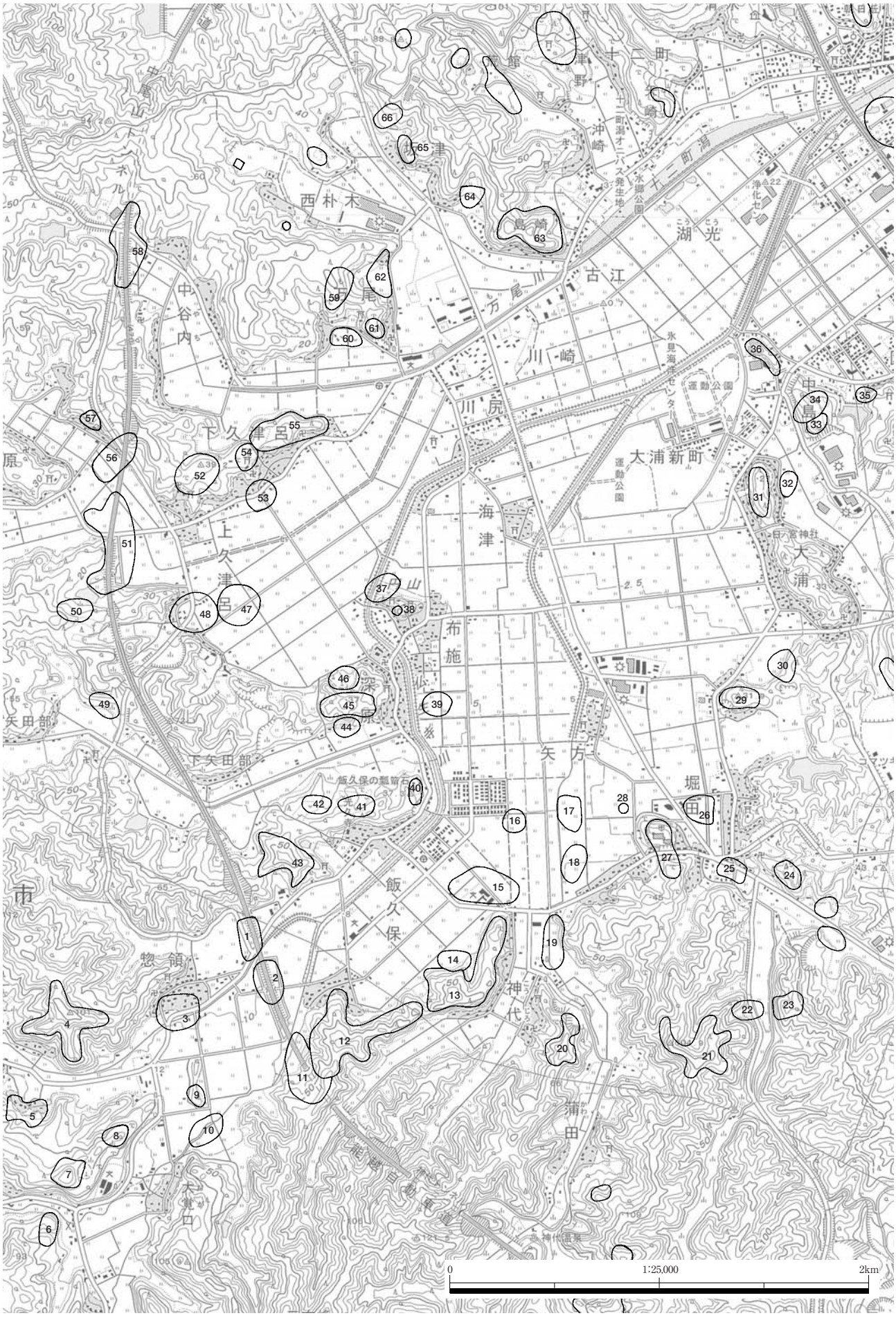
古代の遺跡には，惣領遺跡，惣領Ｂ遺跡，飯久保山ノ下遺跡（14），飯久保ナガモン遺跡，鞍骨（くらぼね）オヤノヤチ遺跡（５），堀田大久前（ほりただいくまえ）（25），堀田竹端（ほりたたけはな）遺跡（26），上久津呂Ａ・Ｂ遺跡（47・48），上久津呂中屋遺跡，粟原Ａ・Ｂ遺跡（56・57），中谷内遺跡，万尾Ｂ遺跡がある。堀田竹端遺跡では「□□□女」の墨書土器，堀田大久前遺跡では転用硯が出土しており，堀田地区に開発に携わった集団の拠点集落があったことが推測されている[注1]。また，中谷内遺跡では平安時代の掘立柱建物等が検出されている。

中世に入ると，丘陵上に飯久保城跡（12），惣領砦（４），惣領コツテラ城跡（７），寺中竹端城跡（じちゅうたけはなじょう）（６），神代城跡（こうじろじょう）（20）などの山城が築かれる。飯久保城跡は仏生寺川右岸の丘陵の尾根上に立地する。城主は加賀を本拠とした室町幕府奉公衆の系譜を引く狩野中務とされる[注2]。本城として飯久保城，出城として神代砦，詰城として惣領砦，御林山（おはいやま）（鞍骨山）城を構え[注3]，南方の福岡町，西方の石川県志雄町との境の山地一帯に勢力を及ぼしたと考えられている。飯久保城跡の麓にある飯久保の集落を「城ノ下」，仏生寺川べりを「鍛冶屋町」と呼ぶことから，城下集落の存在が予想される。飯久保山ノ下遺跡では中世の遺物が採集されている。また飯久保後山遺跡では近世の塚が確認されており，越中瀬戸の骨壺・鉢・小皿が出土している。

注１　氷見市史編さん委員会　2002『氷見市史』７　資料編五　考古
注２　森田柿園　1951・1952『越中志徴』上・下巻　石川県図書館協会編纂
注３　高岡徹　1990「氷見南部地域における中世山城とその性格」『富山市日本海文化研究所紀要』第４号

参考文献

1　児島清文　1962『氷見市地名考』氷見報知新聞社　桶元吉郎
2　財団法人富山県文化振興財団　2003『能越自動車道関連埋蔵文化財包蔵地調査報告－ＮＥＪ－15（惣領野際遺跡）・ＮＥＪ－16（惣領浦之前遺跡）・ＮＥＪ－17・ＮＥＪ－18・正保寺遺跡・粟原Ａ遺跡・中谷内遺跡・中尾横穴墓群・中尾茅戸遺跡－』
3　財団法人富山県文化振興財団　2004『埋蔵文化財調査概要－平成15年度－』
4　財団法人富山県文化振興財団　2004『埋蔵文化財年報（15）』
5　財団法人富山県文化振興財団　2005『埋蔵文化財調査概要－平成16年度－』
6　財団法人富山県文化振興財団　2005『埋蔵文化財年報（16）』
7　財団法人富山県文化振興財団　2006『平成17年度埋蔵文化財年報』
8　財団法人富山県文化振興財団　2006『とやま発掘だより－平成17年度　発掘調査速報－』
9　高岡徹　1990「氷見南部地域における中世山城とその性格」『富山市日本海文化研究所紀要』第４号
10　富山県立氷見高等学校歴史クラブ　1961『故郷の城址』
11　富山県立氷見高等学校歴史クラブ　1964『富山県氷見地方考古学遺跡と遺物』
12　富山県埋蔵文化財センター　2006『富山県中世城館遺跡総合調査報告書』
13　中葉博文　1980『氷見市地名の研究』日本地名学研究所
14　西井龍儀・林寺厳州・大野究　1988「氷見市園カンデ窯跡」『大境』第12号　富山考古学会
15　氷見市教育委員会　1988『富山県氷見市堀田西谷内遺跡試掘調査報告書』
16　氷見市教育委員会　2003『飯久保城跡』
17　氷見市教育委員会　2003『氷見市埋蔵文化財分布調査報告（丘陵地区）Ⅲ』
18　氷見市教育委員会・富山大学考古学研究室　1996『氷見市埋蔵文化財分布調査報告Ⅲ』
19　氷見市史編さん委員会　2002『氷見市史』７　資料編五　考古
20　氷見市立博物館　2005『特別展　水辺の人びと－布勢水海の歴史をさぐる－』
21　森田柿園　1951・1952『越中志徴』上・下巻　石川県図書館協会編纂



第 5 図　周辺遺跡位置図　（1：25,000）

番号	遺跡名	所在地	種類	時代	備考	文献
1	惣領浦之前	惣領	集落	縄文(後)・弥生(後・終)・古代(奈良・平安)・中世・近世		2,3,4
2	惣領野際	惣領	集落	縄文(晩)・弥生(中・後)・古墳・古代・中世		2,3,4
3	惣領	惣領	集落	古墳・古代(奈良・平安)		18,19
4	惣領砦	惣領	城館(山城)	中世(室町)		9,12,18
5	鞍骨オヤノヤチ	鞍骨	散布地	古代(奈良)・近世		18,19
6	寺中竹端城跡	仏生寺(寺中)字竹端	城館(山城)	中世(鎌倉・室町)		12,18
7	惣領コツテラ城跡	惣領字コツテラ	城館(山城)	中世(鎌倉・室町)		12,18
8	惣領コツデラ古墳群	惣領	古墳	古墳		17,19
9	惣領古墳群	惣領字紅地平	古墳	古墳		11,17,18,19
10	惣領B	惣領	散布地	古代(奈良・平安)		18
11	正保寺	飯久保字正保寺	中世社寺・集落	古墳・古代・中世(鎌倉・室町)・近世		18
12	飯久保城跡	飯久保字向山	城館(山城)	中世(室町)		9,12,15,16,18,20
13	光西寺山古墳群	神代・飯久保	古墳	古墳		15,17,18,19
14	飯久保山ノ下	飯久保	散布地	古代(奈良・平安) ・中世		18,19
15	飯久保ナガモン	飯久保	散布地	縄文・弥生・古代 (奈良)・近世		18,19
16	神代ハタケダ	神代字羽連	散布地	中世(鎌倉・室町)		18
17	神代羽連	神代字羽連	散布地	縄文・弥生(後)・古墳 (後)・古代 (奈良・平安)		11,15,18,19
18	石崎	堀田一の坪	散布地	古代(奈良・平安)・中世 (鎌倉・室町)		15,18
19	矢ノ方一丁目	矢ノ方	散布地	弥生(終) ・古代・中世		11,15,18,19,20
20	神代城跡	神代ノノ山	城館(山城)	中世(鎌倉・室町)		9,12,15,18
21	堀田城跡	堀田	城館(山城)	中世(鎌倉・室町)		9,12,15,18
22	堀田ワタリウエ	堀田字ワタリウエ	散布地	古代(奈良・平安)・中世 (鎌倉・室町)		18
23	堀田館ノ山	堀田	墓	近世(安土桃山)		15,17,19
24	堀田ナンマイダ松古墳群	堀田字藤塚	古墳	古墳		15,17,19
25	堀田大久前	堀田字大久前	散布地	古代 (奈良・平安)		15,18,19,20
26	堀田竹端	堀田	散布地	中世(鎌倉・室町)・近世		19,20
27	堀田ニキ塚山古墳群	堀田	古墳	古墳	旧堀田古墳群	15,17,18,19
28	堀田モリノ田塚	堀田	墓	中世(鎌倉・室町)	消滅	18
29	馬乗山	堀田山ノ越	散布地	古墳(初) ・近世		15
30	堀田サカイ	堀田	散布地	弥生・古墳・古代(奈良・平安)・中世(鎌倉・室町)・近世		
31	大浦諏訪	大浦	散布地	中世(鎌倉・室町)・近世		
32	大浦	大浦	散布地	弥生・中世・近世		19
33	大浦三乗寺	大浦	散布地	縄文		
34	大浦三蔵	大浦	散布地・塚	古墳・中世		17,19
35	園カンデ窯跡	園カンデ	生産(窯)	古墳		14,19,20
36	大浦城跡	園・中島	城館(山城)	中世		12
37	布施八ヶ田	布施八ヶ田	散布地	縄文(後)・古代		18
38	布施円山古墳	布施	古墳	古墳		17,19
39	布施若宮	布施字若宮	散布地	古墳		
40	飯久保後山古墳群	飯久保	古墳	古墳		18
41	飯久保後山	飯久保	散布地・塚	縄文・弥生(後)・近世		18
42	矢田部ナカタ	矢田部	散布地	中世(鎌倉・室町)		18
43	惣領古戸	惣領・矢田部	城館(山城)	中世(鎌倉・室町)		
44	深原打越	深原打越	散布地	古代(平安)		18
45	深原古墳群	深原	古墳	古墳		17,19
46	深原前田	深原字前田	散布地	古代(奈良・平安)・中世(鎌倉・室町)		18
47	上久津呂A	上久津呂字前田	散布地	古墳・古代 (奈良・平安)		18,19,20
48	上久津呂B	上久津呂	散布地	縄文・弥生・古墳・古代 (奈良・平安)		18,19
49	矢田部六反坪	矢田部	散布地	中世(鎌倉・室町)		18
50	上久津呂ゴタンダ山	上久津呂ゴタンダ山	散布地	縄文・古墳		18
51	上久津呂中屋	上久津呂	集落	縄文(早・前・中・後)・弥生(後・終)・古墳・古代(平安)・中世		3,4,5,6,7,8,20
52	上久津呂C	上久津呂	墓	中世(鎌倉・室町)		18
53	下久津呂	下久津呂	散布地	中世(鎌倉・室町)		18
54	下久津呂古墳	下久津呂	古墳	古墳		17,19
55	久津呂城跡	下久津呂字城	城館(山城)	中世(鎌倉・室町)		9,12,18,20
56	粟原A	粟原	集落	古墳・古代(奈良・平安)・中世・近世		18,19
57	粟原B	粟原	散布地	古代(奈良・平安)		18
58	中谷内	中谷内	集落	古墳・古代(奈良)・中世(鎌倉・室町)		2,3,4,5,6,7,8,18
59	万尾城跡	万尾	城館(山城)	中世		12,20
60	万尾B	万尾	散布地	弥生(終)・古代(奈良)・中世(鎌倉・室町)・近世		18
61	万尾古墳	万尾	古墳	古墳		17,19
62	万尾	万尾字二俵目	散布地	縄文・古墳(後)・古代・中世・近世		18,19,20
63	烏崎城跡	十二町	城館(山城)	中世(鎌倉・室町)		12,20
64	坂津B	十二町	散布地	弥生・古墳		
65	坂津横穴群	十二町坂津字新が谷内	古墳(横穴)	古墳(後)		
66	坂津	十二町坂津	散布地	古代(平安)・中世(鎌倉)		

第5表　周辺遺跡一覧

第Ⅲ章　惣領浦之前遺跡

1　基本層序

惣領浦之前遺跡は，北側を石動丘陵から派生した小丘陵に接し，南東を流れる鞍骨川に向かって緩やかに傾斜する地形となっており，現況で約90㎝の比高差がある。土質は，丘陵に近いＡ地区が粘性が強く，鞍骨川に近いＢ地区がシルト質の強い傾向がある。丘陵付近から浸出する地下水の影響で，特に北部山裾側の地盤が脆弱であった。

基本層序は，土層中に包含する遺物の年代を基に設定した。Ⅰ層：表土・盛土，Ⅱ層：弥生・古代・中世遺物包含層，Ⅲ層：縄文時代遺物包含層，Ⅳ・Ⅴ層：無遺物層である。Ⅲ層とⅣ層の各上面に遺構検出面がある。

自然流路ＳＤ１は調査区中央部を東西に横断しており，調査面積の約1/4を占める。Ⅰｂ層直下から切り込んでおり，流路内ではⅡ～Ⅳ層を削平している。

弥生・古代・中世の遺物包含層であるⅡ層は，褐灰色粘土或いは灰黄褐色シルトである。確認調査時には調査区のほぼ全域にみられた土層であったが，その後重機による攪乱を受け，地盤の弱い北側を中心に消滅している。この範囲ではⅠ層直下がⅢｂ層あるいはⅣ層となっており，各面で遺構検出を行った。Ⅱ層はＳＤ１の両岸付近において残りが良く，遺構も多く検出できた。

縄文時代遺物包含層であるⅢ層は，Ⅲａ～Ⅲｃに細分できる。いずれもＡ地区では褐灰色～にぶい黄橙色粘土，Ｂ地区では灰色粘土質シルト～灰オリーブ色シルトを基調とする土層である。Ａ地区は遺物の包含は稀であったが，Ｂ地区では炭化物や酸化鉄粒と共に多くの遺物を包含する。主に後期初頭～前葉の遺物が出土している。なおＡ地区では地震痕跡が明瞭にみられたためⅢ層の各面で検出を行ったが，出土遺物から近世に生じた地震であると考えられる。

Ⅳ層は，Ａ地区では上位は青灰色粘土であるが，下位に近づくにつれて次第にシルト質及び砂質が強くなる土質で，次第に粗砂が主体で小石の混じる層に至る。水成堆積によるものと考えられ，これをⅣ′層とした。Ⅳ′層はごく僅かに縄文時代の遺物を包含しているが，周囲からの流れ込みによるものと考えられる。惣領浦之前遺跡の立地する十三谷は，縄文時代前期には海であったが，中期初め頃の海退によって平野が形成されたとされており，Ⅳ・Ⅳ′層はこの段階で堆積したものであろう。

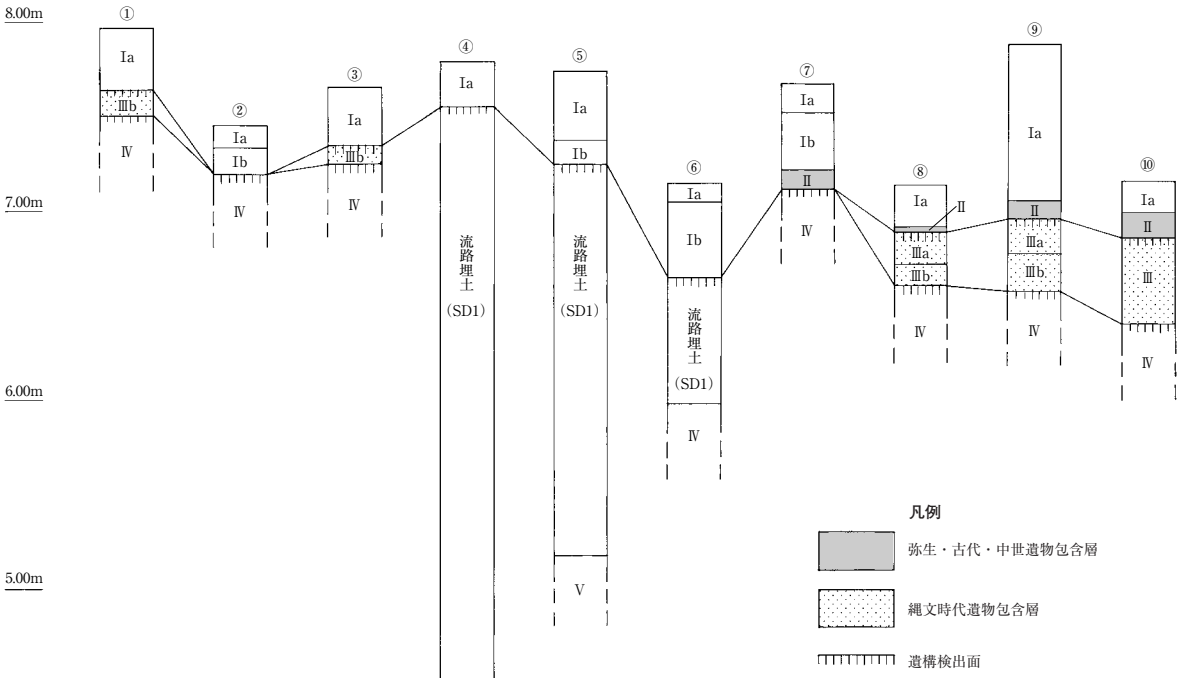
Ⅴ層は無遺物層で，堅くしまった暗灰色粘土である。Ａ地区のＳＤ１底面において確認している。

2　遺構と遺物

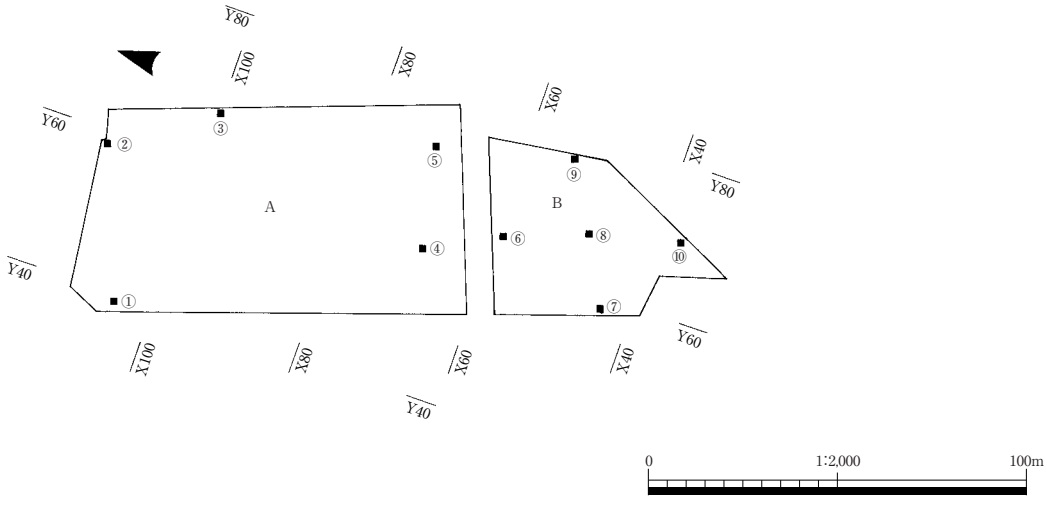
（1）縄文時代

縄文時代の遺構は，土坑と自然流路がある。Ｂ地区の土坑から気屋式の土器が出土しており，後期前葉を中心とする時期の遺構と考えられる。自然流路は２条あるが，浅い落ち込み状の遺構で，遺物の出土は少ない。またＢ地区南西部のⅢ層に，土器の出土が集中する範囲が数箇所みられた。

ＳＤ１から縄文時代の遺物が多く出土しており，流路は縄文時代においても存在したと考えられるが，縄文時代以外の様々な時代の遺物が出土しているため，後項に記載することとする。



〔表土・盛土〕
Ⅰa層：2.5Y4/1 黄灰色シルト
Ⅰb層：5Y5/1 灰色粘土質シルト
〔弥生時代・古代・中世遺物包含層〕
Ⅱ層：A地区　10YR4/1 褐灰色粘土
　　B地区　10YR4/2 灰黄褐色シルト
〔縄文時代遺物包含層〕
Ⅲa層：A地区　10YR4/1 褐灰色粘土(10YR6/2 灰黄褐色粘土混)
　　B地区　7.5Y4/1 灰色粘土質シルト(10YR6/6 明黄褐色粘土混,炭化物･酸化鉄混)
Ⅲb層：A地区　10YR7/2 にぶい黄橙色粘土(10YR4/1 褐灰色粘土混)
　　B地区　5Y5/2 灰オリーブ色シルト(10YR4/1 褐灰色粘土混,炭化物･酸化鉄混)
Ⅲc層：10YR7/2 にぶい黄橙色粘土
〔地山〕
Ⅳ層：A地区　5B6/1 青灰色粘土(下位に砂混)
　　B地区　7.5Y6/1 灰色砂質シルト(10YR5/8 黄褐色砂質シルト混)
Ⅳ'層：5B6/1 青灰色粗砂(φ5～10㎜礫混)
Ⅴ層：N3/0 暗灰色粘土



第 6 図　惣領浦之前遺跡　基本層序

A　土　　坑

縄文時代の土坑は，深いもの（ＳＫ906・947・970・2257）と，浅いもの（ＳＫ2201・2215・2217・2245・2246・2256・2258～2262・2264）とに大別できる。

深い土坑は，内面をほぼ垂直に掘り込むもの（ＳＫ906・970・2257）と，斜めに掘り込み断面が三角形状になるもの（ＳＫ947）とがある。前者は深さ72㎝～１ｍを測り，埋土はⅣ層に似た土が水平に堆積するものが多い。掘削されてすぐ埋め戻されたことが考えられ，貯蔵穴等の用途が想定される。後者は深さ１ｍを測り，埋土はレンズ状の自然堆積と底面に有機物層が認められた。開口状態での使用が考えられ，落とし穴等の用途が想定できる。

浅い土坑は，円形もしくは楕円形のもの（ＳＫ2201・2217・2245・2258・2259）と，不整形なもの（ＳＫ2215・2246・2256・2260～2262・2264）がある。後期前葉の土器を伴うものが多いが，浮いた状態で出土しており，土器溜まりと考えた。

906号土坑（ＳＫ906，第９図）

Ａ地区中央南西寄りに位置し，南側を地震痕跡に削られる。平面形は円形で，直径1.22～1.24ｍ，深さ80㎝を測る。内面はほぼ垂直に掘り込まれており，西側に掘形が僅かに崩れた部分がある。埋土上層は青灰色粘土，中層は炭化物の多く混じる黄灰色粘土，下層は炭化物が僅かに混じる青灰色粘土を基調とする。出土遺物はない。

947号土坑（ＳＫ947，第９図，図版２）

Ａ地区北西角に位置する。平面形はやや歪みのある円形で，直径1.96～2.02ｍを測る。内面は斜めに掘り込まれており，断面形はＶ字状になる。深さは中央の最深部で1.00ｍを測る。埋土はレンズ状に堆積し，上層は黄灰色粘土，中層は青灰色粘土質シルト・砂質シルト，下層は灰色粘土を基調とする。最下層には黒色有機物の堆積が認められたことから，土坑が埋め戻されず，一定期間，開口状態で使用されていたことが伺える。出土遺物はない。

970号土坑（ＳＫ970，第９図，図版２）

Ａ地区中央北西寄りに位置する。平面形は円形で，直径92㎝～1.02ｍ，深さ72㎝を測る。内面はほぼ垂直に掘り込まれており，北西側に掘形が僅かに崩れた部分がある。埋土上層は灰色粘土，下層はより還元化された灰色粘土が堆積し，炭化物が僅かに混入する。出土遺物はない。

2201号土坑（ＳＫ2201，第９図）

Ｂ地区南西に位置する。平面形は楕円形で，長径1.12ｍ，短径90㎝，深さ36㎝を測る。埋土上層は緑灰色粘土質シルト，下層はオリーブ灰色粘土質シルトを基調とし，褐灰色粘土や炭化物の混入がみられる。出土遺物は縄文土器小片がある。

2215号土坑（ＳＫ2215，第10図）

Ｂ地区南西に位置する。平面形は不整形で，長軸1.58ｍ，短軸92㎝，深さ26㎝を測る。埋土は西側が黄灰色粘土質シルトの混じる灰オリーブ色シルト，東側が褐灰色粘土の混じる緑灰色粘土質シルトで，それぞれに炭化物の混入がみられる。出土遺物は縄文土器小片がある。

2217号土坑（ＳＫ2217，第10・49図，図版３・15）

Ｂ地区中央西寄りに位置する。平面形はやや角のある円形で，直径96㎝～1.06ｍ，深さ32㎝を測る。埋土上層は東側の一部に緑灰色シルトが堆積し，他の部分には上層から下層にかけて炭化物の混じる暗緑灰色粘土が堆積する。中層の一部に褐灰色粘土が混入する。出土遺物は縄文土器（*1*）がある。

1 は深鉢胴部。上半が外反し，下半が丸みを帯びる器形で，沈線で直線と半弧状の文様を描く。後

期前葉である。

2245号土坑（ＳＫ2245，第10図）

Ｂ地区中央南東寄りに位置する。平面形は楕円形で，長径66㎝，短径40㎝，深さ16㎝を測る。埋土はオリーブ灰色粘土質シルトを基調とする単層である。出土遺物は縄文土器がある。

2246号土坑（ＳＫ2246，第９図）

Ｂ地区中央南端に位置する。平面形は不整形で，長軸4.30ｍ，短軸92㎝，深さ14㎝を測る。埋土上層は明オリーブ灰色粘土，下層はオリーブ灰色粘土を基調とし，明黄褐色・褐灰色・黄褐色粘土と炭化物の混入がある。出土遺物はない。

2256号土坑（ＳＫ2256，第10・49図，図版３・15）

Ｂ地区中央西端に位置する。平面形は不整形で，長軸1.78ｍ，短軸1.34ｍ，深さ33㎝を測る。埋土は水平堆積で，上層は緑灰色シルト，下層は暗オリーブ灰色粘土質シルトを基調とし，褐灰色粘土と炭化物の混入がみられる。下層から縄文土器（*2*）が出土している。

*2*は深鉢底部。外面に縄文と沈線文の一部がみられる。後期前葉と考えられる。

2257号土坑（ＳＫ2257，第９図，図版３）

Ｂ地区中央西寄りに位置する。平面形は円形で，直径1.20～1.34ｍ，深さ1.00ｍを測る。埋土上層はオリーブ灰色シルト，中層は緑灰色粘土質シルト，下層はオリーブ灰色粘土質シルトを基調とする。上層から中層にかけて炭化物の混入が多くみられる。出土遺物はない。

2258号土坑（ＳＫ2258，第11図）

Ｂ地区北東に位置する。平面形は楕円形で，長径2.13ｍ，短径1.72ｍ，深さ38㎝を測る。埋土は水平堆積で，上層の緑灰色シルトは土坑全体に，中・下層のオリーブ灰色粘土質シルトは中央の一段深い部分に堆積する。土層内に炭化物の混入が僅かにみられる。出土遺物は縄文土器小片がある。

2259号土坑（ＳＫ2259，第12・16図）

Ｂ地区中央南端に位置し，南側でＳＫ2264を切る。平面形は楕円形で，長径94㎝，短径65㎝，深さ28㎝を測る。埋土は水平堆積で，上層はオリーブ灰色シルト，下層は緑灰色粘土を基調とし，それぞれに炭化物の混入がみられる。出土遺物は縄文土器がある。

2260号土坑（ＳＫ2260，第11・49図，図版３・15）

Ｂ地区中央西寄りに位置する。平面形は不整形で，長軸4.64ｍ，短軸4.20ｍ，深さ55㎝を測る。埋土は水平堆積で，上層は緑灰色～暗緑灰色シルト・粘土質シルトを基調とし，上面側に多く褐灰色粘土が混じる。下層は青灰色粘土質シルト及び同色粘土である。土層全体に僅かに炭化物の混入がみられる。出土遺物は縄文土器（*3*・*4*），石剥片がある。*3*・*4*は深鉢。肥厚させた口縁部にＲＬの斜縄文を施し，その下に２条の沈線を引く。*3*の沈線内には三角形状に角張った節がある。後期前葉（気屋式）である。

2261号土坑（ＳＫ2261，第13・14・49・51図，図版３・４・13・14・112・113）

Ｂ地区中央西端に位置し，東側でＳＫ2262を切る。西側は調査区外にかかる。平面形は不整形で，長軸6.80ｍ，短軸2.30ｍ，深さ56㎝を測る。埋土は水平堆積で，オリーブ灰色シルトと褐灰色粘土の混土を基調とし，下層は還元化されて緑灰色・暗緑灰色を呈する粘土質シルトが主体となる。いずれも酸化鉄と炭化物の混入がみられる。

出土遺物は，縄文土器（*5*～*12*・*29*），磨製石斧（*13*），石錘（*14*），石核，石剥片があり，後期前葉（気屋式）を主体とする。*5*～*9*は深鉢。*5*は口縁部に円形の刺突と沈線，*6*は末端刺突をもつ沈

線を引く。*7*は口縁部に３条の連続刺突と２条の沈線を引き，胴部にはＲＬ斜縄文を縦位に施す。*5*・*7*は補修孔がある。*8*・*9*は口縁部にＲＬ斜縄文と２条の幅広の沈線を施す。*10*は台付鉢底部。摩滅が著しい。*11*は鉢か蓋。内面に把手状の装飾が付き，外面には浅い円形の連続刺突をする。*12*は深鉢底部。外面にＲＬの斜縄文を縦位に施し，外底面に網代圧痕を残す。*29*は深鉢。ＳＫ2262・2264出土破片と接合する。*13*は小型の磨製石斧刃部。先端に使用痕が多くみられる。石材は透閃石岩である。*14*は石錘。扁平な楕円形礫の長軸両端を打ち欠く。重さは56.88ｇを測る。石材は石英斑岩である。

2262号土坑（ＳＫ2262，第13・14・49・51図，図版３・４・13・14・112）

Ｂ地区中央西端に位置し，西側をＳＫ2261に切られる。平面形は不整形で，長軸4.52ｍ，短軸1.50ｍ，深さ44㎝を測る。埋土はＳＫ2261同様に水平堆積で，オリーブ灰色シルトと褐灰色粘土の混土を基調とする。下層は還元化されて緑灰色・暗緑灰色を呈する粘土質シルトが主体となる。いずれも酸化鉄と炭化物の混入がみられる。出土遺物は縄文土器（*11*・*15*～*17*・*29*），敲石（*18*），石剥片がある。

*11*は鉢か蓋。ＳＫ2261出土破片と接合する。*15*は口縁部に末端刺突のある沈線を引く深鉢。*16*は口縁部に三角形の連続刺突と２条の沈線を巡らせる。頸部近くに補修孔がある。*17*は深鉢底部。外面にＲＬの斜縄文を縦位に施す。*29*は深鉢。ＳＫ2261・2264出土破片と接合する。*18*は敲石。長細い礫の両端に叩打痕がある。側面に筋状の跡が残るが，いつの段階で生じたものであるか判断し難い。長さ11.0㎝，幅4.4㎝，重さ196.17ｇを測り，握りやすい形状をしている。石材はデイサイトである。

2264号土坑（ＳＫ2264，第12・16・50・51図，図版４・12・14・15）

Ｂ地区中央南端に位置し，北側をＳＫ2259に切られ，南側でＳＤ2263を切る。南東側は調査区外にかかる。平面形は不整形で，長軸3.20ｍ，短軸2.90ｍ，深さ32㎝を測る。埋土はほぼ水平堆積で，還元化された暗緑灰色・オリーブ灰色シルトにオリーブ黒色シルトが混じるものを基調とし，下層は粘土質が強くなる。中心部の中層には，炭化物を多く含む黒色シルト層が厚さ約７㎝で堆積する。土坑内で焼土は検出しておらず，周辺で生じた炭・灰が流れ込んだものと考えられる。上～中層から縄文土器（*23*～*38*）が多数出土している。

23～*38*は深鉢。*23*は頸部がくびれ，口縁部が外反する器形である。緩やかな４波頂の口縁部中央に渦巻文を配し，頸部に２条の平行沈線を引く。胴部にも平行沈線や半弧状の沈線を引き，平行沈線間には同じ施文具による列点を押し並べる。地文はＲＬの縄文であるが，胴上部から口縁部にかけて別原体による細かい縄文が施されている。*24*・*25*・*27*～*30*は肥厚させた口縁部にＲＬの斜縄文を施す。*24*・*25*・*27*の口縁部には２条の平行沈線を引き，*25*の沈線間には斜めの短沈線を引き並べる。平縁が多いが，*28*は緩やかな波状口縁となる。*28*・*30*は，縄文を口縁部には斜位に，胴部には縦位に施し，間を沈線で区切らない。*29*は幅広の沈線を１条押し引く。ＳＫ2261・2262出土破片と接合する。*31*～*36*は沈線文のある口縁部片。*31*・*32*・*36*は波頂部に渦巻文をもつ。*23*～*36*は気屋式の中でも新期段階に属するものであろう。*37*は堀之内式の鉢。大きく括れる頸部に，刻みのある隆線と８字の貼付文を持つ。

Ｂ　自然流路

10号自然流路（ＳＤ10，第15・49・52図，図版２・15・102）

Ａ地区北東に位置する。北から東に向かってＬ字状に弧を描き，調査区外へ抜ける。上面は攪乱を受けていたため，検出にあたって一部削平した。幅約８～16.5ｍ，深さ76㎝を測る。埋土上層は還元化されたオリーブ灰色粘土，下層は炭化物の混入する黄灰色粘土を基調とする。流路状の平面形態をとるが，埋土の断面観察からは水の流れがあった痕跡は見られないため，落ち込みと思われる。遺物

は上層から木製品（*39*・*40*），中～下層から縄文土器（*21*・*22*）が出土している。

39・*40*は柱。スギの原材を荒割りした後，両角を落として断面５角形に加工する。放射性炭素年代測定を実施し，いずれも685ＡＤ～780ＡＤ（１σ暦年較正年代）との結果を得ている[注1]。攪乱に伴う混入とみられるが，攪乱の原因が包蔵地確認調査及び本調査時の重機によるものと推測されることから，周辺に飛鳥時代末～奈良時代頃の遺構があった可能性が高い。

21・*22*は深鉢底部。全面摩滅が著しく，調整や文様は不明である。*21*の内面には炭化物の付着がみられる。

2263号自然流路（ＳＤ2263，第16・49図，図版15・112）

Ｂ地区南端に位置し，東側をＳＫ2264に切られる。東から西へ蛇行しながら延びる流路状の落ち込みである。最大幅2.64ｍ，深さ38㎝を測る。埋土はほぼ水平堆積で，上層から灰黄色シルト，にぶい黄色粘土，オリーブ灰色粘土，緑灰色粘土を基調とする。土層内には炭化物の混入が僅かにみられる。出土遺物は，縄文土器（*19*），敲石（*20*）がある。

*19*は深鉢底部。全体に摩滅するが，外面にＲＬの斜縄文，外底面に網代圧痕の一部がみられる。*20*は扁平な円礫の一端を敲石として使用する。重さは31.39ｇを計る。石材は頁岩である。

Ｃ　包含層出土遺物（第53図*41*～*55*，図版４・12・13・16・26・111・113）

縄文土器・土製品（*41*～*53*）　後期前葉を中心とする時期のものが出土している。*41*は深鉢。外傾する口縁部にＲＬの斜縄文を施し，浅い円形刺突と斜めの短沈線を引く。頸部に２条の平行沈線を引き，胴部にはＲＬの縄文を縦位に施す。*42*は深鉢胴部。頸部に括れがある。胴部には幅広の沈線で幾何学文を描く。*43*は台付鉢。外反する口縁部に円文と２条の沈線を引く。*44*・*45*は深鉢底部。*44*は外面にＲＬの斜縄文を縦位に描く。*46*は胴部が膨らみ頸部が括れる器形。器表面の摩滅が著しく，文様や調整は不明である。*47*～*50*は横位の平行沈線のある口縁部片。*47*は頸部以下に縦の沈線を引く。*48*は口縁部に指頭による窪みを連続して入れる。*49*は２条の平行沈線間に三角形の連続刺突を押す。*51*は注口土器。付け根が丸く膨らみを持っており，注口部の断面は楕円形である。

*52*は円盤状土製品。周囲を打ち欠いて丸く成形する。摩滅しており文様不明。重さ15.4ｇ。*53*は土偶。頭部と両腕を欠損する。体部には強い反りがあり，腹部と両脇の３面に長い三角形状の抉りがある。富山県立山町岩峅野遺跡に類例があり[注2]，中期後葉から後期初頭の時期が考えられる。

石製品（*54*・*55*）　*54*は石錘。扁平な楕円形礫の長軸側の両端に剥離を加える。裏面が全面剥離して薄くなっているが，加工中に生じたものと考えられる。重さは31.55ｇを計る。石材は砂岩である。*55*は石鏃。無茎で基部に抉入のある凹基式である。やや縦に長い形状で，抉入は浅い。石材はガラス質の流紋岩である。

注１　第二分冊　自然科学分析　株式会社加速器分析研究所　「放射性炭素年代測定」１σ＝68.2%probability，以下同じ
注２　富山県教育委員会　1976『富山県立山町岩峅野遺跡緊急発掘調査概要』

（2）弥生時代

弥生時代の遺構は溝２条があり，それぞれＡ地区の東端と西端に位置する。埋土下層から弥生時代後期後半～終末期の土器や木製品など多量の遺物が出土している。

Ａ　溝

２号溝（ＳＤ２，第19～21・54～98・102・144図，図版５・６・27～38・40～64・66・67・71・75・78・80・83・86・87・94・104・111・112）

Ａ地区北西端に位置し，北西から南西へ向かって緩やかに弧を描いて流れる。最大幅9.7ｍを測るが，下層は幅約５ｍで一定して掘り込まれている。深さは1.8ｍを測る。埋土上層は茶色味の強い黒褐色粘土，下層は黒褐色粘土を基調とし[注3]，いずれも自然木や種実，植物の腐食した有機物を多量に含む。これらについては自然科学分析を実施している[注4・5]。埋土の厚さは上層20㎝，下層1.1ｍを測る。上層からは，特に第19・20図に示した１・２層を中心に，弥生土器（*201～219*），須恵器（*221～255*・*1389*），土師器（*220*），珠洲（*455*），木製品，石製品（*405*・*406*），鞴羽口，鉄滓が出土した。下層からは同様に７層を中心として，弥生時代後期後半～終末期の土器（*56～200*）が多量の木製品（*256～404*）を伴って出土した。下層出土土器の時期は後期後半の法仏式を主体とし，一部月影式に降るものがみられることから，ＳＤ２は後期後半頃に掘削され，終末期に埋没したと考えられる。上層と下層の間には一時堆積が止まったような平坦面がみられる。古代以降の遺物は平坦面よりも上の土層から出土していることより，ＳＤ２埋没後から中世までの長い期間，溝の跡が浅い窪地になっており，不要物などの投棄場となっていたことが伺える。

なお，ＳＤ２掘削時に，自然木が溝内側の壁面に潜り込んでいる様子がみられたため，調査終了後に断ち割りを行った（第21図ｄ－ｄ′断面図）。その結果，溝に囲まれた平坦地は，黄灰色・灰黄色を基調とする粘土質シルト・粘土・粗砂が互層をなす水成堆積であることが判った。堆積土は堅くしまった土で，遺物は出土していない。おそらく十三平野の形成段階において堆積したものであろう。

弥生土器（第54～60図*56～219*，図版６・27～38）

甕（*56～104*・*201～204*）　*56～64*は擬凹線甕。胴部調整は外面にハケメ，内面にケズリを施し，薄く仕上げる。*56～62*は口縁が直立し端部は丸みを帯びるが，*63*・*64*は口縁が外反し，*64*の端部は尖縁となる。*60*・*64*は口縁部内面に指頭圧痕がある。*59*・*61～63*は肩に刺突文を持つ。

*65～76*はくの字口縁の甕。*65～74*は付加状口縁，*75*・*76*は丸縁である。胴部調整は主に外面ハケメ，内面ケズリであるが，内面にハケメを施すものもある（*67*・*68*・*73*）。*66*は外面に厚く付着する炭化物について放射性炭素年代測定を実施し，235ＡＤ～335ＡＤ（１σ）との結果を得ている[注5]。*72*は胴部に焼成後穿孔を行う。

78～104・*201～204*は有段甕。*79*のみ口縁部外面に波状文を施し，他は全て無文である。口縁部は直立するものとやや外傾するものがあり，外傾するものの中には口縁部の段が不明瞭になっているものがある（*84*・*95*・*101～104*）。口縁端部の形状は，大半は丸縁であるが，*78*・*82*・*92*は上面を軽く面取りし，*83*・*89*は尖縁となる。胴部調整は主に外面ハケメ，内面はケズリであるが，ハケメの後ケズリ調整されるもの（*82*・*89*）もある。*81～84*は肩に刺突文を持つ。*201*は底部に穿孔する。上層から出土した*203*についても，外面に付着する炭化物の放射性炭素年代測定を実施し，130ＡＤ～260ＡＤ（１σ）との結果を得ている[注5]。

壺（*105～144*・*205～208*）　*105～116*は短頸壺。口縁部は直立或いは外反するが，大きく朝顔形に開くもの（*116*）もある。調整は，外面に縦位か斜位のハケメを施し，口縁部内面に横位のハケメ，

注３　遺物の出土層位の欄に，上層出土のものは「茶色粘土層」，下層出土のものは「黒色粘土層」と記している。
注４　第二分冊　自然科学分析　パリノ・サーヴェイ株式会社　「木製品の樹種同定，種実遺体分析，微細物分析，昆虫同定，骨同定」
注５　第二分冊　自然科学分析　株式会社加速器分析研究所　「放射性炭素年代測定」

胴部内面にケズリを施すものが多い。*110*の口縁部には，端部に対して垂直方向のヘラによる刻みが２箇所あり，内面には指頭圧痕が残る。*111*の口縁部には工具圧痕が残る。*112*の頸部内面には粘土の継ぎ目が残り，外面には記号の一部がみられる。*116*の外面には斜位のハケメ調整と煤の厚い付着がみられるが，内面は摩滅しており調整不明である。

*117・205*は擬凹線壺。*117*は摩耗するが口縁部内面にハケメが僅かに残る。*118*は壺か甕の口縁部。外面はハケメの後，頸部付け根を撫で上げる。口縁部内外面は横ナデする。

*119～141・206・207*は有段壺。*119*は甕の器形であるが，外面にハケメの後ミガキを施しているため壺とした。*120～122*は段を持つ口縁部が直立し，端部を丸く収める。調整は外面斜位のハケメ，内面横位のハケメで，口縁部は横ナデを施す。*122*の口縁部外面にはミガキが加えられる。*123*は短頸壺。短い口縁部が直立し，中程に僅かに段が認められる。頸部外面の段から下はハケメの後横ナデ，胴部はハケメの後ミガキを施す。内面はケズリにも似た強いナデである。*125～141・207*は内外面にミガキを施す。有段口縁の端部が外傾するものと外反するものとがある。*136・137*は口縁部を強く外反させ，有段部が突出する部位で粘土を継ぎ二重口縁状にする。*125*は，外面は斜位のハケメの後肩部にのみミガキを施し，内面は口縁部を除いて粗いミガキを施す。*136*の胴部は間延びした形状であるが，残存率が低いことから，体部の歪みが補正されずにそのまま図化された可能性がある。*140・142・208*は壺胴部。口縁部を欠損するが，頸部の付け根は割れ口が摩耗して丸くなっており，欠損後も使用していた可能性がある。*141*は口縁部を僅かに欠損するのみでほぼ完形の小型壺。全面を丁寧にミガキ調整し，赤彩を施す。*142*は内外面ハケメ調整後，外面肩部に粗いミガキ，下半にナデを施す。*208*は摩滅するが外面にミガキと赤彩を残す。頸部以下の完形品であるため，内面調整は不明である。

*143・144*は台付壺脚部。有段脚（*143*）と外反脚（*144*）がある。いずれも外面ミガキ調整であるが，*144*は摩滅する。内面調整は，*143*はナデ，*144*はハケメである。

器台（*145～150・209・210*）　*145*は外反器台の受部。内外面ミガキで，脚部内面にケズリとハケメを施す。*146*は脚部。受部と裾部を欠損し，全体に摩滅が著しい。内外面に薄くハケメが残り，外面はミガキ調整を加えているようである。*147*は外反脚で端部は丸く収める。外面はミガキ，内面は横位のハケメの後，粗く斜位にハケメを施す。*148*は外傾する口縁部に擬凹線を持つ。*149・150*は有段口縁の受部。内外面に丁寧なミガキを施しており，*149*は赤彩する。*209*は有段器台。内外面にミガキを施しているようであるが，器面の荒れが著しく調整不明である。*210*は透孔を３箇所あける。

高杯（*151～174・211～215*）　*151～153・211*は杯部が小型のもの。口縁部がやや外反気味に延び，大きく開く脚部を持つと思われる。*152・153*は内外面に丁寧なミガキを施し，赤彩する。*154・155*は口縁端部内側に粘土帯を貼って肥厚させるもの。*154*は縁帯が水平に巡り，*155*は外反させて端部が下がる。*156～160*は有段高杯。*156*は口縁部が大きく開いて延び，脚部の裾端部は外反させる。端部の面取りは弱く丸みを帯びる。脚部には透孔を４箇所あける。内外面ミガキであるが，摩滅して不明瞭な部分が多い。脚部内面にはヘラ状の工具痕がみられ，杯部裏面を棒状具で突いて直径1.5㎜の小孔をあけている。*157*外面の有段部上方には，ミガキの前調整のハケメが残る。*160*は有段部の屈曲が弱く，口縁が大きく外方に伸展する。内外面にミガキを施し，赤彩する。杯部中央の脚との接合部に円板充填の剥離がみられる。*161～163*は有段鉢形高杯。有段部の屈曲は弱く，口縁部は*161*は外傾し，*162*は大きく外反する。*163*は全体に摩滅が著しいが，杯部内面と外全面にミガキと赤彩が認められる。脚裾部には上下に３条ずつ沈線を巡らせ，２個１対の透孔を３箇所にあける。*164～174・212～215*は高杯の脚部。基部は*164*のみ横位のミガキで，*165～174・212・213*は縦位のミガキを施す。*166・172*

は透孔を4箇所，*174*は3箇所，*171*は2箇所あける。*167*は棒状脚で，杯部との境が水平方向にきれいに剥離する。*169*・*170*・*213*は有段脚。*169*・*170*は有段部に沈線を3条引くが，*169*は浅く途切れがちである。*170*は2個1対の透孔を3箇所にあける。

鉢（*175*～*187*・*216*・*217*）　*175*～*182*は有段鉢。口縁部は，*175*～*180*が外傾し，*181*・*182*が垂直に立ち上がる。内外面ミガキを施すものが多いが，*178*・*181*は外面ハケメ，内面ケズリを行うにとどまり，ミガキを施していない。*176*は残存状態の良い完形品。*179*は全面ミガキで赤彩を施しているが，摩耗が著しい。*180*～*182*の外面には煤が付着する。*183*はくの字鉢。器面が荒れており調整が不明瞭だが，外面にハケメの後ミガキを施していることが判る。*184*は環状把手のつく有段鉢。内外面ハケメ調整で，口縁部は横位にハケメを施す。把手部分には指頭圧痕が残る。*185*・*186*は平底の鉢で，*185*は完形品。*185*の体部は直線的に延び，体部を粗いハケメで整形した後，口縁部を1周撫で回す。内外面には煤の付着がみられる。*186*は体部が内湾して椀形となる。摩滅して調整不明だが，内底面に煤の付着がみられる。*187*・*216*・*217*は有孔鉢の底部片。*187*は斜めに穿孔される。

蓋（*188*～*200*・*218*）　有鈕蓋である。*188*は摘みの中央を窪ませ，縁に刻みを入れ，屈曲部に穿孔する。胎土は砂粒を含まない精良なもので，内外面に丁寧にミガキを施す。*189*～*197*も摘みの中央を窪ませる。体部は直線的に延びるものが多いが，*193*は張りを持っており，笠形となるかもしれない。外面調整はミガキを施すもの（*189*～*191*・*193*・*196*）が多いが，内面にミガキを施すものは*196*のみで，ハケメやケズリに留めるものが多い。*190*・*195*の内面，*192*の内外面には煤が付着する。*192*の摘み中央部には，内面から外面に向けた焼成前穿孔がある。*198*～*200*・*218*は摘みの中央に窪みを持たないもの。*198*の外面にはハケメ，*199*の内面にはミガキを施しているが，摩耗して調整不明な部分が多い。*199*の外面には赤彩痕が残る。

ミニチュア土器（*219*）　壺形の完形品。外面にミガキの痕跡が僅かに残るが，摩滅が著しい。

土師器（第60図*220*，図版94）

上層から出土している。須恵器杯写しの器形で，砂粒を多く含む特徴的な胎土である。平坦で大きい底部から僅かに外反する体部が立ち上がる。8世紀後半。

須恵器（第60・61・144図*221*～*255*・*1389*，図版66・67・71・75・78・80・83・86・87）

上層から出土している。*221*～*229*は杯Ｂ蓋。*221*～*225*は肩部から頂部にかけて回転ヘラ削りが施されるもの。擬宝珠状の摘みを貼り付ける。端部は短く折り曲げられる。*221*～*223*は転用硯で内面に墨が付着する。*221*・*222*は完形品で，特に*221*の内面は硯としての使用により非常に滑らかである。*223*の内面中央にはヘラ記号「×」が認められるが，使用による摩滅で浅く薄くなっている。内全面に墨が付着しているほか，外面にも墨痕が残る。*224*も墨の付着はみられないが内面が滑らかであり，転用硯の可能性がある。*226*～*229*は頂部に回転ヘラ切り痕を残し，端部は丸みを帯びる。*229*にはボタン状の摘みを貼り付ける。*228*の内面には漆と思われる黒色の付着物がある。

230～*237*は杯Ａ。口径10.8～13.8㎝のものがある。*230*は口径13.8㎝を測る大きいもの。器形は浅く，体部が直線的に延びる。*232*～*237*の体部は開き気味になる。

238～*244*は杯Ｂ。*238*は口径16.4㎝を測る大型のもの。*239*・*240*は転用硯。高台内に墨が付着する。*242*～*244*は口径11.1～11.6㎝の小型のもので，高台内に墨書がある。*242*は「田□［人ヵ］」，*243*・*244*は「□万呂」。

*245*は小型瓶。肩部と胴部中程に沈線を巡らせる。*246*は壺蓋。天井部は器表面が爆ぜて荒れているが回転ヘラ削り調整されていると思われ，中程に沈線が巡る。頂部には摘みの欠片が残る。胎土内に

気泡が含まれ，焼き膨れが目立つ。

247・*248*・*252*は壺。広口で，口縁部が短く直立する。*247*の肩部には沈線，*248*には凸帯が巡る。*249*は双耳瓶。肩部から胴部下半を回転ヘラ削りする。外底面に焼成時の融着物があるため，正立しない。*250*は壺か瓶の底部。外底面に回転糸切り痕を残す。*251*は横瓶。閉塞円板のみられる胴部片で，内面に扇状の当て具痕を残す。*253*～*255*は甕。*253*の肩部は，叩き成形の後カキメを施す。口縁部内面にも薄くカキメがみられる。*254*・*255*は口縁部外面に波状文を引くが，*255*は波状文の下に沈線１条を巡らせる。

木製品（第62～98図*256*～*404*，図版６・40～64）

農具（*256*～*261*）　*256*は直柄平鍬。中央上方に円形の柄孔と，泥除を装着する方形の孔が一部残存する。柄孔の周囲は明瞭な段を持って隆起する。刃幅の広い広鍬で，隆起部の両脇に大きな突起がつく。加工痕は残存していないが，仕上げの磨きが隆起部脇にみられ，前面には泥除をあてがう段が残る。樹種はコナラ属アカガシ亜属である。放射性炭素年代測定を実施しており，50ＢＣ～55ＡＤ（１σ）との結果を得ている[注6]。

*257*は泥除。*256*と同一地点から出土しており，結合して使用されていた可能性が高い。肩部が丸みを帯びた長方形を呈し，柄孔の脇に鍬に装着する小孔が僅かに残存する。樹種は*256*と同様のコナラ属アカガシ亜属である。

*258*は臼。胴部中央が括れをもつ鼓形で，内面中央の搗き部は一段深く落ち窪む。芯持丸木を刳り抜いていると思われるが，残存状態が悪く，加工痕等は残っていない。樹種はトチノキである。

259～*261*は編台目盛板。*261*は5.7～8.7㎝の間隔で７箇所に刻みが残る。*259*は３箇所，*260*は１箇所の刻みが残る。樹種はいずれもスギである。

食事具（*262*）　*262*は杓子。身の口縁に対し，柄が鈍角に取り付く横杓子である。柄は細く扁平で，後面に稜を持つ断面三角形状である。柄部から身部にかけて緩やかに幅が広がり，身部は縦長の楕円形状となる。柄から続く後面の稜は，身部から柄部にかけての緩やかな厚みの変化を生み出し，破損防止の役割を果たしているとされる[注7]。全面に幅約３㎜の加工痕がみられ，身の口縁部外面には横方向の仕上げの磨きがみられる。加工痕が明瞭に残っていることや柄や側面の状態から，使用頻度の少なさが感じられる。樹種はケヤキである。

容器（*263*～*290*）　*263*・*264*は蓋。*263*は口径30㎝を優に超える大型の被せ蓋である。端部は方形で，短く垂下する。残存範囲が少ないものの，中央に向かって盛り上がるような傾斜がみられる。刳物桶の蓋である可能性が高く，楕円形となるようである。樹種はヒノキ科である。*264*は小型の栓蓋。内面に方形の短いかえりがつく。口径12.2㎝，器高2.4㎝を測る。内面は平坦に加工されているが，外面は緩やかな丸みをもってドーム状に盛り上がるため，中心部の器壁がやや厚くなっている。外面の加工痕は残存していないが，内面には幅約３㎜の加工痕が明瞭に残る。樹種はモクレン属である。放射性炭素年代測定を実施しており，30ＡＤ～210ＡＤ（1σ）との結果を得ている[注6]。

*265*は槽。スギ材を横木取りしており，木目直交方向にあたる短辺には，把手と考えられる隆起の基部が残る。外面には幅約1.3㎝単位の加工痕が明瞭に残り，底部を平坦に仕上げている。側面には幅約３㎜の細かい加工痕が残り，内面には仕上げの磨き調整がみられる。

266～*282*は刳物桶。全て縦木取りで，樹種は*272*はアスナロ，他はスギである。*266*は器高12.1㎝，*267*は器高17.5㎝を測る小型品で，口縁部に蓋を緊縛する紐孔突起をもつ。平面形はいずれも円形で，立面はやや丸みを帯びた筒型である。口径を推定すると*266*が10.2㎝，*267*が15.0㎝である。*266*の紐孔

注６　第二分冊　自然科学分析　株式会社加速器分析研究所　「放射性炭素年代測定」
注７　石川ゆずは　2004「惣領浦之前遺跡出土の木製品について」『紀要　富山考古学研究』第７号　財団法人富山県文化振興財団

突起は口縁端と同じ高さにあるため，置き蓋もしくは栓蓋との組み合わせが考えられる。紐孔突起の孔の形は円形で，先細の工具で上から下方に向けて穿孔しており，先端は突起部を貫通後，桶体部に至る。内面には幅約６㎜の加工痕が明瞭に残り，口縁部内端を一段厚く仕上げている。*267*の紐孔突起は口縁から少し下がった位置に付くため，被せ蓋との組み合わせが考えられる。加工痕は突起上面と内面に残り，口縁部内端は*266*と同様に一段厚く仕上げている。

*268*は刳物桶未成品。器高30.0㎝を測る。平面形は楕円形で，長辺に内傾する把手が付く。把手は大まかな形を作った後，穿孔され始めた段階で終わっている。側板内面下部の底板装着部にあたる段は不明瞭で，削り込んで段を深くする加工の途中であることが窺える。把手部分と内面に幅約1.5㎝の加工痕が明瞭に残る。

269～*276*は器高19.8～26.6㎝を測る刳物桶で，平面形は楕円形をとるものが多いようである。側面がやや内湾するもの（*270*・*271*）と，直立するもの（*269*・*274*～*276*）がある。*269*は内面に粗い加工痕を残しており，未成品である可能性が高い。上位に円孔が穿たれていることから，加工途中で欠損し，転用目的で穿孔された可能性がある。*270*は２箇所に紐孔突起の一部が残る。口縁から少し下がった位置に付くことから，*267*と同様に被せ蓋が考えられる。側板外面の下部には，７条の小孔列がＬ字状に並ぶ。文様であろうか。*272*・*273*は外全面と内面の一部が炭化する。*272*内面下部には底板装着痕とみられる浅いへこみがみられる。*274*は側板上方に断面方形の木釘が２箇所残り，その間には釘穴とみられる穴が１箇所空く。別作りの把手が取り付けられていたか，転用かは不明である。*276*は内面の広い範囲が炭化する。

277～*280*は器高28.5～30.0㎝を測る刳物桶で，平面形は楕円形である。口縁部がやや内湾するもの（*277*・*278*）と，直立するもの（*279*・*280*）がある。いずれも口縁部外面に緩やかな段を持ち，口縁を心持ち薄く仕上げていることから，被せ蓋との組み合わせが考えられる。*277*の内面下部には底板装着の圧痕が残る。*279*の下部には底板の圧痕はみられないが，方形の穿孔の一部が残る。穿孔の位置は楕円形の長辺中心付近とみられ，栓か，あるいは支木を通して底板を固定したものと考えられる。なお*278*は放射性炭素年代測定を実施しており，90ＢＣ～20ＡＤ（1σ）との結果を得ている[注8]。

*281*は口径32.3㎝，器高41.4㎝を測る大型の刳物桶である。平面楕円形で，短辺側の胴部に一対の把手が作られる。把手の細かい形状や作られる位置は左右でやや異なっているが，おおむね下側は胴部と垂直に外に張り出し，上側は緩やかに胴部上方に繋がる形状である。これは把手にかかる荷重を分散させ，破損を防ぐための工夫と思われる。内面下部の長辺中央にあたる位置に，貫通しない枘孔があく。底板を下からはめ込んだ後，落下しないよう枘孔に栓を入れて固定したものと考えられる。*282*も器高47.4㎝を測る大型の桶である。内面下部に木釘が残存し，外面にはみられないことから，内側から木釘を打ち込んで底板を固定していたと推定される。放射性炭素年代測定を実施しており，20ＡＤ～130ＡＤ（1σ）との結果を得ている[注8]。

283～*290*は楕円板。刳物桶の蓋板か底板と考えられる。樹種はすべてスギである。長軸の長さは最小で22.7㎝（*286*），最大で55.7㎝（*290*）を測る。*283*・*285*・*288*～*290*は表裏に加工痕が残る。*283*は側面に木釘跡とみられる穴が空いており，底板と思われる。装着する際，外側から木釘を打ち込まれたと考えられる。*284*の裏面には浅いへこみがみられる。

祭祀具（*291*～*326*）　剣形・刀形の武器形，盾，団扇形がある。朱漆や朱を塗るなど，威儀具と評価できるものがある。

*291*は剣形。刃先にわずかに加工痕が残る。刃と茎の境には横に細く筋状の溝が１条入る。茎端部

注８　第二分冊　自然科学分析　株式会社加速器分析研究所　「放射性炭素年代測定」

には刃物による切断痕と折り取った際の凸部がみられるため，欠損ではないと判断した。朱漆塗り盾（*303*）と同地点から出土している。*292*～*298*は先端を尖らせるように加工をして，左右対称に仕上げる。茎や把にあたる部位が残存していないため全体形は不明であるが，剣形としておく。刃部の形態は，刃先に向かって緩やかに幅を増しているものが多い。加工痕は*292*の側面下部に残るのみで，他にはみられない。

*299*は刀形の刃先か。先端へ向かう加工痕が明瞭に残る。*300*～*302*は刀形。*300*は棟側を把から直線的に伸ばし，刃部を表裏両面からの削りによって作り出す。茎は刃の側を内湾気味に細くする。*301*は加工を片面のみに施して裏面には行っていないことと，刃が尖っていないことから，未成品と思われる。土圧により軽く湾曲し，刃先端が欠損する。加工痕はやや粗いものが明瞭に残る。下部には刃側に２箇所，棟側に１箇所の抉りを入れ，茎を表現する。*302*は剣形の転用と想定されるものである。茎は左右対称で剣形の形状を残すが，刃部は片側を削って刃を作り出し，反対側には粗雑な加工を施して棟とする。武器形木製品の樹種は，*300*がスギまたはヒノキ科，他はすべてスギである。

303～*316*は盾。盾は17点出土しているが，そのうち14点を図示した。全て芋本分類のＢ類に該当する[注9]。薄いつくりで，盾の表裏には全面に主軸と直交する小孔列がみられるのが特徴である。この小孔列は糸などで綴じ合わせることにより，敵の矢が命中した際に盾が木目に沿って割れ裂けるのを防止するための工夫であるとされる。樹種は全てモミ属である。

*303*は表裏面共に朱漆[注10]を塗布する盾。平らな下縁部が残存していることから全体形は長方形と推定され，木目と直交する方向に緩やかな湾曲がみられる。内湾面に斜め１方向からの加工痕を明瞭に残す。加工単位は幅約３㎜と細密である。小孔列は主軸直交方向に17列確認でき，そのうち７列は下縁に密接して４㎜間隔で並び，10列はその上に5.5～６㎝の間隔で並ぶ。孔と孔の間には紐状の綴じ痕が明瞭に残っており，比較的きつく緊縛されていたことがうかがえる。また，紐痕の部分は朱漆が付着していないことから，綴じ付け後に朱漆が塗布されたことが判る。出土時，内湾面を下にしており，別材の装飾板がこの面に付着して残存していた。装飾板は厚さ２㎜の薄板で，長辺中央に括れがある長方形状をなし，全面に盾本体と同様の緩やかな湾曲がある。表面には長側辺の括れに沿って，縦に２条の，断面三角形状の凸帯が作り出されている。装飾板にも８列の小孔列がみられ，全ての小孔が盾本体と同位置にあることから，合わせて綴じることにより接着されていたと考えられる。朱漆は装飾板の表面にのみ施されており，裏面にはみられないことからも，装飾板の綴じ付け後に塗布されたことが判る。盾本体には特徴的な無彩色部分の形が残されており，別の素材を用いて盾に装飾を施していたことが推測できる。内湾面の無彩色部分の形は，下半に残る装飾板から左側縁が直線状に続き，上部の半円形に至る。半円形の無彩色部分は直径約7.5㎝を測る。内湾面の中央部では，無彩色部分が直交する方向にも約２㎝の幅で直線的に延びている。ここから上位に小孔が多くあいている。小孔は貫通しているものが多いことから，当初は矢などによる損傷とも考えたが，孔の形状が鏃の貫通に伴う菱形ではないこと，上半部にのみ孔が認められることから，装飾と捉えた方がよいとの指摘を受けた。鳥の羽などを挿して飾ったものであろうか。また，内湾面の下端縁には黒色の漆状の物質の付着が確認できる。この物質は朱漆を塗布した上から塗られており，表面が毛羽立つように荒れている。黒色物質について分析は実施していないが，もし漆であるならば帯状のものを貼り付けるための接着剤として用いられていたものであろうか。また外湾面の上端と下半にも無彩色部分があり，何らかの部品が結合していた可能性も考えられる。盾本体については，放射性炭素年代測定を実施し，80ＡＤ～220ＡＤ（１σ）との結果を得ている[注11]。

注９　芋本隆裕　1996「甲と楯」『弥生文化の研究』第９巻　弥生人の世界　雄山閣
注10　第二分冊　自然科学分析　漆器文化財科学研究所　「漆器・漆製品の科学分析」
注11　第二分冊　自然科学分析　株式会社加速器分析研究所　「放射性炭素年代測定」

*304*は側縁が緩やかな弧を描く盾。上側縁部分と思われ，横と縦の２方向への湾曲がみられる。外湾面には斜め１方向からの加工痕が残るが，内湾面には湾曲を作り出すため，多方向から加工を施している。加工単位は幅約５㎜と細密である。小孔列は変則的で，横位に13列，側縁に沿って縦位に６列を施しており，孔と孔の間には紐状の綴じ痕が残る。孔列にかかるケビキは内湾面に引かれ，明瞭に残っていることから，外湾面を表面として意識して作っていること，内湾面から外湾面へ向けて穿孔している可能性が高いことが判る。縦位の小孔列下部には，重複するように更に５列の小孔列を横位に施しており，外湾面の綴じ痕と内湾面のケビキから推測すると，この範囲の綴じは縦横に交差していたと考えられる。

*305*は長さ79.7㎝を測る盾の断片。側縁部が残存していないため，全体形は不明である。木目と直交する方向に緩やかな湾曲がある。内湾面には明瞭な加工痕が残るが，外湾面には削った後に磨きの再加工を施しており，加工痕は不明瞭である。小孔列は主軸直交方向に17列確認でき，5.7㎝の等間隔で盾全面に平行に施すのを基本とするが，中央やや上寄りの５列のみ約８㎜間隔で密に施す。外湾面には紐の緊縛痕がはっきりと残る。孔列にかかるケビキは殆ど認められないが，外湾面に薄く残っており，外湾面からの穿孔と考えられる。上部と中央の２箇所に直径３㎜の木釘が残存しており，別材の縦型把手が取り付けられていたと考えられる。放射性炭素年代測定を実施しており，70ＡＤ～220ＡＤ（1σ）との結果を得ている[注12]。

306～*316*は盾の断片。*306*・*307*・*309*・*310*・*312*～*314*は一縁辺が残る。裏面に加工痕とケビキ，小孔列に紐の緊縛痕を残すものが多い。*306*～*313*は小孔列から外れた位置に孔を穿っており，このうち径の大きなものは補修孔の可能性もある。*307*については放射性炭素年代測定を実施しており，80ＡＤ～210ＡＤ（1σ）との結果を得ている[注12]。

*317*は朱が付着する不明品。全体形は歪みのある楕円形状をなし，片側縁を残す。肩甲あるいは楕円形の容器であろうか。短辺側に芯を持ち，この芯を中心として加工しているようである。内面には細い工具による多方向からの加工痕が残る。器厚は一定ではなく，芯の部分が最も厚みがあり，1.5㎝，長辺下部に向けて器壁を薄く加工し，５㎜を測る。外面には多数の孔を穿ち，器壁の薄い長辺下部に穿たれた孔は一部貫通する。穿孔方向は一定ではないが，左斜め上方或いは左斜め下方から穿孔するものが多い。短辺側は縁まで穿孔が及ぶが，長辺側には縁に帯を作出し，帯部の段に沿って多数穿孔する。これらの孔は*303*と同様に鳥の羽などを挿して装飾した痕跡であろうか。縁帯部の表面には丁寧な斜め方向の削りが残り，朱の残存も良い。樹種はモクレン属である。

318・*319*は団扇形[注13]。*318*は中央に長方形の孔が２箇所あけられる。上端が切断され，両側縁が欠損するが，縦長の長方形状の形態をとるようである。身部下端には，側縁に向かって薄く作られた部分が残る。上端に切断痕が残されていることからも，転用を目的に再加工された可能性がある。軸部には，装着時のずれを防ぐための段と摩耗痕がみられる。*319*は楕円形で，中央に半円形の孔をあける。中心部に厚みを持たせて側縁に向かって薄く加工する。断面が凸レンズ状の形態をとるが，全面に粗い加工痕が目立ち，未成品の可能性がある。上下端とも欠損しており，特に下端は直線的な欠損をみせることから，切断痕の可能性が高い。団扇形の製作途中に転用したものか。*318*・*319*の樹種はスギである。*319*は放射性炭素年代測定を実施し，20ＡＤ～130ＡＤ（１σ）との結果を得ている[注12]。

*320*は団扇形の未成品か。全体を粗く成形する。樹種はスギである。

321・*322*は団扇形の竿もしくは柄。先端を三角形状に削り出し，緊縛のための浅い溝をもつ。一面を平坦に加工しており，断面半円形をなす。樹種は*321*がスギまたはヒノキ科，*322*がスギである。

注12　第二分冊　自然科学分析　株式会社加速器分析研究所　「放射性炭素年代測定」
注13　山田昌久氏により，組合せ式鋤から団扇・武器形として分離されたものを示した。山田昌久　2002「組合せ式針葉樹製鋤の再検討」『月刊考古学ジャーナル』№486

323・*324*は長細い加工板の両側に抉りを持ち，ナスビを縦割りしたような形態をとる。丁寧に加工しており，幅約１㎝の加工痕を明瞭に残す。*325*・*326*はこれに類するものである。樹種は*324*がスギまたはヒノキ科，他はすべてスギである。

建築部材（*327*～*347*）　すべてスギ材を加工したものである。*327*は吊り棚もしくは窓枠状の部材。上下端は欠損しており，本来の構造は不明である。幅３～５㎝，厚さ１～1.5㎝の縦材が13本並び，縦材のほぼ中央に横材が１本残る。背面側にも同様に加工された材があったため図化したが，斜めに配置されているため，原位置ではないことも考えられる。

*328*は梯子。ＳＤ２のｂ－ｂ′断面にかかる位置から出土した。表面を削り込んで足掛けを作り出しており，２段残存する。梯子上端は両側から削り込んで細く仕上げる。上下端は二次的に切断され，中央には大きく枘孔があけられており，いずれも転用を目的としたものと考えられる。

*329*は蹴放し。外縁は曲線に加工されており，下端に円形の軸孔の一部が残る。孔の直径は約10㎝を測る。外縁と軸孔の中間に方形の穿孔を施す。

*330*は上下端に円形の孔がある板材。*331*～*342*も板材で，表裏に手斧痕を残し，円形や方形の穿孔があるものが多い。厚さが1.7～３㎝と薄く，壁材である可能性が高い。*341*は片面が荒れて加工痕が不明瞭となっており，この面が屋外側に配されていたことが伺える。

343～*345*は一端を逆凹字状に加工する部材。*346*・*347*は板材。*346*は表裏に手斧痕を残し，上下端を斜めに切り落とす。

部材・用途不明品（*348*～*391*）　*348*～*353*は方形の穿孔や側面に抉りのある板材。*354*～*358*は角のある棒材もしくは板材に方形の穿孔を施すもの。樹種はすべてスギである。*356*・*358*は一部が被熱する。*359*は方形の板材の一角を四角く切り取り，中央端寄りに丸い穿孔を施す。下端中央に方形の穿孔が２箇所残存することから，転用を目的として下端を切断したと考えられる。しかし下端の加工痕は粗く，加工途中とも思われる。また４箇所に別材で埋め木をして樹皮を挟んで固定している。表側の樹皮に弛みがあることから，中に横材をあてがって締めていたと思われる。本体・埋め木とも樹種はスギである。*360*・*361*は方形の穿孔がある。*362*・*363*は形を整えた板材の端寄りに丸い穿孔を複数施す。*364*は側面に抉りを多く入れる。*365*～*367*・*371*は側面から大きく抉りを入れる。*368*・*369*は側辺が曲線状となる。*370*・*373*は均整のとれた形状の板材である。樹種はほとんどがスギで，*369*のみモミ属である。

*372*は槽未成品。スギ材の内面を大きく削って窪みを作り出す。内面が一部炭化する。*374*・*375*は壁材の転用品。*374*は側面が炭化する。*375*は表面に細かな傷が多数みられることから，作業台として使われたと考えられる。裏面に施された浅い削りによる窪みと穿孔の位置が一致しており，この窪みに横桟を当てて穿孔部分で固定し，作業台の脚などとしていた可能性がある。樹種はスギである。

376～*380*は板材。*376*は表裏に手斧痕を残す。*377*は下端に手斧切りの跡を残すが上端側は平滑な切断面となっており，鋸引きの可能性が高い。弥生時代の鋸引きの資料として稀少である。放射性炭素年代測定を実施しており，15ＡＤ～85ＡＤ（１σ）との結果を得ている[注14]。*379*・*380*は表裏に細かい傷がみられる。

381・*388*は断面多角形に削り出した直棒。*381*は上部に浅い窪みを作り出して先端を有頭状に加工する。先端部のみ摩滅が進んでいることから，紐で縛るなどして他部品と固定し，使用された可能性がある。*382*～*384*・*389*～*391*は棒材。*383*は両側面が割れており，あと僅かに幅広の棒材だったと思われる。下部は被熱の為黒変する。*385*～*387*は芯取材の丸棒。*385*は先端をソケット状に加工してお

注14　第二分冊　自然科学分析　株式会社加速器分析研究所　「放射性炭素年代測定」

り，木釘が残存する。中程から下端にかけての２面を強く面取りする。棒材の樹種は全てスギである。

雑具・漁撈具他（*392*～*404*）　*392*・*393*は腰掛の未成品。樹種はスギである。*392*は指物腰掛の脚。縦長の台形で，上端に出枘を作り出し，両側辺がくびれる。中央に横桟を渡すための枘孔があく。接地面には両側からの加工痕と折った跡が残る。*393*は座板。楕円形に粗く加工した材の両面を削り込んで窪ませる。窪みの浅い方が座面と考え，上面に配置した。

394～*400*は杭。先端を両側から鋭く削り出す。*394*・*396*は板杭。*395*は芯持材を用いており，木の表皮が残る。*401*は芯取材の丸棒で，先端を尖らせる。刺突具か。*402*も先端部を鋭く加工しており，刺突具とした。*403*は網枠か。両端を欠損する。樹種はイヌガヤである。

*404*は籠。１本超え，１本潜り，１本送りの編み目がみられる。僅かに帯部が残り，左撚りのヨコ添えもじり編みがみられる。材質はマタタビ属である。

石製品（第98図*405*・*406*，図版111・112）

上層から出土している。*405*は磨製石斧の基部断片。石材は透閃石岩である。*406*は敲石。長軸の両端に敲打痕がみられる。側縁には僅かに擦痕が残る。石材は砂岩である。

３号溝（ＳＤ３，第22・99図，図版６・31・39・65）

Ａ地区の北東角に位置する。北から南東に向かって緩く弧を描き流れる。対岸の切り込み面が調査区外にあるため正確な規模は不明であるが，北東部は底面が上がる傾向にあることから推定すると幅は約５ｍを測り，ＳＤ２とほぼ同規模の溝であると思われる。深さは1.24ｍを測る。埋土はＳＤ２下層とほぼ同様であるが，北側の丘陵から浸み出る湧き水の影響であろうか，色調が暗く粘性が強い。埋土上層は，黄灰色・黒褐色粘土を基調とし，土師器，須恵器，珠洲が出土している。ＳＤ２と同様に溝が埋没した後窪地となり，二次堆積したものと考えられる。下層は流木や植物等の有機物を多く含む黒色粘土を基調とし，ＳＤ２下層と同時期の弥生土器（*407*～*410*），木製品（*411*～*417*）が出土している。

*407*は有段甕。口縁部が直立し，内外面ナデ調整する。頸部より下の内面にケズリがみられる。*408*はくの字口縁の甕。口縁内端に粘土を折り返した跡がみられ，内面に粘土接合痕が残る。外面ハケメ，内面ケズリ調整である。*409*は壺。口縁部に段のある細く短い頸部を持つ。端部は僅かに外反し尖縁となる。外面ハケメ，内面ケズリ調整である。*410*は器台。受部が有段で，脚部が外反する。器高が低く器壁の厚いつくりである。内外面ハケメ調整で両端部を横ナデする。

*411*は人形木製品か。両側から三角形の抉りを入れて頭部を作り出す。*412*は芯取材の丸棒。先端を尖らせており，刺突具か。*413*は建築部材。断面円形の材の一端に抉りを入れて，有頭状に作り出す。中程にも一箇所抉りがある。*414*・*415*は杭。端部を細く削り出す。*416*・*417*は建築部材。厚さが2.4～2.9㎝と薄く，壁材と思われる。方形，円形の穿孔がみられる。*414*・*417*については放射性炭素年代測定を実施しており，*414*が50ＡＤ～125ＡＤ，*417*が40ＢＣ～55ＡＤ（1σ）との結果を得ている[注15]。

Ｂ　包含層出土遺物（第142図*1331*，図版39）

くの字口縁甕である。口縁端部を面取りする。器表面の摩滅が著しく，調整は不明である。

（３）古代・中世・近世

Ａ　掘立柱建物

掘立柱建物はＡ地区で13棟，Ｂ地区で１棟を検出した。Ａ地区では全て調査区中央部にかたまって配置され，同位置での建て替えがみられるものもある。主軸方向や切り合いから，およそ４段階の変遷が考えられる。

注15　第二分冊　自然科学分析　株式会社加速器分析研究所　「放射性炭素年代測定」

１号掘立柱建物（ＳＢ１，第23・24・100図，図版７・86・101）

Ａ地区中央部に位置する４間×２間の南北棟側柱建物である。西側に柵ＳＡ１を伴う。桁行9.49m，梁行5.85m，面積55.52㎡である。主軸はＮ－24°－Ｗである。ＳＢ２と同規模で重複しており，北側に位置する柱穴ＳＰ73・76・79・83・125・347・562はＳＢ２の柱穴と共有する。しかし南側に位置する柱穴ＳＰ230・260・367はＳＢ２の柱穴にそれぞれ切り込まれていることから，同位置での建て直しと考え，ＳＢ１→ＳＢ２の変遷とした。柱穴の平面形は円形，楕円形，不整形のものがある。柱穴の規模は直径15㎝～1.02ｍと幅広いが，60～70㎝位のものが多い。深さは16～50㎝を測る。柱穴の埋土は，上層が褐灰色粘土，下層が黒褐色粘土を基調とし，炭化物の混入がみられる。ＳＰ125・367・654には黒色粘土の柱痕が残る。

出土遺物は，弥生土器，土師器，須恵器（*418*），灰釉陶器（*419*），鞴羽口がある。*418*は須恵器長頸瓶の頸部。下端に胴部との剥離痕がみられる。*419*は灰釉陶器の椀か皿の高台部小片。外面に稜を持つ三日月高台であるが，稜が弱く若干丸みを帯びる。猿投産折戸53号窯式（10世紀前半）である。遺物から，10世紀前半頃の建物であると考えられる。

２号掘立柱建物（ＳＢ２，第23・25・100図，図版７・83）

Ａ地区中央部に位置する４間×２間の南北棟側柱建物である。ＳＢ１を建て直したものと考えられる。主軸はＳＢ１と同じＮ－24°－Ｗであるが，桁行・梁行が若干長くなっており，桁行9.95m，梁行6.03m，面積60.00㎡を測る。南側に位置する柱穴ＳＰ229・327・343はＳＢ１の柱穴をそれぞれ切り込み，北側に位置する柱穴ＳＰ73・76・79・83・125・347・562はＳＢ１と共有する。柱穴の平面形は円形，楕円形，不整形のものがある。柱穴の規模は直径26㎝～1.02ｍと幅広いが，70～80㎝位のものが多い。深さは11～53㎝を測る。柱穴の埋土は，上層が灰黄褐色・褐灰色粘土，下層が黒褐色粘土を基調とし，炭化物の混入がみられる。ＳＰ125には黒色粘土の柱痕が残る。

出土遺物は，弥生土器，土師器，須恵器（*420*）がある。*420*は須恵器杯Ａ。口縁部が直線的に大きく開く９世紀後半のものである。ＳＢ２は柱穴の切り合いからＳＢ１より新しい段階の建物と考えられるが，おおよその時期はＳＢ１と同様の10世紀前半頃に収まると考えられる。

３号掘立柱建物（ＳＢ３，第23・26・100図，図版７・83）

Ａ地区中央部に位置する４間×２間の南北棟側柱建物である。ＳＢ４を建て直したものと考えられる。桁行・梁行がＳＢ４よりも長くなっており，桁行9.57m，梁行7.05m，面積67.47㎡を測る。主軸はＮ－29°－Ｗである。北側梁行方向の柱穴が欠落し，周囲の柱穴も浅くなる傾向がある。主に東側でＳＢ４と重複しており，ＳＰ226がＳＢ４の柱穴ＳＰ227を切り込むことから，ＳＢ４→ＳＢ３の変遷であると考えた。また，ＳＢ６・10と主軸方位が近く，同時期の建物である可能性が考えられる。柱穴の平面形は全て円形である。柱穴の規模は直径23㎝～1.02ｍと幅広いが，70㎝位のものが多い。深さは11～68㎝を測る。柱穴の埋土は，上層が褐灰色粘土，下層は黒褐色粘土を基調とし，炭化物の混入がみられる。柱は殆どが抜き取られているようだが，ＳＰ123・127・226の中央部に柱が据えられていた跡と思われる深い部分があり，ＳＰ858にはスギ材の柱が残存していた。柱は放射性炭素年代測定を実施し，430ＡＤ～550ＡＤ（１σ）との結果を得た[注16]。古墳時代後期との結果は，他の出土遺物や柱穴の切り合い等による時期と合致しない。混入であろうか，検討を要する。

他の出土遺物は，弥生土器，土師器，須恵器（*421*），製塩土器がある。*421*は須恵器杯Ａ。口縁部が直線的に大きく開く。内底面には回転ナデ痕が残り，大きく波打つ。９世紀後半。出土遺物や遺構の切り合い等から考えると，８世紀後半～９世紀代の建物である可能性が高いようである。

注16　第二分冊　自然科学分析　株式会社加速器分析研究所　「放射性炭素年代測定」

4号掘立柱建物（ＳＢ４，第23・27・40図，図版７・10）

Ａ地区中央部に位置する４間×２間の南北棟側柱建物である。西側に柵ＳＡ２を伴う。桁行9.30m，梁行5.15m，面積47.90㎡である。主軸はＮ－33°－Ｗである。ＳＢ３と同様に北側梁行方向の柱穴が欠落し，周囲の柱穴も浅くなる傾向がある。ＳＢ３と重複しており，ＳＰ227がＳＢ３の柱穴ＳＰ226に切り込まれることから，ＳＢ４→ＳＢ３の順で建て替えたものと考えた。また，ＳＰ227がＳＢ９の柱穴ＳＰ100に切られているため，ＳＢ４→ＳＢ９の先後関係が考えられる。柱穴の平面形は円形のものが大半を占める。柱穴の規模は直径32㎝～1.33ｍと幅広いが，中心は70～80㎝位にあるようである。深さは16～74㎝を測る。柱穴の埋土は，上層は炭化物の混じる褐灰色粘土を基調とし，下層には黒褐色粘土の柱痕を残すものが多い。ＳＰ86・243の最下層には柱が残存する。ＳＰ243から出土したスギ材の柱は放射性炭素年代測定を実施し，775ＡＤ～870ＡＤ（１σ）との結果を得ている[注17]。この他，弥生土器，土師器，須恵器，製塩土器，鞴羽口，鉄滓が出土している。遺物から，８世紀後半～９世紀代の建物であると考えられる。

5号掘立柱建物（ＳＢ５，第23・28・100図，図版７・103）

Ａ地区中央部に位置する３間×２間の南北棟総柱建物である。桁行6.54m，梁行4.13m，面積27.01㎡である。主軸はＮ－21°－Ｗである。ＳＢ８・11・13と軸方位が近く，同時期の建物である可能性がある。南西角の柱穴ＳＰ581が井戸ＳＥ695を切り込んでいることから，井戸の埋没時期である13世紀末～14世紀代以降の建物と考えられる。柱穴の平面形は円形のものが大半を占める。柱穴の規模は直径18～71㎝を測るが，20～30㎝位のものが多い。深さは６～34㎝を測る。柱穴の埋土は，炭化物の混じる褐灰色・灰黄褐色・黒褐色等の粘土を基調とし，柱痕や柱を残すものはない。

出土遺物は，弥生土器，土師器，須恵器，黒色土器，中世土師器（*422*）がある。*422*は口縁部を一段ナデする浅い皿。13～14世紀のものである。建物の時期は，ＳＢ13から出土している中世土師器の年代ともあわせると，14世紀以降であると考えられる。

6号掘立柱建物（ＳＢ６，第23・29図，図版７）

Ａ地区中央部に位置する３間×２間の南北棟総柱建物である。桁行6.52m，梁行4.80m，面積31.30㎡である。北側の棟持柱を西にずらして掘り直しており，東側主軸はＮ－25°－Ｗ，西側主軸はＮ－26°－Ｗを測る。北西角の柱穴が欠落し，南側梁行方向の両端の柱穴も井戸に連なる土坑や地震による地割れの影響を受けて不明瞭となっている。ＳＢ３・10と主軸方位が近く，同時期（８世紀後半～９世紀代）の建物である可能性が考えられる。柱穴の平面形は全て円形である。柱穴の規模は直径13～49㎝を測るが，20～30㎝位のものが多い。深さは４～26㎝を測る。柱穴の埋土は，北側は灰黄褐色粘土，南側は褐灰色・黒褐色粘土を基調とし，一部に炭化物の混入がみられる。柱痕や柱を残すものはない。遺物は，弥生土器，土師器が出土しているが，いずれも小破片である。

7号掘立柱建物（ＳＢ７，第23・30図，図版７）

Ａ地区中央部南寄りに位置する２間×２間の東西棟側柱建物である。桁行5.77m，梁行5.05m，面積29.14㎡である。主軸はＮ－81°－Ｅである。他の建物群とはやや離れた位置に建つ。井戸ＳＥ717を中央北寄りに有する水屋であったと考えられ，ＳＥ717が埋没した13世紀末～14世紀代以前の存続時期が考えられる。ＳＥ717は方形土坑ＳＫ607・608に囲まれているが，これは井戸内へ汚水が流入するのを防ぐと同時に，周囲に水が溢れないようにするための構造と考えられる。南側には排水のための溝ＳＤ666を備えている。柱穴の位置は，梁行方向は土坑から離れた平坦面に掘られ，桁行中央の柱穴は土坑の肩から内面にかかる。柱穴の平面形は全て円形である。柱穴の規模は，直径19～54㎝，

注17　第二分冊　自然科学分析　株式会社加速器分析研究所　「放射性炭素年代測定」

深さ12～38㎝を測る。埋土は灰黄褐色・褐灰色・黒褐色の粘土を基調とし，地山の青灰色粘土の混入がみられる。遺物は，縄文土器，弥生土器，土師器，須恵器，中世土師器，金属塊が出土しているが，いずれも小破片である。

8号掘立柱建物（ＳＢ８，第23・30図，図版７）

Ａ地区中央部に位置する２間×２間の東西棟側柱建物である。桁行5.23ｍ，梁行3.47～3.91ｍ，面積19.29㎡である。主軸はＮ－70°－Ｅである。土坑ＳＫ244を南西側に囲むように建つ。ＳＢ５・11・13と軸方位が近く，同時期（14世紀以降）の建物である可能性がある。柱穴の平面形は全て円形である。柱穴の規模は，直径14～52㎝，深さ９～29㎝を測る。埋土は，北側柱列は黒褐色粘土を，南側柱列は灰黄褐色粘土を基調とする。遺物は土師器，須恵器が出土しているがいずれも小破片で，混入と思われる。

9号掘立柱建物（ＳＢ９，第23・31・100図，図版７・96・100）

Ａ地区中央部に位置する２間×２間の南北棟側柱建物である。桁行6.08ｍ，梁行5.07ｍ，面積30.83㎡である。主軸はＮ－21°－Ｗである。ＳＢ１・２と軸方位が近く，同時期（10世紀前半）の建物である可能性が考えられる。北西角の柱穴ＳＰ100がＳＢ４の柱穴ＳＰ227を切りこんでいるため，ＳＢ４→ＳＢ９の先後関係が考えられる。柱穴の平面形は全て円形である。柱穴の規模は，直径19～68㎝，深さ14～44㎝を測る。埋土は炭化物の混じる黒褐色・黒色の粘土を基調とする。

出土遺物は，弥生土器，土師器（*424*），須恵器，黒色土器，製塩土器（*423*）がある。*423*は平底の底部。*424*は土師器椀Ａ。内外面とも回転台調整で，外底面に回転糸切り痕を残す。９世紀後半。

10号掘立柱建物（ＳＢ10，第23・31・100図，図版７・83・86・96）

Ａ地区中央部に位置する２間×２間の南北棟側柱建物である。桁行5.95ｍ，梁行5.39ｍ，面積32.07㎡である。主軸はＮ－25°－Ｗである。柱穴の平面形は円形，楕円形，不整形がある。柱穴の規模は，直径31㎝～1.09ｍ，深さ13～44㎝を測る。埋土は黒色・褐灰色・黒褐色と様々であるが，炭化物を含むものが多くみられる。ＳＰ431・437の埋土に含まれる炭化物は放射性炭素年代測定の結果，それぞれ780ＡＤ～890ＡＤ，780ＡＤ～940ＡＤ（１σ）との結果を得ている[注18]。

出土遺物は，縄文土器，弥生土器，土師器（*426*），須恵器（*425*・*427*）がある。

*425*は須恵器杯の口縁部片。*426*は外底面に回転糸切り痕を残す土師器椀Ａ。糸切りは末端が交差しない粗いものである。体部外面下半をヘラ削りしている可能性があるが，摩滅のため不明である。８世紀後半～９世紀。*427*は須恵器壺。口縁部が短く直立し，内端に稜を持つ。出土遺物から８世紀後半～９世紀代の建物であると考えられる。

11号掘立柱建物（ＳＢ11，第23・32図，図版７）

Ａ地区中央部に位置する３間×３間の南北棟総柱建物である。南西角の柱穴を欠損する。桁行6.77ｍ，梁行6.30ｍ，面積42.65㎡である。主軸はＮ－18°－Ｗである。ＳＢ５・８・13と主軸方向が近く，同時期（14世紀以降）の建物である可能性がある。柱穴の平面形は円形のものが大半を占める。柱穴の規模は，直径14～51㎝，深さ６～36㎝を測る。埋土は黒褐色粘土を基調とし，炭化物を含むものが多い。遺物は，弥生土器，土師器，須恵器，黒色土器が出土しているがいずれも小破片で，混入と思われる。

12号掘立柱建物（ＳＢ12，第23・33図，図版７）

Ａ地区中央部に位置する２間×２間の東西棟側柱建物である。桁行4.37ｍ，梁行3.72～3.91ｍ，面積16.67㎡である。主軸はＮ－76°－Ｅである。柱穴の平面形は全て円形である。柱穴の規模は，直

注18　第二分冊　自然科学分析　株式会社加速器分析研究所　「放射性炭素年代測定」

径15～42cm，深さ３～34cmを測る。埋土は炭化物の混じる黒褐色粘土を基調とするものが多い。遺物は，弥生土器，土師器，須恵器が出土しているが，いずれも小破片である。建物の存続時期は，ＳＢ７と方位が近いことから，13世紀末～14世紀代より前の年代を想定している。

13号掘立柱建物（ＳＢ13，第23・33図，図版７）

Ａ地区中央部南寄りに位置する。東西棟の側柱建物と思われるが，南側と東側をＳＤ１に削平されており，正確な規模は不明である。東西方向に５間，南北方向に３間を数える。東西方向の柱列の軸方位は，Ｎ－74°－Ｅである。ＳＢ５・８・11と建物の軸方向がほぼ同じであることから，同時期（14世紀以降）の建物である可能性がある。柱穴の平面形は円形のものが多い。柱穴の規模は，直径14～48cm，深さ８～28cmを測る。埋土は黒褐色粘土を基調とするものが多い。出土遺物は，弥生土器，土師器，製塩土器，中世土師器が出土しているが，いずれも小破片である。

14号掘立柱建物（ＳＢ14，第33図，図版７）

Ｂ地区北東角に位置する。南北方向に２間，東西方向に１間以上を想定し，東西方向の柱列は建て替えの可能性を考えたい。南北方向の軸方位は，Ｎ－３°－Ｅである。柱穴の平面形は円形と楕円形のものがある。柱穴の規模は，直径16～45cm，深さ12～25cmを測る。埋土は黒褐色粘土を基調とするものが多い。遺物は出土していない。

Ｂ　柵

１号柵（ＳＡ１，第23・24図）

Ａ地区中央部のＳＢ１・２の西側に沿って並ぶ。ＳＢ１・２の庇部分である可能性もあるが，北側柱間の長さが建物と合わないため，柵とした。軸方位はＮ－23°－Ｗを示し，ＳＢ１・２の建物方位とほぼ一致する。埋土は褐灰色粘土を基調とする。遺物は土師器，須恵器が出土しているが，いずれも小破片である。

２号柵（ＳＡ２，第23・27図）

Ａ地区中央部のＳＢ４の西側に沿って並ぶ。柱間がＳＢ４とほぼ同じであるため，ＳＢ４の庇部分である可能性も考えられる。軸方位はＮ－34°－Ｗを示し，ＳＢ４の建物方位とほぼ一致する。埋土は黒褐色粘土を基調とする。遺物は，弥生土器，土師器，須恵器，鞴羽口，鉄滓が出土している。

Ｃ　井　　戸

Ａ地区中央部でまとまって８基を検出した。いずれも素掘り井戸で，井戸枠等の構造物が残存するものはない。断面形態はほぼ垂直に掘り込まれるもの（ＳＥ678・695・717・754・885）と擂鉢状のもの（ＳＥ561・593・718）がある。深さは検出面から1.0～1.2ｍを測るものが多いが，ＳＥ678のみ深く2.31ｍを測る。断ち割りによる確認では，いずれもⅣ′層の砂利層まで掘り抜くことはなく底面はⅣ層内に留まるが，湧水面には達しており，調査時においても常に水が溜まっている状態であった。

561号井戸（ＳＥ561，第34・102図，図版８・104）

Ａ地区中央西寄りに位置する。平面形はやや角のある楕円形で，長径1.29ｍ，短径1.00ｍ，深さ76cmを測る。上層は南西側を中心に僅かに掘形の崩れがみられる。中層付近はほぼ垂直に掘り込まれているが，下層は斜めに掘り込まれ，底面は丸みを帯びて深さが一定ではない。埋土上層は地山の青灰色粘土が混じる褐灰色粘土を基調とし，掘形が崩れながら埋没していった様子が伺える。中層は地山の混じる黒褐色粘土，下層は黒色粘土が水平に堆積しており，下層は井戸廃絶後自然堆積した土，中層は人為的に埋め戻された土とみることができる。

出土遺物は，弥生土器，土師器，須恵器，珠洲（*455*），木製品がある。土器は土師質のものが多く

みられるが，小破片で摩滅が著しい。須恵器は杯，瓶類・甕の胴部片があるが，混入と思われる。*455*は珠洲甕。同一個体と思われる破片がＳＥ718他から出土している。*455*についての記述は，破片を最も多く含むＳＥ718の項で行うが，口縁を水平に挽き出すⅣ$_1$期（1280年代～1320年代）のものである。木製品は，柱，板材，円形板があり，全て下層から出土している。このうち，柱と板材について放射性炭素年代測定を実施した[注19]。柱は1040ＡＤ～1160ＡＤ（１σ），板材は1190ＡＤ～1260ＡＤ（１σ）との結果であり，11世紀中頃～13世紀中頃の伐採年が示されている。出土遺物から，13世紀末～14世紀前半頃に埋没したことが考えられる。

593号井戸（ＳＥ593，第35・100・102図，図版８・80・102～104・107・113）

Ａ地区中央南寄りに位置する。平面形は楕円形で，長径1.66ｍ，短径1.47ｍ，深さ1.09ｍを測る。掘形は１段掘り下げた内部を更に深く掘り下げる２段構造で，１段目の北側には版築と思われる褐灰色粘土と青灰色粘土の互層が確認できた。井戸側を補強するための裏込めと思われる。埋土は主に４層からなり，上層の褐灰色粘土，黒褐色粘土は人為的な埋め戻しが考えられる。下層のオリーブ黒色粘土は自然堆積したものと考えられる。

出土遺物は，弥生土器，土師器，須恵器（*428*），中世土師器（*429*・*430*），中国製青磁（*431*・*432*），珠洲（*455*），砥石（*433*），木製品（*434*）がある。土器は摩滅した土師質の小片が多く出土している。*428*は須恵器杯Ｂ蓋。頂部は平滑に調整されているようであるが，降灰のため不明瞭である。ボタン状の摘みを貼り付ける。端部は短く折り曲げる。胎土に含まれる気泡のため焼き膨れが目立つ。須恵器は*428*の他，壺瓶類や甕の胴部片があるが，混入であろう。*429*・*430*は中世土師器皿。器壁が薄く浅い器形である。口縁端部を内側に僅かにつまむように成形する。13世紀。*431*・*432*は龍泉窯系青磁。*431*は大宰府分類の椀Ⅱｂ類。外面に鎬蓮弁文を有し，弁の中心線は稜をなす。13世紀初頭前後～前半。*432*は椀Ⅳ類。外面に劣化した蓮弁文が描かれる。14世紀初頭～後半。*455*は珠洲甕。同一個体と思われる破片がＳＥ718他から出土している。Ⅳ$_1$期（1280年代～1320年代）のものである。*433*は荒砥石。大村砥に近い質感を持つ砂岩である。表・裏・両側面の４面を砥面とする。木製品は下層から出土しており，板杓子（*434*）と板材がある。*434*は羽子板の形をなす，いわゆる杓文字である。板材については放射性炭素年代測定を実施し，1205ＡＤ～1260ＡＤ（１σ）との結果を得た[注19]。出土遺物から14世紀代に埋没した井戸であると考えられる。

678号井戸（ＳＥ678，第36・37・101図，図版８・102・103・106～108）

Ａ地区中央南寄りに位置し，東側をＳＫ607に切られる。ＳＫ679と重複しており，これを切る。平面形は円形で，直径1.39ｍ，深さ2.31ｍを測る。掘形は垂直に近い形で掘り込まれているが，北側のみ１段掘った後内部を更に深く掘る２段掘りをする。北側にみられる８～10層は地山のにぶい黄褐色粘土や，これが還元化された青灰色粘土を基調とする土が互層をなしており，井戸側を補強するための裏込めの可能性がある。中心部の埋土はほぼ水平堆積で，上層は自然堆積，中層は人為的に埋め戻された土であると思われる。黒褐色，灰黄褐色，黄灰色，褐灰色，黒色等の粘土が堆積する。下層の11層上面には水平面がみられ，11層以下は有機物を多く含む土質となっていたため，当初は井戸使用中から埋め戻す前までの期間に自然堆積した土層であると考えていた。しかし，７層と12層から出土したモモの核２点について放射性炭素年代測定を実施したところ，７層出土の核は1310ＡＤ～1400ＡＤ（１σ），12層出土の核は1315ＡＤ～1410ＡＤ（１σ）との結果を得た[注19]。従って７層と12層の堆積した年代に大きな隔たりはないことになる。モモの核が埋井の儀礼に伴い埋められたものだとすれば，12層以上は人為的な埋め戻しと捉えることができる。なお11層は有機物を多く含む暗灰色粘土で，

注19　第二分冊　自然科学分析　株式会社加速器分析研究所　「放射性炭素年代測定」

締まりの悪い土である。12・13層は有機物の混じる灰色粘土を基調とし，最下層である13層には青灰色砂が混じる。

上層からの出土遺物には，弥生土器，土師器，須恵器があり，摩滅した小破片が多い。中層は５層から中世土師器（*441*），珠洲（*443*），漆器（*444・445*），円形板（*447*），火付け木（*451・452*），７層からモモの核が出土した。下層は11層から珠洲（*442*），12層から木椀（*446*），柄杓（*453*），円形板（*454*），曲物，モモの核が出土した。この他，主に５層から箸（*448～450*），焼けた石が出土している。

*441*は中世土師器皿の完形品。口縁部に１段の横ナデを施し，内面の体部下半を強く押し出して深身に成形する。体部下半から底部の器壁は薄くなる。越前分類のＮＥ類に該当する。14世紀後半～15世紀前半。*442*は珠洲甕口縁部。頸基部を短く外折する円頭で，頸部外面には折り返しの際の器具圧痕が明瞭に残る。胴部上半は張りを持ち丸みを帯びる。外面の叩きは浅めだが丁寧で，内面には当て具痕の跡がはっきりと残る。Ⅲ期（1250年代～1280年代）。*443*は珠洲甕底部。Ｘ92Ｙ53列の地震痕跡から出土した破片と接合する。砂底で，胴部には下端から細密な叩きを施す。叩きはやや右下がりで，左回りに施している。*444*は総黒色系の漆器椀。断面三角形の小さな高台を持つ。漆分析の結果，内面に別の塗膜層がみられ，漆パレットと判断されている[注20]。*445*は内面赤色総黒色系の皿。内面全体に漆の縮み皺がみられ，縮みがない漆紙と思われる部分もある。これも漆パレットである[注20]。高台内には扇の文様を彫り込む。*446*は木椀。土圧を受けて変形する。内面にロクロの挽き目が明瞭に残り，底部には削りがみられる。*447*は円板の中央に小孔を穿つ。外周は僅かに斜めに削られており，断面が台形に近い形となっている。紡輪かと思われたが，直径が7.3～7.6㎝と大きい。蒸し器の底板であろうか。*448～450*は箸。断面は四角形で，*449*は両端を尖らせる。*451・452*は火付け木か。長細い板の一部が炭化する。*453*は曲物柄杓。径13.4㎝，深さ11.1㎝を測り，柄は抜かれている。柄の取り付け側は下から7.8㎝の所に方形の孔をあけており，内面には柄の固定に用いたと思われる木釘の圧痕と，折れ残った一部がみられる。柄の先端側には下から6.6㎝の所に円形の孔をあける。底板は４方向からの木釘で固定する。曲物内面には綴じ部のみ８本のケビキを入れており，幅1.2㎝の皮で綴じている。*454*は円形板。曲物の底板か蓋である。出土遺物から，14世紀後半～15世紀初頭頃に埋没した井戸であると考えられる。

695号井戸（ＳＥ695，第38・100図，図版９・80・83・106・107）

Ａ地区中央南寄りに位置する。平面形は円形で，直径1.59～1.92ｍ，深さ1.25ｍを測る。掘形は一段掘り下げた内部を更に１段掘り下げる２段掘りであるが，埋土上層から中層にかけて自然堆積とみられることから，掘形が崩れてこのような形になったものとも考えられる。上層から中層には褐灰色，黄灰色，黒褐色の粘土が堆積する。下層は炭化物の混じる黄灰色粘土や締まりの悪い黒褐色粘土が厚く堆積し，人為的に埋め戻された土と考えられる。最下層には薄く灰色粘土が堆積する。

上層～中層から出土した遺物は，弥生土器，土師器，須恵器（*435～437*），珠洲があり，土師質の摩滅した小破片と，須恵器と珠洲の甕胴部片が多くみられる。多くは周囲からの流れ込みであろう。*435*は須恵器杯Ｂ蓋。全体に薄く粗いつくりである。端部は屈曲して短く折り曲げる。*436*は須恵器杯Ｂ。口縁部が外反する。内底面と体部外面下半は滑らかで，使用による摩滅とみられる。*437*は須恵器杯Ａ。体部が内湾する。薄いつくりで焼き歪みがある。下層の６層から木製品が多く出土しており，折敷（*438・439*），枡（*440*），箸，板材がある。*438・439*は折敷の底板。方形の薄板の角を落とす。*439*の一辺には２個一対の小孔がある。*440*は方形枡。底板に９個の木釘孔があく。一側辺中央に丸い孔がある。内寸9.6～10㎝（３寸３分），深さ5.3㎝（１寸７分）を測る。京枡は内方４寸９分，深さ２

注20　第二分冊　自然科学分析　漆器文化財科学研究所　「漆器・漆製品の科学分析」

寸７分であるから，これより一回り小さい。この他，モモの核，鉄釘，軽石が出土している。モモの核については放射性炭素年代測定を実施し，1295ＡＤ～1395ＡＤ（１σ）との結果を得ている[注21]。出土遺物から，13世紀末～14世紀代に埋没した井戸であると考えられる。

717号井戸（ＳＥ717，第36・102図，図版９・104）

Ａ地区中央南寄りに位置する。方形土坑ＳＫ607・608と重複する。ＳＫ607・608を含めた範囲を掘立柱建物ＳＢ７に囲われており，上屋構造を持つと考えられる。またＳＫ608の南側には溝ＳＤ666が自然流路ＳＤ１に向かって延びており，排水施設も伴う水屋であった可能性が高い。ＳＥ717の平面形はやや歪な円形で，直径1.20～1.48ｍ，深さ1.16ｍを測る。埋土上層には地山のにぶい黄橙色が混じる灰黄褐色粘土や褐灰色粘土が薄くレンズ状に堆積しており，掘形が崩れながら自然堆積したものと思われる。下層は直径60～65㎝で垂直に掘り込まれており，本来の規模が推測できる。下層には有機物を含む黄灰色粘土や，地山と有機物の混じる黄灰色粘土が厚く堆積しており，人為的な埋め戻しによるものと考えられる。出土遺物は弥生土器，土師器，須恵器，珠洲甕（*455*），鞴羽口がある。土器は土師質の摩滅した小破片が多くみられる。*455*は同一個体と思われる破片が，ＳＥ718他から出土している。Ⅳ$_1$期（1280年代～1320年代）のものである。出土遺物からＳＥ717の埋没年代は，ＳＥ561・593・718と同様の13世紀末～14世紀代と考えられる。

718号井戸（ＳＥ718，第34・102図，図版９・104）

Ａ地区中央西寄りに位置する。平面形は円形で，直径1.66ｍ，深さ1.14ｍを測る。上層は全体に掘形が崩れている様子で，地山のにぶい黄橙色粘土が混じる土層が多くみられる。中層以下には，黒色粘土，暗灰黄色粘土，黒褐色粘土，灰色粘土が堆積する。中層付近はほぼ垂直に掘り込まれているが，下層は斜めに掘り込まれ，底面は丸みを帯びて深さが一定ではない。

出土遺物は弥生土器，土師器，須恵器，珠洲（*455*）があり，これらの小破片が多数出土している。*455*は珠洲甕口縁部。口縁を水平に挽き出し，胴部上半に張りがあり丸みを帯びる。外面には細密な原体による丁寧な叩打がみられる。二次被熱により軟質となっており，器表面に数多く丸く爆ぜた穴があく。Ⅳ$_1$期（1280年代～1320年代）のものである。同一個体とみられる小破片が，ＳＥ561・593・717，ＳＤ１，ＳＤ２上層，ＳＫ607・646，地震痕跡，遺物包含層の広範囲から出土している。珠洲は*455*の他に擂鉢の胴部片がある。出土遺物からＳＥ718の埋没年代は，ＳＥ561・593・717と同様の13世紀末～14世紀代と考えられる。

754号井戸（ＳＥ754，第39図，図版９）

Ａ地区の中央から外れた南西寄りに位置する。平面形は円形で，直径1.21～1.26ｍ，深さ1.25ｍを測る。掘形はやや斜めに掘り込まれ，底面は丸みを帯びて深さが一定ではない。地盤がしっかりしており，掘形の崩れは比較的少ない。埋土上層は褐灰色，灰黄褐色，黄灰色の粘土が自然堆積する。中層のオリーブ黒色粘土（５層）と下層の黒色粘土（６層）は埋め戻しによるものと思われ，風化して青灰色の粗砂状になった角礫もみられる。遺物は土師器，須恵器の小破片の他，６層から節を抜かれた竹筒が出土している。竹筒の直径は約６㎝を測る。埋井の際に差し立てて，井戸神の息抜きとして用いられたと考えられる。竹筒は放射性炭素年代測定を実施し，1315ＡＤ～1405ＡＤ（１σ）との結果を得ている[注21]ことから，14世紀前半～15世紀初頭頃に埋没したと考えられる。

885号井戸（ＳＥ885，第39・102図，図版10・108）

Ａ地区の中央からやや外れた南西寄りに位置する。平面形は円形で，直径86～93㎝，深さ1.13ｍを測る。埋土は上層から中層にかけて灰黄褐色，黄灰色，黒褐色の粘土が堆積し，中層にはＳＥ754と

注21　第二分冊　自然科学分析　株式会社加速器分析研究所　「放射性炭素年代測定」

同様に風化して暗灰黄色の粗砂状になった角礫もみられる。下層にはオリーブ黒色粘土が堆積し，底面近くから加工材（*456*），板材（*457*）が出土した。*456*は二股の木の枝を切り落として加工したもので，一部に樹皮が残る。*457*は２個１組の小孔が４個貫通する。下側の小孔の下には更に２個の小穴があるが，片側１個は貫通していない。表裏に細かい刃物痕がみられ，まな板か作業台に転用されたものと思われる。*456*については放射性炭素年代測定を実施しており，1305ＡＤ～1400ＡＤ（1σ）との結果を得ている[注22]。この他，弥生土器，土師器，須恵器の小破片が出土しているが，混入であろう。出土遺物から，14世紀～15世紀初頭頃に埋没したと考えられる。

Ｄ　土　　坑

50号土坑（ＳＫ50，第41・102図，図版80）

Ａ地区中央北寄りに位置し，西側でＳＢ４の柱穴ＳＰ51を切る。平面形は円形で，直径39～50㎝，深さ20㎝を測る。埋土は黒褐色粘土の単層である。出土遺物は土師器小片，須恵器（*458*）がある。*458*は杯Ｂ蓋。非常に薄いつくりで，無鈕である。端部は折り曲げず方形になる。９世紀末～10世紀前半。

84号土坑（ＳＫ84，第41・102図，図版80）

Ａ地区中央北寄りに位置し，北側でＳＢ４の柱穴ＳＰ86を切る。平面形は円形で，直径44～45㎝，深さ22㎝を測る。埋土上層は褐灰色粘土，下層は黒褐色粘土で，地山の青灰色粘土と炭化物の混入がみられる。出土遺物は須恵器（*459*・*460*）・甕胴部片がある。*459*は須恵器杯Ｂ蓋。ボタン状の摘みを貼り付け，*460*は端部を丸く成形する。９世紀第２～第３四半期。

94号土坑（ＳＫ94，第40・102図，図版10・91・96）

Ａ地区中央北寄りに位置する。平面形は円形で，直径36～50㎝，深さ13㎝を測る。埋土は黒褐色粘土の単層である。出土遺物は土師器（*461*・*462*），製塩土器小片がある。*461*・*462*は土師器椀Ａ。外底面回転糸切りと思われるが，摩滅が著しく調整不明である。*461*は体部が内湾しながら延び，開き気味の器形をとる。９世紀後半～10世紀。

116号土坑（ＳＫ116，第40図）

Ａ地区中央に位置し，ＳＫ117を切る。平面形は楕円形で，長径42㎝，短径27㎝，深さ38㎝を測る。埋土は炭化物の混じる黒褐色粘土を基調とし，下層は粘性が増す。出土遺物は土師器小破片がある。

117号土坑（ＳＫ117，第40・102図，図版76）

Ａ地区中央に位置し，ＳＫ116に切られる。平面形は楕円形で，長径67㎝，短径47㎝，深さ26㎝を測る。埋土上層は炭化物と黒褐色粘土の混じる青灰色粘土，下層は炭化物の多く混じる黒褐色粘土を基調とし，上層上面から土器が多く出土した。出土遺物は弥生土器，土師器，須恵器（*467*），中世土師器，鞴羽口，鉄滓がある。土器は土師質の摩滅した小破片が多くみられる。中世土師器は皿の口縁部小片である。*467*は須恵器横瓶。片側面に近い部分の胴部片であるが，円板閉塞の痕跡がみられないため，始めに成形する底部側と思われる。内面の当て具痕は口縁部寄りに同心円文，側底部には平行線文がみられ，部位によって異なっている。平行線文の方が後から施されており，胴部の叩き成形の後に側底部を叩いて丸底化したものと考えられる。

159号土坑（ＳＫ159，第41・102図，図版101）

Ａ地区中央北寄りに位置する。平面形は楕円形で，長径66㎝，短径36㎝，深さ48㎝を測る。埋土上層は褐灰色粘土，下層は黒褐色粘土を基調とし，地山の青灰色粘土と炭化物の混入がみられる。出土遺物は弥生土器，土師器，須恵器，灰釉陶器（*465*）がある。土器は土師質の摩滅した小破片が多く

注22　第二分冊　自然科学分析　株式会社加速器分析研究所　「放射性炭素年代測定」

みられ，椀や高杯の一部と思われる破片がある。須恵器は壺瓶類の胴部片がある。*465*は灰釉陶器長頸瓶の口縁部。ＳＫ255出土片と接合する。口縁部外面に沈線を２条巡らせる。灰釉を全面に施すが，外面の釉は白濁して，剥落している部分が多い。

175号土坑（ＳＫ175，第41・102図，図版71）

Ａ地区中央北東寄りに位置し，南東側でＳＫ147に切られる。平面形はやや角のある円形で，直径1.18～1.20m，深さ38cmを測る。埋土上層は炭化物の混じる黒褐色粘土，下層は炭化物の混じる褐灰色粘土を基調とし，中層に多く地山の青灰色粘土の混入がみられる。出土遺物は弥生土器，土師器，須恵器（*463*）がある。土器は土師質の摩滅した小破片が多くみられる。*463*は須恵器杯Ａ。体部が外反気味に立ち上がる。内面見込み，口縁部内面，体部外面下半が滑らかで，使用による摩滅と思われる。８世紀後半～９世紀初頭。

196号土坑（ＳＫ196，第30・102図，図版101）

Ａ地区中央北東寄りに位置し，ＳＢ８の柱穴ＳＰ195を切る。平面形は円形で，直径24～31cm，深さ14cmを測る。埋土は地山の青灰色粘土が僅かに混じる褐灰色粘土の単層である。緑釉陶器（*464*）が出土しているが，中世の掘立柱建物の柱穴を切っていることより，混入と考えられる。*464*は椀か皿の底部片。東濃産で９世紀後半頃のものである。丁寧なつくりで内底面に磨きの跡がみられる。緑釉は明緑色を呈し，高台内部を除く全面に施す。内底面には焼成時のトチン目跡がつく。貼り付け高台の内側には軽い段がみられる。外底面はナデ調整されるが，回転糸切り痕が薄く残る。

221号土坑（ＳＫ221，第40図）

Ａ地区中央東端に位置する。平面形は円形で，直径33～36cm，深さ16cmを測る。埋土は炭化物の多く混じる黒色粘土の単層である。出土遺物は土師器椀小破片，須恵器甕胴部片がある。

244号土坑（ＳＫ244，第41・102図，図版74）

Ａ地区中央に位置し，ＳＫ247とＳＢ８の柱穴ＳＰ198に切られる。平面形は不整形で，長軸3.19m，短軸2.36m，深さ25cmを測る。埋土は炭化物の混じる褐灰色粘土を基調とし，北西側の下層に青灰色粘土の混じる土層がみられる。出土遺物は弥生土器，土師器，須恵器（*466*）がある。土器は土師質の摩滅した小破片が多くみられる。*466*は須恵器杯Ｂ。体部は下半が張って直線的に延びる。内面見込みと体部下半が滑らかで，使用による摩滅とみられる。８世紀中頃。

247号土坑（ＳＫ247，第40・103図，図版10・91）

Ａ地区中央に位置する。ＳＫ244と重複し，これを切る。平面形は円形で，直径34～36cm，深さ32cmを測る。埋土は炭化物の多く混じる黒色粘土を基調とし，底面近くには地山の青灰色粘土が混入する。出土遺物は弥生土器，土師器（*468*），須恵器，軽石がある。土器は土師質の摩滅した小破片が多くみられる。須恵器は甕の胴部片である。*468*は土師器椀Ａ。体部が内湾しながら立ち上がる深さのある器形であるが，粘性の強い埋土のため器表面が全体に剥離して薄くなっており，調整は不明である。９世紀後半頃のものか。

255号土坑（ＳＫ255，第41・102・103図，図版91・96・101）

Ａ地区中央に位置する。平面形は楕円形で，長径1.43m，短径1.06m，深さ34cmを測る。埋土は主に３層からなり，上層は黒褐色粘土，中層は青灰色粘土の混じる灰黄褐色粘土，下層は黒褐色粘土が堆積する。土層内にはいずれも炭化物の混入がみられる。出土遺物は弥生土器，土師器（*469*・*470*），灰釉陶器（*465*），金属塊がある。土器は土師質の摩滅した小破片が多くみられる。*469*・*470*は土師器椀Ａ。粘性の強い埋土のため器表面が全体に剥離して薄くなっている。*469*は体部がやや開き気味で

あるが，須恵器杯に似た器形となるようである。内面に一部剥離していない部分が残っており，赤彩されていたことが判る。口縁部には油煙が付着する。８世紀後半～９世紀前半。*470*は体部が僅かに内湾しながら立ち上がるが，浅い器形となる。調整は外底面に薄く回転糸切り痕が残るのが確認できる程度である。９世紀後半～10世紀頃か。*465*は灰釉陶器長頸瓶。ＳＫ159出土片と接合する。

370号土坑（ＳＫ370，第41・103図，図版103）

Ａ地区中央に位置し，西側でＳＫ442，東側でＳＫ849を切る。平面形は円形で，直径36～40㎝，深さ34㎝を測る。埋土上層は黒色粘土，下層は黒褐色粘土で，北側の一部に掘形が崩れたと思われる地山の青灰色粘土が混入する土層がみられる。土層全体に僅かに炭化物の混入がみられる。出土遺物は弥生土器，土師器，須恵器，中世土師器（*471*），製塩土器がある。土器は土師質の摩滅した小破片が多くみられる。*471*は中世土師器皿。口縁端部を面取りして断面方形に仕上げるもので，越前分類のＮＢⅡ類にあたる。13世紀。

440号土坑（ＳＫ440，第40図，図版10）

Ａ地区中央南東寄りに位置する。平面形は楕円形で，長径54㎝，短径37㎝，深さ10㎝を測る。埋土は炭化物の混じる黒色・黒褐色粘土である。主に埋土土層から，土師器の小破片が多数と須恵器瓶類の胴部片が出土している。

442号土坑（ＳＫ442，第41図）

Ａ地区中央に位置し，東側でＳＫ370に切られ，ＳＫ849を切る。平面形はやや角のある楕円形で，長径1.26ｍ，短径56㎝を測る。深さは北側で20㎝，南側が１段深くなっており40㎝を測る。埋土上層は黒色粘土，下層は北側で褐灰色粘土，南側でにぶい黄褐色粘土の混じる黒色粘土を基調とし，南側に多くの炭化物の混入がみられた。出土遺物は土師器小破片多数，須恵器小破片がある。

447号土坑（ＳＫ447，第40・103図，図版10・39）

Ａ地区中央南東寄りに位置する。平面形は円形で，直径16～21㎝，深さ11㎝を測る。埋土は炭化物の混じる黒色粘土の単層である。底面近くから弥生土器（*472*）が出土している。*472*は高杯脚部。全面摩滅しており，調整は不明である。弥生後期と思われる。

451号土坑（ＳＫ451，第40・103図，図版10・39）

Ａ地区中央南東寄りに位置する。平面形は楕円形で，長径87㎝，短径61㎝，深さ18㎝を測る。埋土は黒褐色粘土の単層である。出土遺物は弥生土器（*473*），土師器，須恵器がある。土器は土師質の摩滅した小破片が多くみられ，弥生土器甕，土師器椀・甕がある。須恵器は杯と思われる摩滅した小破片である。*473*は高杯脚部。器表面が剥離して器壁が非常に薄くなっており，調整不明である。弥生後期と思われる。

469号土坑（ＳＫ469，第42・103図，図版86・99・105）

Ａ地区中央東寄りに位置する。ＳＫ878，ＳＢ９の柱穴ＳＰ475を切り，ＳＫ471に切られる。平面形は不整形で，長軸3.82ｍ，短軸2.15ｍ，深さ22㎝を測る。埋土は炭化物の混じる黒褐色粘土の単層で，一部に地山のにぶい黄褐色粘土が混じる。出土遺物は弥生土器，土師器，須恵器（*475*～*477*），黒色土器（*474*），中世土師器，製塩土器，土錘（*486*），炉壁，石剥片，金属製品（*488*）がある。土器は土師質の摩滅した小破片が多くみられる。*475*は須恵器瓶類の口縁部。*476*は壺か甕の口縁部。*477*は横瓶か。体部内面に同心円文，外面に平行線文の叩きの痕跡が薄く残り，内外面とも縦方向のカキメを施す。外傾する短い口縁部が胴部外端に貼り付けられる。*474*は黒色土器椀。体部が直線的に開く浅い器形である。中世土師器は皿口縁部の小破片である。*486*は管状土錘。長細い樽形で，長

さ3.6㎝，幅1.4㎝，孔径３㎜，重さ5.8ｇを測る。*488*は鉄釘。断面方形で両端を欠損する。

487号土坑（ＳＫ487，第41・103図，図版83）

Ａ地区中央南東寄りに位置する。平面形は楕円形で，長径1.17ｍ，短径75㎝，深さ17㎝を測る。埋土は黒褐色粘土の単層で，地山のにぶい黄褐色粘土と炭化物の混入がみられる。出土遺物は土師器椀小破片，須恵器（*478*）がある。*478*は杯Ｂ。口径10.6㎝を測る小型のもので，体部は直線的に延びる。８世紀後半～９世紀前半。

502号土坑（ＳＫ502，第42・103図，図版87）

Ａ地区中央南東寄りに位置する。東側をＳＫ501に切られ，北西側でＳＫ503を切る。平面形は楕円形で，長径92㎝，短径70㎝，深さ34㎝を測る。埋土は炭化物が僅かに混じる灰黄褐色粘土を基調とし，一部下層には炭化物が帯状に沈着する黒色粘土層が堆積する。出土遺物は縄文土器，土師器小片多数，須恵器円面硯（*479*）がある。*479*は透脚円面硯の脚部。四方に長方形の透かしが入り，透かしの上方に沈線，下方に突帯を巡らせる。接合はしないが同一個体と思われる破片がＳＤ１，地震痕跡から出土している。８世紀。

552号土坑（ＳＫ552，第42図）

Ａ地区中央南寄りに位置する。西側をＳＫ551に切られ，東側でＳＫ553を切る。平面形は円形で，直径55～72㎝，深さ31㎝を測る。埋土は地山の青灰色粘土と炭化物が混じる黒褐色粘土の単層である。出土遺物は弥生土器，土師器，須恵器，黒色土器がある。土器は土師器椀の小破片が多くみられる。須恵器は甕の胴部片，黒色土器は椀の体部片である。

586号土坑（ＳＫ586，第42・103図）

Ａ地区中央西寄りに位置する。平面形は楕円形で，長径42㎝，短径24㎝，深さ18㎝を測る。埋土は黒褐色粘土を基調とし，にぶい黄褐色粘土が下層に多く混じる。出土遺物は弥生土器，土師器，須恵器，鉄釘（*489*）がある。土器は全て小破片である。*489*は全体に厚く錆が付着する。断面方形の細い釘で，頭部が折れ曲がる。

607号土坑（ＳＫ607，第36・102図，図版104）

Ａ地区中央南寄りに位置し，南側でＳＫ608を切り込む。ＳＥ717，ＳＢ７，ＳＫ608，ＳＤ666から構成される水屋施設の一部と考えられる。平面形は隅丸方形で，長軸3.24ｍ，短軸3.03ｍ，深さ11㎝を測る。埋土上層は灰黄褐色粘土，下層は褐灰色粘土が薄く堆積する。出土遺物は，縄文土器，弥生土器，土師器，須恵器，黒色土器，珠洲（*455*）がある。455は珠洲甕。ＳＫ607からは胴部片が出土しているが，同一個体とみられる破片がＳＥ718他から出土している。Ⅳ$_1$期（1280年代～1320年代）。この他，土師質の摩滅した破片や須恵器の杯，杯蓋，甕が出土しているが，全て小破片である。

608号土坑（ＳＫ608，第36・103図，図版105）

Ａ地区中央南寄りに位置し，北側でＳＫ607に切られる。ＳＫ607と同様に，ＳＥ717，ＳＢ７，ＳＤ666から構成される水屋施設の一部と考えられる。平面形は隅丸方形で，長軸2.99ｍ，短軸2.48ｍ，深さ17㎝を測る。埋土は炭化物の混じる黒褐色粘土の単層である。出土遺物は弥生土器，土師器，須恵器，黒色土器，中世土師器，鞴羽口，鉄釘，土錘（*487*）がある。土器は土師質の摩滅した小破片が多くみられる。須恵器は杯，杯蓋，瓶類，甕がある。中世土師器は皿の口縁部小片である。*487*は管状土錘。丈の短い寸胴形である。長さ2.6㎝，幅2.2㎝，孔径５㎜，重さ10.1ｇを測る。上下端に平坦な切断面を残す。孔を開ける際，道具を上から下へ向かって引き抜いていることがわかる。

646号土坑（ＳＫ646，第42・102・103図，図版104・115）

Ａ地区中央に位置し，北側をＳＫ653に切られる。平面形は歪な楕円形で，長径1.92m，短径1.58m，深さ24cmを測る。埋土は灰黄褐色粘土を基調とし，一部下層に地山の褐灰色粘土が混じる層がある。出土遺物は土師器，須恵器，珠洲（*455*），鉄滓（*490*）が出土している。土器は土師質の摩滅した小破片が多くみられる。*455*は珠洲甕。同一個体と思われる破片がＳＥ718他から出土している。 Ⅳ$_1$期（1280年代～1320年代）のものである。

653号土坑（ＳＫ653，第42・103図，図版96）

Ａ地区中央に位置し，南側でＳＫ646を切る。平面形は不整形で，長軸1.72m，短軸1.70m，深さ14cmを測る。埋土は褐灰色粘土の単層である。出土遺物は縄文土器，弥生土器，土師器（*480*），須恵器，鉄滓がある。*480*は土師器椀Ａ。地震痕跡から出土した破片と接合する。体部が直線的に延びながら大きく開く器形をとる。粘性の強い埋土のため器表面が全体に剥離して薄くなっており，調整は不明だが，９世紀後半～10世紀のものと思われる。土器は*480*の他に土師質の摩滅した小破片が多くみられる。須恵器は杯と甕の小破片が多くある。

701号土坑（ＳＫ701，第42図）

Ａ地区中央南西寄りに位置する。東側の一部を地震による地割れで失う。平面形は円形で，直径88～90cm，深さ18cmを測る。埋土は褐灰色粘土の単層である。出土遺物は弥生土器，土師器，須恵器，中国製青磁があるが，全て小破片である。

710号土坑（ＳＫ710，第42・103図，図版10・96）

Ａ地区中央南東寄りに位置する。平面形は円形で，直径1.24～1.28m，深さ53cmを測る。埋土上層は黒褐色粘土，下層は褐灰色粘土を基調とし，中層から下層には地山のにぶい黄褐色粘土が混じる。出土遺物は弥生土器，土師器（*481*～*483*），須恵器がある。土器は土師質の摩滅した小破片が多数と，須恵器杯の体部片及び甕の胴部片が多くみられる。*481*～*483*は土師器椀Ａ。*481*は体部が僅かに内湾しながら立ち上がる器形。*482*・*483*は底部のみの残存であるが，胎土や色調，体下部の立ち上がりなど，*481*に非常に良く似たつくりである。粘性の強い埋土のため器表面が全体に剥離して薄くなっており，いずれも調整は不明であるが，９世紀後半～10世紀のものと思われる。

730号土坑（ＳＫ730，第42・103図，図版100）

Ａ地区中央西寄りに位置する。平面形は瓢箪形で，長軸69cm，北側の短軸43cm，深さ28cmを測る。埋土は黒褐色粘土を基調とし，一部下層に灰黄褐色粘土が堆積するほか，南側を中心に掘形が崩れたと思われる地山に近い褐灰色粘土層がみられる。出土遺物は弥生土器，土師器，須恵器，製塩土器(*484*)がある。土器は土師質の摩滅した小破片が多くみられる。須恵器は壺瓶類の胴部片がある。*484*は平底の製塩土器。外面に指頭圧痕を残す。８世紀以降のものである。

874号土坑（ＳＫ874，第40図）

Ａ地区中央北寄りに位置する。平面形は円形で，直径22～24cm，深さ19cmを測る。埋土は地山の青灰色粘土と炭化物の混じる黒褐色粘土の単層で，底面近くからクリ材の柱が２点出土した。柱は２点のうち１点について放射性炭素年代測定を実施し，895ＡＤ～990ＡＤ（１σ）との結果を得ている[注23]。掘立柱建物の柱穴の可能性が高いが，建物を構成し得なかったため，ここでは土坑として扱った。他の出土遺物はない。

2039号土坑（ＳＫ2039，第42・103図，図版103）

Ｂ地区中央南寄りに位置する。平面形は楕円形で，長径32cm，短径22cm，深さ22cmを測る。埋土は

注23　第二分冊　自然科学分析　株式会社加速器分析研究所　「放射性炭素年代測定」

炭化物の混じる暗褐色シルトの単層である。出土遺物は中世土師器（*485*）がある。*485*は口縁部に幅の狭い１段ナデを施す皿。15世紀後半～16世紀のものである。

Ｅ　溝・自然流路

１号自然流路（ＳＤ１，第43～46・102～140・146図，図版11～13・16～26・32・34・39・66～105・109～115）

調査区中央南寄りを東西に流れる自然流路である。1952年に撮影された航空写真（図版１）をみると，流路は埋め立てられて田圃となっているが，かつての流路と推測される部分の土は暗色が強く，その痕跡を確認することができる。航空写真では，流路は十三谷の北西奥から調査区中央南寄りを通って東へ向かい，現在の鞍骨川と仏生寺川が合流する付近か，あるいはそのやや手前で鞍骨川に合流している。このことからＳＤ１は鞍骨川の支流であり，近世から近代にかけて埋め立てられた旧河道であると考えられる。なおＳＤ１が開析された時期は，十三平野が形成されたと考えられる縄文時代中期初頭頃に求められるが，確実に存在していた時期は，最も古い遺物が岩峅野式であることから縄文時代後期初頭頃と考えられる。ただし，縄文時代の遺物の出土状況から推測される当時の流路は非常に不安定であり，今回の調査で検出した規模となるのは弥生時代後期以降であると考えられる。底面から出土した種子の放射性炭素年代測定結果[注24]も，これを裏付けている。

流路は，Ａ地区中央南寄りで北岸，Ｂ地区北西部と北東角で南岸を検出した。Ａ地区とＢ地区の間には農業用水路が通るためＳＤ１は分断されるが，検出面や埋土から同一遺構であると考えた。検出面は古代・中世遺構面と同一のⅢｃ層であるが，Ⅰｂ層直下から切り込んでいることを確認している。流路の幅は約60ｍを測り，北岸では２回の段をつけて落ち込み，深さは最深部で約３ｍを測る。北岸に位置する古代～中世集落の南側と東側を水流で削っており，特に地盤の弱い北岸の東寄りにおいては渦を巻いて深く窪んだような所もみられることから，水流の激しい時期があったと考えられる。南岸のＢ地区では段をつけて落ち込んだ内部に流路が２本弧を描いて流れる。ＳＤ１の上層から中層にかけては灰色や暗灰色の粘土が堆積し，主に中世～近世の遺物が出土した。底面近くには小石混じりの粗砂層（12層）が厚さ約20㎝～1.5ｍ程堆積しており，この土層内から縄文時代後期初頭～晩期，弥生時代後期，奈良・平安時代の遺物が多く出土した。遺物量は縄文時代と奈良・平安時代のものがとりわけ多く，特に奈良・平安時代の土器は，まとめて廃棄されたような様相をみせる。

調査終了後に，下層確認のためＳＤ１を横断する位置で調査区内にトレンチを入れた結果，小石混じりの粗砂層の堆積が北側に広がることが判った（19層）。縄文時代の遺物を若干包含していたことから，縄文時代の流路は弥生時代以降の流路よりも幅が広かった可能性が考えられる。ただし，断面観察においては明確な切り込み面などは見られなかったため，流路として確定しない不安定なものであったようである。19層については，ここでは大きく水成堆積層と捉え，基本層序の項で示したⅣ′層に対応するものと考えている。十三平野の形成段階において，開析と埋没が繰り返された過程が伺える。

縄文土器（第104～114図*491～688*，図版12・16～26）

後期初頭（*491～509*）　*491*は台付鉢の台部分。縦に細い断面三角形状の突線文を貼り付け，下端部には突起状の貼り付けもある。脚上部に３箇所丸く窓のように空く部分がみられ，脚下部に一部剥離したような跡が残っていることから，下部が繋がり楕円形の透かしのようになると考えられる。*492*は外面に断面三角形状の突線文を貼り付ける深鉢底部。後期初頭（岩峅野式）。*493・494*は口縁部に無文の粘土紐を２条貼り付ける浅鉢。*493*は波状口縁となる。*495～509*はブリッジをもつ無文のも

注24　第二分冊　自然科学分析　株式会社加速器分析研究所　「放射性炭素年代測定」

のをまとめた。後期初頭を中心とする時期のものと思われる。口縁部が緩やかに内湾するもの（*495*～*504*），内屈するもの（*505*）があり，浅鉢になると思われる。*506*は肩が張り頸部がすぼまる器形の鍔付土器。*507*も同様の小型品。*508*は口縁部が内傾して立ち上がり，ブリッジの上部を指で摘み尖らせる。*509*はブリッジの位置に頂部が来る波状口縁。頂部の両側に穿孔するが貫通しない。

後期前葉（*510*～*620*）　*510*～*530*は口縁部に沈線文をもつ深鉢。気屋式直前段階とされるものを中心とする。*510*～*521*は口縁部や頸部に１～３条の波状や渦巻状の沈線を引く。*517*・*518*の波状沈線は三角形刺突文の祖型と思われる。*511*・*519*・*520*の沈線は波頂部でＪ字状となる。*522*～*528*の沈線内には規則的な節がみられ，列点や連続刺突状になるものもある。器形は，口縁部が強く内屈するもの（*510*～*514*・*519*・*522*），内湾気味に立ち上がるもの（*515*・*520*・*528*～*530*），外反するもの（*516*～*518*・*521*・*523*～*527*）がある。

531～*559*は，口縁部に沈線や円形刺突，連続刺突を施す深鉢。口縁部が内湾気味に立ち上がるものが多くみられる。*531*は口縁部に幅広の平行沈線を３条引き，２個１単位の指頭圧痕を押す。*532*～*536*も２個１単位の指頭圧痕を持つもので，沈線内に連続刺突を加える。*537*～*541*・*552*～*559*は末端刺突をもつ沈線や円形の連続刺突文がある。*542*～*547*は斜めの短沈線を引き並べたりヘラ連続刺突をする。*549*～*551*は円形の連続刺突文をもつ波頂部や小突起。*552*は沈線文間を細かいＲＬ斜縄文で充填する。*560*～*562*は鉢の口縁部突起。沈線で渦巻文を施し，円形の刺突をする。*563*は口縁部にブリッジを持つ浅鉢。ブリッジの付け根に円形刺突を施す。*564*～*568*は口縁が内湾する浅鉢。*564*は沈線と円形刺突を施し，*565*～*568*は沈線で幾何学文を描く。*566*には補修孔がある。*567*・*568*は磨消縄文を施す。*569*は注口土器か壺。逆Ｊ字状に粘土帯を貼り付け，その上を沈線でなぞり，周囲に円形刺突を入れる。口縁部に孔があり，蓋が付く可能性がある。*570*は短く外傾する口縁部を持つ鉢。頸部に２条の沈線を巡らせ，内湾する体部にはＪ字やＵ字状の沈線文を引く。*571*は強く内湾する鉢の胴部。幅広の沈線で幾何学文を描き，磨消縄文を施す。*572*は屈曲する口縁部に末端刺突を持つ沈線を入れる浅鉢である。

573～*593*は口縁部に三角形連続刺突文を押す深鉢。*573*は口縁部に半円状突起がつき，突起上に末端刺突のある沈線を引く。*574*は三角形連続刺突のある粘土帯が口縁部から垂下する。*575*～*580*は口縁部に末端刺突を持つ沈線で直線や曲線を引き，沈線内に三角形連続刺突を加える。器形は緩やかな波状口縁が内湾気味に立ち上がるものが多い。*575*の頸部以下には沈線で幾何学文を描き，磨消縄文を施す。*581*～*589*は緩く外反する口縁部に三角形連続刺突文を１～３列引き並べるもの。胴部はＲＬの斜縄文を縦位に施す。*581*～*586*は口縁部に指頭圧痕を２～４個押す。*590*～*593*は口縁部に斜縄文帯があり，その下に三角形連続刺突文を２～４列引き並べる。

594～*607*は口縁部にＲＬの斜縄文，胴部に縦位の斜縄文を施す粗製深鉢。*594*・*597*～*600*・*602*～*604*は口唇部にもＲＬの斜縄文を施す。*594*～*600*は頸部に２条の幅広の沈線を引き，*601*～*605*は幅が狭く深さのある沈線を２条引く。*606*・*607*は頸部を強く撫で回すか横方向に削って無文帯をつくり出す。

*608*は緩やかな波状口縁の深鉢。外反する口縁部の内面，口唇部，外面に細かい斜縄文を施し，横沈線を４条引く。胴部にはＲＬ斜縄文を縦位に施す。*609*～*612*も口縁部に巡る横沈線を主文様とする深鉢であるが，*609*には指頭による円文，*610*には末端刺突のある沈線と斜めの短沈線を加える。*612*は口唇部に斜縄文を施す。*613*は口縁部内外面に細かい斜縄文を施す。*614*～*619*は口縁部に刻みのある深鉢。*615*・*616*は刻みが口唇部から内面に至り，末端刺突のある沈線文がある。*616*・*617*は内面にも沈線や刺突がみられ，外面には粘土紐の貼り付けをする。*620*は口唇に斜縄文，外面に間隔をもっ

て巻かれた単軸絡条体を施す。条は縦走する。

他地域の影響を持つもの（*622*～*635*）　頸部に強い括れを持つ鉢（*625*・*626*），８字形の貼付文をもつもの（*626*～*628*）等があり，堀之内式の影響を強く受ける。*622*は浅鉢。外面を無文とし，内面と突起上面に，沈線で曲線文や渦巻文，平行線文を描く。口縁部には焼成前穿孔がある。*623*・*624*・*627*～*629*は外面を幾何学文で埋め，*624*・*627*・*629*には細かい縄文を充填する。*623*・*627*は口縁部内端に沈線を持つ。*630*は口縁部が屈曲する浅鉢。波状口縁となる口縁部に沈線文と円形刺突を施し，体部下半と内面は磨いている。内面が還元化されて黒色を呈すること，胎土に黒曜石とみられるガラス質の石が含まれていること等，他と様相が異なる。*631*・*632*は内面に沈線を引く浅鉢。加曾利Ｂ１式併行期。*633*は元住吉山式の注口土器口縁部。頸部と肩部に沈線を巡らせ，口縁内端を丸く突出させるように整形する。*634*・*635*は注口土器の注口部。*634*は付け根に２条の沈線を巡らせており，堀之内～加曾利Ｂ式併行期のものである。

後期中葉（*636*～*646*）　*636*は口縁部が直線的に延びる深鉢。３波頂の波状口縁で，頂部下に小孔をあける。外面に４条の浅い沈線を巡らせ，口唇部に刻みを持ち，内面に２条沈線を引く。補修孔がある。*637*も３波頂の波状口縁で，波頂部に小孔のある突起，波頂間に小突起をもつ。外面には平行沈線を引き，沈線間に刻みや，矢羽根状の沈線文，条線文を入れる。

638～*646*は小片であるが，外面に平行沈線を引き，沈線間に刻みを入れるもの（*638*・*640*～*642*・*645*），沈線間の刻みが～状になるもの（*643*・*644*・*646*），条線文のあるもの（*639*・*646*）がある。*639*は条線で垂下する蛇行線文を描く。口縁部内端には沈線を１条（*643*・*644*・*646*），２条（*638*・*640*・*642*），３条（*641*）引くものと，沈線のないもの（*639*・*645*）がある。口唇部には全て刻みがある。

後期後葉（*647*）　八日市新保式の浅鉢。直線的に延びる体部に内屈する口縁がつく。口縁部外面には刺突を１列施し，その上部には連結三叉文と思われる沈線文がみられる。内底面には刷毛状のもので漆を塗る。

晩期前葉（*621*・*648*～*650*）　*621*は波状口縁の口唇部に縄文を施す深鉢。*648*は胴部上半に屈曲をもち，口縁部が緩く外反する深鉢。４波頂の波状口縁には玉抱三叉文をもち，口縁部に縄文を施す。御経塚式の中でも古手のものである。*649*は口縁部が内湾する椀形の浅鉢。玉抱三叉文と連弧文を持ち，磨消縄文を施す。*650*は緩やかな波状口縁で丸底の浅鉢である。外面は無文であるが丁寧に調整されており，口縁部外面を軽く面取り風にして稜を持たせる。稜の下に２個の穿孔があり，蓋をもつものであろうか。

晩期中葉（*651*～*665*）　*651*は中屋式の浅鉢。体部が内屈し，底を丸く窪ませて底部とする。沈線と列点を持ち，ＬＲの細かい縄文を施す。外面に赤彩痕が残る。*652*・*653*は無文の浅鉢。*652*は体部が緩やかに内湾し，内外面に薄く粘土の輪積み痕を残す。*653*は口縁部内端と外面に沈線を１条ずつ巡らせる。

654～*665*は条痕を施す粗製深鉢。口縁部が緩く屈曲してくの字状となるものが多い。口縁部を刻むもの（*654*～*659*）と，刻まないもの（*660*・*664*）がある。*661*・*662*の外底面には網代圧痕がみられる。

この他，後期から晩期の底部片をのせた（*666*～*688*）。網代圧痕（*668*～*670*・*673*～*677*・*684*），スダレ状圧痕（*666*・*667*・*671*・*672*・*681*）がみられる。*666*～*677*は器壁が厚く，胴部が外傾して立ち上がる深鉢。後期前葉を中心とする時期のものを主体とする。*671*のスダレ状圧痕は編まれた素材の間隔が密で器壁も薄く，堀之内～加曾利Ｂ式に典型的なものである。*679*の外底面にはイネ科の草の葉文を残す。*681*～*684*は薄い器壁で小さめの底部から胴部が強く外傾するもので，晩期と思われる。

*684*は輪状に貼り付けた台部が一部剥離しており，その剥離面に網代圧痕が残る。

縄文時代の土製品（第115図*689*～*712*，図版13・26）

土偶（*689*・*690*），土器片加工品（*691*～*712*）がある。*689*は背が反り返り，上に向いた短い腕がつく。頭部を欠損するが，首が前方に突き出た表現が，石川県宇ノ気町気屋遺跡及び福野町安居五百歩遺跡出土土偶と共通する[注25]。後期前葉と考えられる。*690*は土偶の頭部片か。頭部と思われる突部中央に浅い穴を開ける。*691*～*712*は，土器片の周囲を打ち欠き成形したものである。*692*は楕円形に成形して上下端に切り込みを入れており，土器片錘と思われる。外面にＲＬの縄文がみられる。*693*～*712*は丸く成形した，いわゆる円盤状土製品である。外面の文様には，ＲＬの縄文（*698*・*705*・*706*・*710*），条線文（*700*），沈線文（*701*）があるが，大半は摩滅して不明である。

弥生土器（第116図*713*～*742*，図版32・34・39）

甕，壺，高杯，器台，鉢，ミニチュア土器がある。土器の時期は後期前半（猫橋式）を主体とし，一部後期後半（法仏式）に降るものが含まれる。

713～*717*は擬凹線甕。*713*～*716*は外反する頸部に短い口縁部がつき，擬凹線は２条程度と少ない。*714*～*716*の口縁部は外傾する。*717*は直立する口縁部に擬凹線を４条引く。*718*・*719*は有段甕。口縁端部が直立し，*718*は縁を丸く収め，*719*は面取りする。*719*の口縁部外面には，ふきこぼれとみられる焦げが付着する。*720*は受口甕。やや外傾する口縁部に刺突文を施す。*721*～*725*はくの字口縁の甕。*721*～*723*は口縁端部を面取りして断面三角形状にする。*724*は付加状口縁，*725*は丸縁である。

726～*729*は壺。*726*の口縁部は内傾し，*727*・*728*は外反させて端部を面取りする。*726*・*727*の外面にはハケメが残るが，内面は摩滅して調整不明である。*728*は外面に縦位のミガキ，内面にハケメ調整を施す。*729*は肩部に突帯を貼り付け，下側を櫛状工具で斜めに連続刺突する。

*730*は器台。口縁部に円形浮文を貼り付ける。

731～*733*は高杯。*731*は受部下半に半環状把手がつく。*732*は透孔を３個あける。*733*は擬凹線を引く脚基部。*734*は内外面にハケメ調整を施す脚部。*735*は棒状脚。

*736*は蓋。摘みの中央を窪ませる。全体に摩滅するが，外面に僅かにハケメの痕跡が残る。

*737*は天王山式系の土器。短く外傾する口縁部と内湾する体部をもち，鉢形の器形をとる。体部内面はハケメ後ナデ調整し，外面は横ナデ後，口縁部に１列，屈曲部と肩部に２列の列点文を斜めに刺突する。

738・*739*は有孔鉢。*738*の内面にはハケメが明瞭に残るが，外面は溶けたように摩滅する。*739*の内面は，指頭圧痕及び成形時の粘土の皺や焼成前穿孔による孔周辺の粘土の盛り上がりがみられ，平滑さを欠く。

740～*742*はミニチュア土器。*740*は鉢形。外面に縦のハケメを施し，底部近くに粘土を撫で付けた痕跡を残す。*741*は壺形。器壁が薄く，器形に歪みが少ない。全面摩滅する。*742*は高杯形。脚基部に棒状具を差し込んだ跡が残る他は全面摩滅する。

弥生時代以降の土製品（第116図*743*～*749*，図版105・114）

743～*748*は管状土錘。寸胴形（*743*・*744*），樽形（*745*～*748*）がある。*743*は上下端に切断痕とみられる平らな面がある。孔を開ける際，道具を上から下へ向かって引き抜いている。*744*は表面に指頭圧痕を多く残し，形が一定でない。*749*は鞴羽口。先端部の断片で，外面にガラス質の溶着物が付く。

須恵器（第103・117～126図*479*・*750*～*992*，図版66～87）

杯Ａ，杯Ｂ蓋，杯Ｂ，コップ形，円面硯，高杯，皿，長頸瓶，広口瓶，双耳瓶，横瓶，小型瓶，短

注25　小島俊彰・神保孝造　1992「北陸の土偶」『国立歴史民族博物館研究報告』第37集

頸壺，甕が出土している。８世紀中頃～９世紀中頃のものを中心とし，僅かに８世紀前半に遡るものと９世紀後半～10世紀前半に降るものがある。食器についての構成は第15表に示した。

ヘラ記号・墨書（*750*～*774*）　*750*～*752*は杯Ｂ蓋。*750*の端部は短く折り曲げ，断面三角形状をなす。頂部は回転ヘラ切り後ナデ調整する。内面中央にヘラ記号「×」を入れる。器表面の粘土の動きから，「＼」→「×」の順に書いたことが判る。*751*は内面にヘラで平行線２本を引く。頂部は回転ヘラ削りを施し，宝珠状つまみを貼り付ける。*752*は内面にヘラ記号の一部がみられる。*753*・*754*は杯Ｂ。*753*は高台内にヘラ記号「米」を入れる。ヘラ線の切り合いから，「―」→「／」→「＼」の順に線を書き加えていることが判る。高台内側には薄く墨痕が残るが，硯面として使われたような摩耗痕はみられないため，パレットとして使用されていたものか。*754*は外底面にヘラ記号の一部がみられる。高台が剥離する。

755～*766*は杯Ａ。いずれも外底面に墨書の一部がみられる。*755*～*759*は底部小片。*755*は「□［中ヵ］。*756*は二文字あることが判るが判読不可能。*760*・*761*はつくりの酷似した製品。いずれも内底面にヘラ記号，外底面に墨書の一部がみられる。墨書は判読不可能。*762*は「真六□［万ヵ］」。「真六」は外底面の左寄りに，「□［万ヵ］」は外底端から体部立ち上がりにかけて墨書する。「真六」が細字で達筆であるのに対し，「□［万ヵ］」は太字の悪筆である。異なる二者の筆からなるものと考えられる。*763*・*764*は「歌人」。共に払いが長く，字体が似ている。*765*は「仁□［支ヵ］女」あるいは「仁□［文ヵ］女」。外底面の左寄りに書く。*766*は半分の残存であるが，中央に大きく「○」を書く。

767～*769*は杯蓋。*767*は内面右下に「中家」を墨書する。留めや払いが甘い頼りない書体で，書くことに慣れていない様子である。天井部に回転ヘラ削りを施し，端部がＮ字状に強く屈曲する。*768*は外面に「□安」を墨書する。内面は転用硯として使用されており，墨痕がみられるとともに，摩耗して非常に滑らかである。*769*は外面に「□本□［家ヵ］」を墨書する。内面は墨が付着しており，転用硯として使用されていたと思われるが，摩耗の程度は低い。

770～*774*は杯Ｂ。いずれも高台内に墨書する。*770*は「□□［中家ヵ］」。*767*に似て頼りない書体である。高台内全面に薄く墨が広がっており，判読が難しい。接合はしないが同一個体と思われる底部片があるが，これにも高台内側に墨が付着している。転用硯として使用されていた可能性が高いが，器表面の摩耗の程度は低い。*771*は高台内の下寄りに「□□［本家ヵ］」を墨書する。*772*は高台内の中央やや上寄りに小さく「小郡」を墨書する。内面の器表面には爆ぜたような小穴が多くあいている。*773*は上寄りに「□［忍ヵ］」を墨書する。摩滅のため判読が難しく，「□［為ヵ］」の可能性もある。*774*も全体に摩滅しており判読不可能である。

漆書（*785*～*798*）　*785*～*787*は杯蓋。*785*は外面を回転ヘラ削りする小片。鈕とみられる突起の一部が残る。外面に漆書の一部がみられる。*786*・*787*は内面端寄りに「川」の漆書がある。*786*は端部を強く屈曲させるもので，安居窯の製品である可能性がある。*788*・*789*は杯Ｂ。高台内側の中心からずらした部分に「川」の漆書をする。*790*～*798*は杯Ａ。いずれも外底面の中心からずらした部分に「川」の漆書をする。*790*・*791*は青灰色の硬質な焼成で，器厚の均一なつくりである。*793*・*794*は灰白色を呈するやや軟質な焼成で，非常によく似たつくりである。*795*～*797*は器厚が一定ではなく，褐色味がかった焼き上がりである。体部はやや開き気味に立ち上がる。*798*のつくりも同様であるが，外底面の調整がより粗い。

漆塗り・漆付着（*778*～*784*）　*778*・*779*は内面に漆を塗るもの。漆分析を実施している[注26]。*778*はコップ形で，計量器として位置づけられる。容量は約350mlを測る。口縁部のみ横ナデし，体部中程

注26　第二分冊　自然科学分析　漆器文化財科学研究所　「漆器・漆製品の科学分析」　分析中において*778*は筒形容器と記載している。

から底部にかけては丁寧な回転ヘラ削り調整で平滑に仕上げる。内全面には漆を均一に塗っており，口縁部外面に少しはみ出す。外底面の一部にも漆の付着がみられる。*779*は杯Ａ。底部のみの残存である。外底面には回転ヘラ切り痕が残り，再調整はされていない。*780*～*784*は，いずれも黒色漆の付着がみられるものである。

墨付着・転用硯（*776*・*777*・*799*～*814*）　*776*は杯蓋。外面に墨が付着しており，パレットとして使用されたと思われる。*777*は杯Ａ。器壁の薄いつくりで，内底面に墨痕が残る。これも硯面として使用したような摩滅はみられない。*799*は杯蓋。ボタン状の摘みを貼り付け，端部は短く下方へ折り曲げる。焼き歪みが大きい。内面に墨痕がみられ，一部に筆先の判るものもある。*800*～*810*は杯蓋の転用硯。内面が摩耗して非常に滑らかで，墨の付着がみられる。端部の形態は，短く折り曲げるが外方に反るもの（*800*），断面三角形状をなすもの（*801*～*803*），丸みを帯びるもの（*804*～*806*），屈曲するもの（*807*～*809*）がある。*810*は端部の作出は甘く，無鈕となる。*811*～*814*は杯Ｂの転用硯。高台内が摩耗して滑らかで，墨の付着がみられる。

円面硯（*479*・*775*）　*775*は透脚円面硯。硯面は中央から緩やかに低くなり海となるもので，杉本氏分類[注27]の山形硯面，吉田氏分類[注28]のＢ種に該当する。陸と海の境の内堤はなく，硯面は外堤から内側に向かって約２㎝離れたところから使用による摩滅がある。裏面には降灰がみられる。この他に透脚円面硯の脚部（*479*）が出土している。接合はしないが，ＳＫ502，地震痕跡の出土破片と同一個体と思われる。

杯Ａ（*826*～*900*）　*826*・*827*は外底面に回転ヘラ削りを施し平滑に仕上げる。８世紀前半。*828*～*900*は外底面に回転ヘラ切り痕を残すものである。口径は10.8～14.0㎝のものがある。大別して口径約11～12㎝のものと12～13㎝前後のものの２法量に分けられ，12～13㎝を測るものが多くみられる。*828*は例外的に口径14.0㎝と大きい。口縁部は直線的に立ち上がるものが多くみられるが，外反するもの（*829*・*848*・*850*・*858*・*860*）もある。*863*～*871*は厚い底部から口縁を薄く挽き出す。*872*～*880*は深身のもの。口縁部は直線的に延びるものが多いが，*880*は外反させる。*881*～*891*は比較的浅いもの。底部から開き気味の体部が立ち上がる。*882*・*884*・*885*・*891*は内底端を窪ませる特徴がある。*892*～*895*は底部と体部の境が厚く角張るもの。*892*は体部外面に浅い沈線を３条巡らせる。*893*～*895*は厚い底部から開き気味の体部が直線的に延びる。外底面の調整は粗い。*896*～*900*は体部の開きが大きく，器壁の薄いつくりである。須恵器の時期は，概ね８世紀中頃～９世紀中頃に収まるが，*896*～*900*は９世紀後半～10世紀前半頃と考えられる。また全体の約15％に油煙痕や煤の付着が認められ，灯明器として使用されたと思われる。

杯Ｂ蓋（*815*～*825*）　*815*～*820*は頂部ヘラ切り後回転ナデ調整を施し，擬宝珠状あるいはボタン状の摘みを貼り付けるもの。*815*・*816*は端部を短く折り曲げ，*817*～*820*・*824*は端部を丸く巻き込み気味にする。*821*～*823*の頂部は回転ヘラ削りにより平滑に仕上げている。*825*は口径19.3㎝を測る大型のもの。端部は短く下方に折り曲げるがやや丸みを帯びる。

杯Ｂ（*901*～*934*）　*901*～*908*は体部が開き気味に立ち上がる浅い器形のもの。口径は13.2～14.6㎝のものがある。*901*～*904*は口縁部が外反し，*905*～*908*は直線的に延びる。８世紀前半～中頃のものである。*909*～*934*は体部が直線的に開く深い器形で，８世紀中頃～９世紀中頃のものである。口径は10.0～15.8㎝のものがある。大別して口径10.0～11.4㎝のもの，11.6～12.4㎝のもの，14.5～15.8㎝のものの３法量に分けられ，中型のものが比較的多くみられる。*909*は体部外面に沈線が巡る。*917*は内底面に重ね焼きによる高台の融着痕が残る。

注27　杉本宏　1987「飛鳥時代初期の陶硯－宇治隼上り瓦窯跡出土陶硯を中心として－」『考古学雑誌』第73巻第２号　日本考古学会
注28　吉田恵二　1985「日本古代陶硯の特質と系譜」『國學院大學考古学資料館紀要第１輯』國學院大學考古学資料館

高杯（*935*）　脚部で，器壁は厚く，下方に向かって器厚を減じる。杯部内面には多方向の指ナデがみられる。８世紀後半。

皿（*936*～*938*）　*936*・*937*は底部回転ヘラ切りのもの。*936*は外底面のヘラ切り痕を丁寧に撫で消す。体部はやや外反気味に延び，端部を丸く収める。９世紀末。*938*は外底面に回転糸切り痕を残す。10世紀。

壺蓋（*960*）　均一な器厚の丁寧なつくりである。頂部の調整は降灰のため不明である。端部はやや丸みを帯び，内面に稜を持つ。

壺・瓶（*939*～*959*・*961*～*978*）　*939*～*945*は長頸瓶の口縁部。頸部が直線的に延びて口縁端部で外反させるものと，頸基部から外反するものとがある。*942*は頸部外面に沈線を２条巡らせる。*946*は広口瓶，*947*は直口壺か。*948*は長頸瓶。肩上部に２条，胴部中程に１条沈線を巡らせる。*949*・*950*・*952*～*954*は耳がある瓶。*949*は肩部に環状の耳の一部が残る。頸部に３条，肩上部に１条沈線を巡らせる。*951*は広口瓶か。内面下方に降灰がみられる。*955*～*959*は小型瓶。*955*は高台内にヘラ記号「×」がある。*959*は胴部外面下半を回転ヘラ削りする。*961*・*962*は短頸壺。肩が張る器形で，*961*の胴下部には手持ちヘラ削り，*962*は回転ヘラ削りを施す。*962*の胴部中程には浅く沈線２条が巡る。*963*～*968*は壺瓶類の高台部分。高台内端のみ接地するものと，高台が断面四角形状をなし接地面の大きいものとがある。*969*～*974*は壺か瓶の底部。*969*は丸底のものを平底に成形し直したものであろうか，外底面にも薄く叩き跡が残る。体部下半は叩きの後手持ちヘラ削りを施す。*974*は外底面に回転糸切り痕を残す。*975*～*977*は横瓶か小型甕の口縁部。*978*は横瓶の体部。円盤閉塞部分に繋がる部位と思われる。

甕（*979*～*992*）　*979*～*981*は口縁部が直立気味に立ち上がり，端部が内傾する。*982*・*983*は口縁部が外傾あるいは外反し，端部も外傾する。*984*・*985*は口縁部を薄く挽き出し，端部が拡張する。*984*の頸部には叩き板の端が当たった跡がみられる。*986*は頸部を強く屈曲させ口縁部を挽き出す。*987*～*989*は口縁部に突帯を持ち，櫛状具による波状文を巡らせる。*987*・*988*は１段，*989*は上下２段に波状文を引く。いずれも波状文は鋭い原体によって施されており，波の間隔も細かい。*990*・*991*も波状文が巡るが，原体は棒状具で，浅く上下２段に引く。口縁端部は外傾する。*992*は波状文を入れず，口縁端部を下方に垂下させる。

土師器（第127～133図*993*～*1160*，図版76・77・87～92・94～98）

器種は須恵器写しの杯，椀Ａ・Ｂ，皿，鉢，甑，甕，鍋がある。食器の構成は第15表に示したが，食膳具が多数を占め，煮炊具の占める割合が非常に少ない傾向にある。８世紀中頃～11世紀と幅広い時期のものが出土しているが，８世紀後半～９世紀前半のものが多くみられる。

刻書・線刻（*993*～*996*）　*993*は焼成前，*994*～*996*は焼成後に線刻された可能性が高い。*993*は椀の内底面に棒状具で縦３本，横２本の線を押し引く。「丹」或いは「田」の文字とも思われるが，記号である可能性が高い。原体は繊維状の筋のある棒状具である。外底面には回転糸切り痕を残す。*994*は須恵器の杯を写した器形。調整は摩滅して不明である。外底面中央に「米」を書く。細く鋭い原体である。*995*は外底面に直線４本，曲線１本を線刻する椀。線の間隔や長さは一定ではない。外底面は器面が荒れているが，静止糸切りに近い緩やかな回転糸切り痕が薄く残る。*996*は体部が直線的に延びる皿Ａ。体部外面に計７本の直線を引く。線は３本と４本に分けられ，それぞれ底部側から口縁部側に向けて引っ掻くようにつけられている。

墨書・墨付着（*997*～*1000*）　*997*～*999*は内面をヘラ磨きする椀Ａ。体部下半を手持ちヘラ削りした後，*997*・*999*は回転ヘラ削りを施す。外底面は*997*・*998*が静止糸切り，*999*が回転糸切りである。

外底面の墨書文字は，*997*が「□□［左ヵ］」或いは「□□［庄ヵ］」，*998*が主」，*999*が「田□である。*1000*は皿Ａ。内面に墨が付着する。パレットとして使用したものか。

漆書・漆塗り・漆付着（*1001*～*1008*）　*1001*・*1002*は椀Ａ。*1001*は外底面に，*1002*は体部外面下半に文字状の漆書があるが，判読不可能。*1003*・*1004*は内全面に漆が付着する椀Ａ。*1003*の漆は均一であるが，*1004*は漆を攪拌したような筋状の痕跡と塊がみられる。漆分析を実施しており，*1003*は漆塗り，*1004*は漆パレットとの結果を得ている[注29]。この他，内面に黒色物質の付着した椀が４点ある（*1005*～*1008*）。分析は行っていないが，漆である可能性がある。

杯（*1009*・*1010*）　須恵器杯写しの器形で，平坦で大きい底部から僅かに外反する体部が立ち上がる。砂粒を多く含む特徴的な胎土である。*1009*の外底面には糸切り痕が薄く残るが，緩やかな回転で末端が交差していないものである。８世紀後半。

椀Ａ（*1011*～*1113*）　*1011*～*1040*は器壁が厚手のもの。胎土は暗黄褐色系の色調で骨針の含有が少なく，硬質な感じのものが多い。内外面の調整に磨きや手持ちヘラ削り，回転ヘラ削りが多用され，赤彩されるものを一定数含む。外底面には静止糸切り或いは回転糸切り痕を残し，再調整されないものが多い。但し回転糸切りとしたものの中には末端が交差していないものが含まれ，静止糸切りの中には弱い回転を加えて切り離しているようなものもあり，両者の区別が難しいものが多い。糸切りは比較的太い撚りの原体を用いている。８世紀後半～９世紀前半に収まる。

1011～*1020*は大きい底部から内湾する体部が立ち上がり，浅い器形をとるもの。口径12.4～14.4㎝を測る。外底面は*1011*～*1017*が回転糸切り，*1018*～*1020*が静止糸切りであるが，前述したように判別しがたいものも含まれる。*1011*～*1014*・*1018*は体部外面下半を回転ヘラ削りし，*1017*は手持ちヘラ削りする。*1015*・*1016*の内面にはヘラ磨きを施す。

1021～*1031*は小さい底部から直線的に体部が立ち上がる。器壁が厚く，深い器形をとるものが多い。口径10.5～12.0㎝を測る。外底面は*1022*～*1027*が静止糸切り，*1028*～*1030*が回転糸切りであるが，*1023*のように判別しがたいものも含まれる。*1021*・*1031*の底面はヘラ削りによる再調整を施す。摩滅して器表面の調整が不明瞭なものもあるが，体部外面下半には全て手持ちヘラ削りを施していると思われ，*1022*～*1024*は更に回転ヘラ削りを加える。*1021*～*1028*の内面にはヘラ磨きを施す。

1032～*1040*は体部が内湾しながら立ち上がるもの。口径12.2～13.2㎝を測る。外底面は*1032*・*1036*・*1037*が静止糸切り，*1033*・*1038*～*1040*が回転糸切りであるが，*1036*のように判別しがたいものも含まれる。*1032*・*1034*・*1035*の底面はヘラ削りによる再調整を施す。*1032*の内外面にはヘラ磨きを施すが，内面の磨きは横方向に粗く磨いた後，口縁部から内底面へ向けて一定間隔を空けて磨き下ろしており，暗文風にみえる。*1032*～*1040*の体部外面下半は摩滅して不明瞭なものもあるが，全て手持ちヘラ削りを施している。なお，*1016*・*1025*・*1028*・*1036*・*1038*・*1039*の口縁部には油煙が付着しており，灯明器として使用されていたことが伺える。

*1041*は底部の中央からずらした部分に直径８㎜の孔を貫通させる。焼成前穿孔と思われる。孔の周辺には，特に内面に摩耗がみられる。漏斗か。*1042*は内底面中央を円形に抉り取った後，円形の粘土で塞いだものと思われる。抉り部の直径は2.1㎝，閉塞粘土の直径は1.5～1.6㎝を測る。*1043*～*1045*は内底面中央を円形に抉り取って，浅い窪みをつくり出す。焼成前に行われており，*1043*・*1044*には右回り，*1045*には左回りの粘土掻き取り痕が残る。窪みの直径は，*1043*が８㎜，*1044*が1.5㎝，*1045*が2.0㎝を測る。こうした技法のあるものは，この３点の他に，土師器椀Ｂ（*1121*）にもみられる。

1045～*1113*は内外面を回転台成形し，外底面に回転糸切り痕を残すもの。器壁の薄いつくりで，特

注29　第二分冊　自然科学分析　漆器文化財科学研究所　「漆器・漆製品の科学分析」

に内面を丁寧に調整しており，平滑な仕上がりとなっている。赤彩されるものはない。時期は大半が９世紀後半頃に収まり，一部が10世紀前半に降ると考えられる。口径は9.6～18.2㎝のものがある。大別して口径9.6～9.9㎝，10.8～14.0㎝，14.9～18.2㎝の３法量に分けられるが，大型と中型のものは法量に幅があり，更に細分される可能性がある。数量は中型のものが非常に多くみられる。*1045～1051*は大型のもの。体部が内湾しながら立ち上がり，深い器形となる。口縁部はそのまま丸く収めるものと外反させるものとがある。*1052～1055*も大型のものであるが，浅い器形となる。口縁部は直線的に延びるもの（*1052・1054・1055*）と内湾しながら延びるもの（*1053*）がある。*1056～1062*は小さい底部から体部が内湾気味に延びて深い器形となるものである。*1063～1111*は中型のもので，体部が直線的に延びるもの（*1063～1075*）と内湾しながら延びるもの（*1076～1111*）がある。口縁端部の形態には，軽く屈曲させて稜を持つもの（*1066・1071・1074*），外反するもの（*1080・1084*）等があるが，大半はそのまま丸く収めている。*1095～1111*は若干器高が低くなり，浅い器形となる。小さく厚い底部から薄い体部が内湾しながら立ち上がるもの（*1108～1111*）は，若干時期が降る可能性がある。*1112・1113*は小型のもの。数が少なく，図示した２点のみ確認している。

油煙の付着により灯明器として使用されていたことが伺える資料は，前述の他にも*1048・1053・1081・1094・1099・1108*があり，土師器椀Ａ全体の8.4％を占める。法量は中型のものに限られており，浅い器形のものと，外面にヘラ削りや磨きが施される古い段階のものに集中する傾向にある。

椀Ｂ（*1114～1126*）　*1114～1116*は底端部に断面三角形状の小さい高台を持つ。貼り付け高台と思われるが，しっかりと撫でて接着しており，高台が剥がれるようなものはない。高台内の調整はヘラ削りの可能性が高いが，摩耗のため不明である。*1115・1116*は全面赤彩される。*1117～1121*は高さのある高台を体部下端に貼り付ける。高台内の回転糸切り痕は撫で消される。*1117*の高台は一部剥離しているが，他は比較的しっかりと貼り付けられている。９世紀後半。*1121*の内底面中央には，円形の窪みを抉り入れており，中央部の器壁は薄くなる。窪みの直径は2.0㎝を測る。円形の窪みは土師器椀Ａ（*1043～1045*）にも認められる。*1122～1124*も高さのある高台を貼り付けるが，高台内に回転糸切り痕を残す。高台の貼り付けは甘く，剥離するものが多い。*1122*の高台は底端部に貼り付けられる。９世紀後半～10世紀前半。*1125*は体部下端に細い高台を貼り付ける。高台内中央には回転糸切り痕を残し，高台周辺は強い撫でにより一段窪む。10～11世紀。*1126*は絞り出し高台。外底面中央に丸い盛り上がりがあり，高台周囲には強いナデがある。11世紀のものである。

皿（*1127～1133*）　*1127～1130*は皿Ａ。*1127～1129*は体部が直線的に延び端部を外反させる。*1130*の体部はやや内湾気味に延びる。外底面には回転糸切り痕を残す。*1131*の底部は回転糸切りによる切り離し後，１条のヘラ削りにより高台風の形状をつくり出す。外底面には回転糸切り痕が薄く残るが，回転の緩いもので，末端が交差しないものである。*1132*は皿Ｂ。断面方形の高台をしっかりと撫でて接着している。高台中央は盛り上がり，高台周囲は窪む。内面は滑らかに調整されており，摩耗して不明瞭であるが一部ヘラ磨きしている可能性もある。*1133*は厚い底部から体部が延びる皿。外底面には回転糸切り痕を残す。皿類の時期は９世紀末～10世紀前半の範囲に収まり，*1133*のみ10世紀後半～11世紀代に降ると思われる。

鉢（*1134～1136*）　鍋と同様の器形であるが，口径が17.8～19.4㎝と小型で，煤や炭化物の付着がないものを鉢とした。*1134・1135*は体部外面下半を手持ちヘラ削りし，外底面に糸切り痕を残す。*1134*は緩やかな回転のある静止糸切り，*1135*は回転糸切りである。口縁部は丸みを帯びているが，端部を面取りして外端に軽く稜を持たせている。９世紀前半。*1136*は薄手で，口縁端部を上方に引き上

げて丸く収めている。9世紀後半。

甑（*1137～1140*）　*1137・1138*は直立する口縁部外面に突帯を付加する。器表面にはカキメを巡らせる。*1139・1140*は甑底部。くの字状に屈曲させ，底端部を面取りして稜をつくり出す。小杉流通業務団地内遺跡群No18Aに類例がある[注30]。8世紀中頃～後半。

甕（*1141～1145*）　*1141*は長胴甕。回転台を用いず内外面ハケメ調整で仕上げる。ハケメは内面横方向，外面縦方向に施す。頸部は大きく開き，口縁端部はナデで丸く収める。胴部外面に煤が付着する。8世紀前半。*1142～1145*は回転台成形の甕。口径18.6～20.8cmのもの（*1143～1145*）と37.0cmを測るもの（*1142*）とがある。口縁端部は外端面を面取りするが丸みを帯びるもの（*1143・1144*）と，端部上端を摘み上げるように整形するもの（*1142・1145*）がある。8世紀後半～9世紀前半。

鍋（*1146～1160*）　口径23.0～48.0cmのものがある。大別して23.0～23.9cm，27.0～37.6cm，38.6～48.0cmの3法量に分けられる。回転ナデ調整されるものが多いが，回転カキメやハケメの残るものもある。器表面に煤や焦げの残るものが多い。各法量に，口縁が強く屈曲し肩の張る器形のもの（*1146・1148～1151・1156～1158*）と口縁部の屈曲と肩の張りが弱い器形（*1147・1152～1155・1159・1160*）とがある。口縁端部の形態は，前者が端部をしっかりと面取りしており，中には上端を摘み上げるように整形しているものもあるのに対し，後者は外端面を面取りするが丸みを帯びる傾向にある。鍋類の時期は8世紀後半～9世紀前半の範囲に収まり，口縁端部を内側に巻き込む*1160*は9世紀後半頃に降ると思われる。

黒色土器（第134・135図*1161～1226*，図版87・92～94・98～100）

器種は椀A・B，コップ形がある。椀Aが多くみられ，中でも厚手で丁寧な調整を施す8世紀末～9世紀初頭のものが一定量を占める。椀Bは9世紀末～11世紀と幅広い年代の物が出土している。

椀A（*1161～1209*）　*1161～1195*は体部外面下半に回転ヘラ削りや手持ちヘラ削りを施すもの。器壁が厚手のものが多い。大きい底部から内湾する体部が延び，口縁部は端部を軽く外反させるものもあるが（*1166・1168・1188*），殆どはそのまま丸く収めている。口径は10.6～13.8cmのものがあり，大別して10.6～12.6cm，13.0～13.8cmの2法量に分けられる。胎土は古手の土師器と同様に暗黄褐色系の色調で骨針の含有が少なく，硬質な感じのものが多い。内面のヘラ磨きは，横方向に回しながら磨くか，あるいは器面を数分割して半弧を描くように磨いている。全て内面のみ黒色処理されているが，口縁部外面にはみ出して黒色化されているものが多くみられ，また外底部に黒斑がみられるもの（*1163・1164・1167・1169・1172・1176・1190・1191・1193*）もある。体部外面下半の削りによる再調整は外底面まで及ぶものがある（*1161・1162・1166～1168・1170*）が，多くは外底面に静止糸切り痕或いは回転糸切り痕を残す。但し回転糸切りとしたものの中には末端が交差していないものが含まれ，静止糸切りの中には緩く回転を加えて切り離しているものもあり，両者の区別が難しいものが多いことは土師器と共通する。糸切りは比較的太い撚りの原体を用いている。外底面にヘラ削りを施すものは，底部と体部の境がなくなり，丸底状になるものがある（*1166・1167・1170*）。*1173・1181*の体部外面には漆と思われる艶のある黒色物質が付着しており，*1173*は約2㎜の厚みをもって盛り上がる。*1184*の外底面には「衆」を大きく墨書する。判読が難しく，「歌」である可能性もある。

*1196～1209*は体部を回転ナデで成形し，ケズリなどの再調整を行わないもの。口縁部のみが残存する個体も多いが，基本的には外底面に回転糸切り痕を残すと思われる。口径は前述した2法量に15.0～16.0cmを測る大型のものが加わる。器壁が薄手のものが多く，胎土は肌色～赤褐色系の色調で砂粒の含有が少なく，焼成の甘い柔らかいものが多い。体部外面の回転ナデは，意識して凹凸をつくり出

注30　富山県埋蔵文化財センター　1993『富山県小杉町・大門町　小杉流通業務団地内遺跡群第10・11次発掘調査概要』

すようにするものがある（*1196・1197・1199～1201・1204*）。内面に施されるヘラ磨きの方法は多様である。*1196*は横方向に磨いた後，一定間隔を置いて暗文風に斜めに磨く。*1203*は先に施す体部の横方向の磨きは太い原体を用い，後に施した体部の斜めの磨きと口縁部の横の磨きは細い原体を用いている。*1208*のヘラ磨きは省略され行われていない。椀Ａの時期は８世紀末～９世紀初頭を中心とし，一部薄手のものが９世紀前半～中頃に降ると思われる。

コップ形（*1210*）　底端部に小さな高台を貼り付けており，高台径5.4㎝を測る。体下部はヘラ削りを施している可能性が高いが，摩耗して器面が荒れており，調整が不明瞭である。黒色土器椀類の古い一群に伴うものと思われ，８世紀末～９世紀初頭の時期が考えられる。

椀Ｂ（*1211～1226*）　全て回転台成形で，底端部か体下端部に高台を持つ。全体の器形が窺える個体は少ないが，*1220・1221*など深椀の形態を取るものもある。*1211～1221*は貼り付け高台をもつもの。高台の断面形は方形のもの（*1211・1212*）と三角形のもの（*1213～1221*）があり，高台内には糸切り痕を残すものが多い。*1221*は口縁部内端に沈線を持ち，端部が丸く膨らむ。畿内の影響を受けたものか。*1222・1223*は押し出し高台と思われる。高台中央に回転糸切り痕を残し，その周囲に粘土の押し出しによる段がみられる。高台は丸みのある小さなものである。底部の器壁は厚いが，内湾する体部には外面下半に回転ヘラ削りを施し，薄く仕上げている。*1224*は非常に小さな底部を緩やかな回転糸切りで切り離し，体下部に高台を貼り付ける。一見して絞り出し高台のように思われるが，高台の付け根には粘土貼り付け痕が残る。*1225・1226*は絞り出し高台。外底面中央に丸い盛り上がりがあり，高台周囲には強いナデがある。椀Ｂの時期は，貼り付け高台をもつものの一部は９世紀末頃に遡るが，大半は10～11世紀代に収まると考えられる。

施釉陶器（第136図*1227～1235*，図版101）

*1227・1228*は緑釉陶器。京都洛北系の軟陶で，９世紀中葉頃のものである。*1227*は椀の口縁部で，端部を強く外方に折り曲げる。端部は摩滅して一部釉が剥落する。*1228*は椀の底部。内面を磨き，体部外面下半から底部にかけてヘラ削りを施し，高台を円盤状に削り出す。*1227・1228*とも全面に緑釉を施し，釉調は浅黄色～にぶい黄色を基調とするが，*1227*の外面は暗色味を帯びる。

*1229～1235*は灰釉陶器。猿投産とみられ，折戸53号窯式（10世紀前半）の中でも古手のものを中心とする。*1229・1230*は皿。*1229*は口縁端部を短く外方に折り曲げる。*1230*は高台端部を欠損する小破片。見込みを無釉とし，内底面に重ね焼きの融着痕を残す。*1231～1233*は椀。口縁部は端部を短く外方に折り曲げるもの（*1231*）と，外反気味に延びて先端が尖るもの（*1232*）がある。*1233*は厚みのある底部から内湾する体部が延びる。体部外面下半に回転ヘラ削りを施し，体部内外面に灰オリーブ色の灰釉を漬け掛けする。見込みと高台部は無釉とするが，体部に施された釉が多くはみ出しており，内底面には輪状の重ね焼き痕が残る。高台は丸みを帯びる三日月高台である。*1234・1235*は壺瓶類。*1234*は胴部下半の小片とみられ，内面横ナデ，外面回転ヘラ削りをする。外面には灰釉を薄くハケ塗りする。*1235*は外面に撫で付けるようなヘラ削りを施し，内面にはロクロ目が残る。貼り付け高台で，高台内側には渦巻き状の指ナデが残る。胎土には，粘土の練りが不十分だったためか焼き膨れやひび割れがみられる。内底面にはガラス質の釉が厚く溜まる。

製塩土器（第136図*1236～1250*，図版100・102）

粘土紐を巻き上げて，指頭による調整を加えるのみで，内外面に粘土の接合痕を明瞭に残す。口縁部（*1236～1242*）は小破片が多い。底部は棒状尖底（*1243～1245*）と平底（*1246～1250*）がある。*1244*の内面には，道具によるハケメ状の撫で付けたような調整痕がみられる。尖底部に続くとみられ

る外底面には平たい剥離面が残る。棒状尖底の製塩土器は７世紀代に盛行することが知られているが，当遺跡では７世紀に遡る資料が出土していないため，８世紀初頭頃の年代を考えたい。平底のものは８世紀以降と考えられる。

中世の土器・陶磁器（第102・136図*455*・*1251*～*1263*，図版102～104）

1255～*1260*は中世土師器。*1255*～*1258*はロクロ成形の皿。田嶋編年中世１－Ⅰ期（11世紀後葉頃），出越編年[注31]Ⅲ－３期（11世紀第２四半期頃）以降増加し，12世紀頃までみられるものである。*1255*は完形品。やや厚めの底部から外傾する体部が延びる。*1256*は内底面に右回りのロクロ目を明瞭に残す。*1257*の口縁端部は面取り風に角張る。*1258*は大きめの底部から内湾する体部が延びる浅い器形である。内底面中央付近の器壁は非常に薄くなっている。*1259*・*1260*は手づくねの皿。*1259*は丸底で，内湾する体部外面に粘土の輪積み痕を残す。13世紀。*1260*は口縁部に一段の横ナデを施す。内底面は端を指押さえしてして平底に仕上げる。越前分類のＮＣⅠ類に該当するが，口径が9.2㎝と若干小さい。13～14世紀。

*1261*は龍泉窯系青磁。大宰府分類の大坏Ⅲ類である。全面に厚く均一な釉を施し，高台畳付きの釉を掻き取る。釉は発色が悪く暗色を呈する。露胎部分と施釉部分の境は赤褐色に発色する。内面に凹状をなす弁を菊花状に入れる。Ｆ期（13世紀中頃～14世紀初頭前後）。

1262・*1263*は瀬戸美濃。*1262*は灰釉を施し口縁部が大きく外反する端反皿である。大窯２期（1530～1560年）。*1263*は口縁部が内湾し灰釉を施す丸皿である。

455・*1251*～*1254*は珠洲。擂鉢（*1251*・*1252*），壺（*1253*），甕（*455*・*1254*）がある。*455*は同一個体と思われる破片が，ＳＥ561・593・717・718，ＳＤ２上層，ＳＫ607・646，地震痕跡，遺物包含層から出土している。口縁を水平に挽き出すもので，吉岡編年のⅣ$_1$期（1280年代～1320年代）にあたる。*1251*は入り組み技法により直線的な卸目を米状に引き，間隙にも入れる。Ⅲ期～Ⅳ期（1250年代～1380年代）に多くみられる技法である。*1252*は擂鉢口縁部。内傾する口縁端面に櫛目波状文を入れる。Ⅴ期（1380年代～1450年代）。*1253*は壺底部。外底面に溶着物がある。*1254*は円頭の口縁部をしっかりと屈曲させる。肩は丸みを帯びて張る。内面は平滑に均されており，当て具痕跡は不明瞭である。Ⅳ期（1280年代～1380年代）。

石製品（第137・138図*1264*～*1291*，図版111～113）

縄文時代から中近世に至る時期のものが出土している。*1264*・*1265*は石鏃。いずれも無茎で，基部に抉入のある凹基式である。*1264*は全面に調整を施しており，抉入を深くし，基部の両端を鋭く仕上げる。*1265*は薄い剥片の周囲にのみ加工を施し，基部の両端は丸みを帯びる。石材は，*1264*はチャート，*1265*はガラス質安山岩である。

1266～*1270*は磨製石斧。*1266*・*1267*は定角式で，縄文時代中期後半以降のものである。*1266*は基部の断片。*1267*は刃部側を敲石として再利用している。*1268*は刃部断片。両側辺を細かい叩打で整形する。先端部が刃こぼれする。*1269*は磨製石斧を打製石斧として転用したもの。両側辺を叩打して山形の稜をつくりだすように再調整する。刃部は大きく刃こぼれし，表面が溶けたように摩滅するなど，打製石斧としての使用痕がある。*1270*は完形品。全体に研磨を施して仕上げているが，刃部を更に細かい目の砥石で研いでおり，境が稜をなす。弥生時代。

1271～*1277*は石錘。扁平な楕円形礫を素材とし，*1271*は長軸両端の両面に三角形状の切目を入れ，*1272*～*1277*は剥離を加える。*1271*～*1275*は長さ4.8～5.3㎝（平均5.2㎝），重さ28.08～73.48ｇ（平均45.15ｇ）を測る。*1276*は長さ7.2㎝，重さ110.52ｇ，*1277*は長さ10.1㎝，重さ393.13ｇを測る。縄文時

注31　出越茂和　1997「北陸古代後半における椀皿食器（後）」『北陸古代土器研究』第７号　北陸古代土器研究会

代中期～後期のものと考えられる。

1278～*1280*は敲石。長軸両端と側縁を中心に，敲打痕や擂りつぶした痕跡が残る。*1281*・*1282*は凹石。*1281*は円礫の両面に２個ずつ窪みがある。擦石を兼ねており，両側面と表裏面が面を持って摩滅する。*1282*は長方形礫の両面に１つずつ円形の窪みがある。側面には敲打痕があり，敲石兼用である。

*1283*は剥片素材の石核。石材はガラス質安山岩。正面上縁辺に剥片を剥ぎ取った剥離面がある。*1284*は石棒か石刀。研磨して先端に向かって細く仕上げる。断面形に僅かに稜がみられることから，石刀である可能性が高い。石材は流紋岩である。

*1285*は紡錘車。断面形は薄い台形で，同心円状に２つの段をつくり出す。広径4.3㎝，狭径1.1㎝，厚さ1.4㎝，孔径0.7㎝，重さ28.47ｇを測る。表面には細かい整形痕が残り，上面と縁には使用による欠損が目立つ。石材は滑石である。古代のものか。

1286～*1291*は砥石。中砥（*1286*）と荒砥（*1287*～*1291*）がある。*1286*は正面と右側面の２面を砥面とする。正面はややねじれを持って大きく湾曲する。左側面は角に面が出来る。裏面には刃物痕がみられる。流紋岩で産地は不明。*1287*・*1289*は４面を砥面とする。*1287*の小口角には，破損する１箇所を除いて３箇所に小さい面があるのが確認できる。砂岩。*1289*は置砥石として使用している。砂岩であるが，荒砥石の中でも硬い石材で，砥石には不向きと思われるものである。*1288*・*1291*は肌理の細かい砂岩である。*1288*は正面を砥石として僅かに使用している。*1291*は４面に砥面が見られるが，使用頻度は少ない。正面と左側面との角に面が出来ている。砂岩で産地は不明である。*1290*は大村砥に近い質感を持つ砂岩である。正面と右側面の２面を砥面とする。僅かに残存する左側面についても砥面として使用されていた可能性がある。

木製品（第139図*1292*～*1302*，図版109・110）

1292～*1294*は漆器椀。樹種はケヤキである。*1292*・*1293*については，漆分析を実施している[注32]。総黒色系の椀で高台を露胎とする。*1294*は逆三角形状の小さな高台がある。*1295*は瓢箪を利用した柄杓。欠損部が多いが，柄を通すための直径８㎜の円孔があけられていることが判る。*1296*～*1299*は曲物の底板。樹種はスギである。側面に打ち込まれた木釘が残る。*1296*は表面が炭化する。*1297*は側板を伴って出土しているが接合できなかったため，別図で示した。側板の両面と底板の内面側に漆を塗る。*1300*は斎串。スギの細長い薄板の上端を山形に削り，両側に三角形の切り込みを入れる。下端は両側を削って尖り気味に加工する。*1301*は栓。棒状の材の一端に段をつけて削る。材はマツ属の芯持丸木である。*1302*は円形板。一辺に小孔を４個あけており，曲物底板と考えられる。樹種はスギである。

金属製品（第139・140・146図*1303*～*1307*・1429，図版114・115）

*1303*は和同開珎。錆の付着も少なく，残存状態は良好である。新和同と呼ばれる銅銭で，開字が隷書，文字が大きく，細縁という特徴を有する。蛍光Ｘ線分析を実施している[注33]。*1304*は鏃。断面円形で，コの字状を呈する。*1305*・*1306*は鉄滓。*1306*は一部が青く，銅を含む可能性がある。*1307*は鉄鍋。金属分析を実施している[注34]。口径51.0㎝，器高26.0㎝を測る大型の製品である。口縁部には内端に断面三角形の返しが付き，蓋受けの屈曲がみられる。底部には中心から僅かにずれた対置に湯口があり，三足がつく。外面の体部から底部にかけて薄く炭化物が付着する。14～15世紀。*1429*は鎌。茎の先端を折り曲げる。曲げた先端部を柄の溝にはめ込んで固定したものと考えられる。

666号溝（ＳＤ666，第36図）

Ａ地区中央南寄りに位置する。ＳＫ608から南のＳＤ１方向へ延びる。ＳＥ717，ＳＢ７，ＳＫ607・608から構成される水屋施設の一部で，井戸周囲に溜った水を河道へ排水するためのものと考えられ

注32　第二分冊　自然科学分析　漆器文化財科学研究所　「漆器・漆製品の科学分析」
注33　第二分冊　自然科学分析　財団法人元興寺文化財研究所　「和同開珎の蛍光Ｘ線分析」
注34　第二分冊　自然科学分析　財団法人元興寺文化財研究所・九州テクノリサーチ・TACセンター　「鉄鍋の金属学的調査」

る。幅25～40㎝，深さ25㎝を測る。埋土上層は褐灰色粘土，下層は灰黄褐色粘土である。遺物は出土していない。

F　地震痕跡（第７・47・48・101～103・141図，図版67・74・83・86・87・96・99・101・103・104・108・112・113・115）

地震痕跡は，Ａ地区において，地割れと噴砂を確認している。地割れはＡ地区中央部のⅢａ・Ⅲｂ・Ⅲｃ・Ⅳ層で検出した。地割れは一度開口した後に再び閉じる場合があるといわれている。今回検出した地割れも，上層で検出した際は途切れていたが，下層に掘り下げると繋がるものが多くみられた。遺構の平面及び断面を観察した限りにおいては，地震の影響を受けてズレを生じたり，地割れや噴砂に切られているものがなかったため，当初は遺構形成段階以前に生じた地震によるものと考えていたが，地割れの埋土から近世の遺物も出土していることから，近世に生じた地震によるものであると考えざるを得ない。地割れの断面はＶ字状若しくはＵ字状を呈し，幅８㎝～2.08m，深さ４㎝～1.00mを測る。埋土は基本層のⅢ・Ⅳ層がブロック状に混入した粘土層を基調とする。地面が裂けた際，割れ口の土が崩落してある程度埋まり，その後徐々に自然堆積したと思われるものが多い。また，地割れを検出した範囲は上層遺構が密集する範囲と重複するため，遺物の混入も多くみられる。

噴砂はＡ地区中央北東寄りのⅢｂ層で検出した（第48図ｇ－ｇ′断面図）。Ⅳ層下層の砂混じりのシルトが液状化して噴き上がり，Ⅳ層上層・Ⅲｂ層の粘土を分断している。検出した噴砂の幅は２～３㎝の細いものである。

出土遺物は須恵器（*1308*～*1314*），黒色土器（*1315*），灰釉陶器（*1316*～*1321*），中国製白磁（*1322*），中国製青磁（*1323*），珠洲（*1324*・*1325*），木製品（*1326*），石製品（*1327*・*1328*），鉄滓（*1329*・*1330*）が出土している。

*1308*は須恵器杯Ｂ蓋。ボタン状の摘みを持ち，端部は丸く巻き込む。９世紀前半。*1309*～*1312*は杯Ｂ。*1309*は体部が直線的に立ち上がる浅いもの。８世紀中頃。*1310*は口縁部が外反する。*1312*は高台内に回転糸切り痕を残す。10世紀。*1313*は杯Ａ。体部が内湾気味に立ち上がる薄いつくりのもの。*1314*は壺か瓶類の底部。高台径6.6㎝を測る小型のものである。*1315*は黒色土器椀Ｂ。全体に摩耗して調整は不明瞭だが，丸みを帯びる貼り付け高台をもつ。９世紀末～10世紀代。*1316*・*1317*は灰釉陶器椀口縁部。器壁が薄く均一なつくりである。口縁端部は，*1316*は強く外反させて丸く収めるのに対し，*1317*は軽く外反させて先端を尖り気味にする。*1318*～*1320*は灰釉陶器Ⅲ。*1318*は口縁端部を強く外方に折り曲げ，体部外面下半を回転ヘラ削りする。釉は見込みを残して体部内外面に漬け掛けし，淡緑色に発色する。胎土は灰色の堅緻なもので，白色粒を多く含み微黒斑が僅かにみられる。内底面に重ね焼きの痕跡が輪状に薄く残り，見込みは摩耗して滑らかになっている。*1320*は下端部に高台貼り付けの痕跡が残る。*1321*は壺瓶類の胴部片。傾きや屈曲から肩部にあたると思われる。外面を回転ヘラ削りして淡緑色の灰釉を掛ける。灰釉陶器は猿投窯折戸53号窯式（10世紀前半）を中心とする時期のものと考えられる。

*1322*は中国製白磁椀。口縁部が肉厚の玉縁をなすもので，大宰府分類の椀Ⅳ類。11世紀後半～12世紀前半。*1323*は中国製青磁椀Ⅱ－ｂ類。外面に鎬蓮弁文を持つ。13世紀初頭前後～前半。*1324*は珠洲擂鉢。口縁端部は水平で，外端がやや拡張する。内面には９目１単位の中太の櫛歯原体を用い，直線的な卸目を引く。吉岡編年のⅣ$_2$～Ⅳ$_3$期（1320年代～1380年代）。*1325*は珠洲甕。口縁部は短く屈曲させて丸く収める。外面に細密な叩きを施す。Ⅳ期（1280年代～1380年代）。

*1326*は枘孔のある部材。厚みのあるスギの分割材を用いている。*1327*は磨製石斧。小型の完形品で，

刃部に筋状の使用痕がみられる。石材は透閃石岩。縄文時代中期以降のものである。*1328*は中砥石。非常に硬質な名倉砥である。４面を砥面とし，破損部にも筋状の刃物痕が残る。正面はややねじれを持って湾曲する。灰白色を呈する，いわゆる白名倉と呼ばれるものである。近世に属する。

この他，古代から中世の井戸や土坑等から出土した破片と接合する遺物（*443*・*455*・*479*・*480*・*490*）がある。

Ｇ　包含層出土遺物（第142～146図*1332*～*1428*・*1430*～*1442*，図版67・71・72・74～81・83～87・91・96・98・101・103～105・110・114・115）

須恵器（*1333*～*1389*）　*1333*は瓦塔の屋蓋部。表面を半截竹管状工具で押し引いて丸瓦を表現する。丸瓦は中央に継ぎ目があり，個々の丸瓦は高さ５㎜，幅６㎜を測る。裏面の垂木は縦長三角形状の削り込みにより表現する。同様の技法による資料としては石川県七尾市池崎窯出土瓦塔[注35]がある。９世紀第３～第４四半期。

*1334*は円面硯の脚部。内面にはカキメ状の沈線が数条巡る。端部はやや外方に摘み出し，内端に稜をつくる。

1335～*1340*は墨書・刻書・漆書のあるもの。*1335*・*1336*は杯Ａ。外底面に墨書があるが，いずれも判読不可能である。*1337*・*1340*は杯Ｂ。*1337*は高台内にヘラ書き文字□［本ヵ］」がある。ある程度乾燥が進んだ段階で書き入れており，文字の深さは浅い。内面見込みが使用による摩耗で滑らかである。*1340*は口径15.6㎝を測る大型のものである。高台内に墨書があるが，判読不可能である。深身の器形で，外部外面中程に沈線状の浅い窪みを入れる。*1338*・*1339*は杯Ｂ蓋。*1338*は内面に「卌」の漆書きをする。外面には回転ヘラ削り調整が施されている。*1339*は頂部に丁寧な回転ヘラ削りを施す。外面に「□□□［公ヵ］豫□」もしくは「□□□［土ヵ］豫□」の墨書をする。

1348～*1352*は転用硯。内面に墨が付着し，硯面としての使用により，いずれも内面が非常に滑らかとなっている。*1348*は端部を短く折り曲げるもの。外面は降灰により調整不明である。*1349*～*1352*は頂部に回転ヘラ削りを施す。*1349*～*1351*の端部は短く折り曲げているが鋭さを欠く。

1341～*1347*は杯Ａ。*1341*・*1342*は浅いもの。*1341*の器表面には爆ぜたような穴が目立つ。*1343*～*1345*はやや厚い底部から体部が延びるもの。口径12.0～13.0㎝を測る。*1344*の内全面と外面の一部に油煙痕がみられる。*1346*は底部と体部の境が角張り厚くなる。*1347*は体部が開き気味に延びる。器壁は全体に薄い。

1353～*1365*は杯Ｂ蓋。口径11.8～17.4㎝のものがある。大別して11.8～12.4㎝，12.8～14.8㎝，15.2～17.4㎝の３法量に分けられる。*1353*～*1358*は大型のもの。頂部を回転ヘラ削りするもの（*1353*・*1355*～*1357*）が多い。端部は短く折り曲げ，断面三角形状をなすもの（*1353*～*1355*）と内端に稜を持ち丸みを帯びるもの（*1356*～*1358*）がある。*1359*～*1361*は中型のもの。*1359*と*1360*はよく似ており，同一窯の製品か。*1362*～*1365*は小型のもの。扁平なものと高さのあるものとがある。端部はいずれも丸みを帯びる。８世紀中頃～９世紀中頃のものである。

1366～*1371*は杯Ｂ。*1366*・*1367*は大型で深身の器形。*1366*は口縁部が外反し，口径17.6㎝を測る。*1367*～*1370*は体部が直線的に延びる。口径は*1367*が15.6㎝，*1368*が14.0㎝と大型である。*1368*の外底面は回転ナデにより平滑に整えられ，内底面には使用による摩滅がみられる。*1369*は口縁端部が薄く引き延ばされる。完形品。*1370*の器壁は均一である。いずれも８世紀中頃～９世紀中頃のものである。*1371*は体部外面に別個体が融着した破片。口径12㎝前後を測るものと思われる。

*1372*はコップ形か。内面は回転ナデにより平滑に整形される。体部外面下半は回転ヘラ削りし，体

注35　七尾市教育委員会　1985『池崎窯跡』
　　高崎光司　1989「瓦塔小考」『考古学雑誌』第74巻第３号　日本考古学会

部と底部の境に断面方形の高台を貼り付ける。高台径5.8㎝を測る。*1373*は細く長い高台が貼り付けられるもの。底部の器壁は薄くなる。皿か。*1374*は把手。指頭で成形される。外端に向けて広がり断面コの字状になる。*1375*は口径2.9㎝を測る小型品で，瓶の口縁部であろうか。器壁は薄く，口縁部が僅かに厚くなる。軽く外反させた口縁部には降灰がみられる。内外面にナデがみられるが，回転台を使用していない可能性が高い。

1376・*1377*は壺蓋。*1376*は頂部に丁寧な回転ヘラ削りを施し，沈線を４条巡らせる。中央には摘みが剥離した跡がみられる。*1377*も頂部から肩にかけて回転ヘラ削りしているが，肩部は丸みを帯び鋭さを欠く。無鈕で，頂部中央には指頭で均した跡がみられる。

1378～*1385*は壺瓶類。*1378*・*1385*は広口瓶。*1378*は胴部外面にカキメを引く。内面は焼成時のひび割れが目立つ。*1379*・*1380*は壺か瓶の底部。*1381*・*1382*は長頸瓶。*1381*の頸部中程に沈線を１条巡らせる。*1383*・*1384*は双耳瓶の耳。*1384*は２孔で，凸帯を持つ。

1386～*1389*は甕。*1386*～*1388*は甕口縁部。外面に平行文の叩き，内面に同心円文の当て具痕を残す。*1388*の外面には叩きの後カキメを施す。*1389*は頸部が大きく開き，肩の張る器形。外面の叩きを一部撫で消す。主な破片は包含層から出土しているが，ＳＤ２上層から出土した破片とも接合する。

土師器（*1332*・*1390*～*1394*）　遺物包含層が粘性の強い土質であるため，器表面が粘土の付着により剥離し，調整が不明瞭となっているものが多い。高杯（*1332*），椀（*1390*），皿Ａ（*1391*），把手（*1392*），鍋（*1393*・*1394*）がある。*1332*は高杯。薄いつくりで，口縁部と脚接地部に屈曲がみられる。８世紀中頃～９世紀前半。*1390*は椀口縁部片。器表面が表裏とも剥離して非常に薄くなっている。*1391*は外底面に回転糸切り痕を残すもので，９世紀末～10世紀前半。*1392*は器壁の厚いしっかりとしたもので，把手末端に向けて細く形作られる。*1393*は器表面の剥離が著しいが，口縁端部を面取りしていることが判る。８世紀後半～９世紀前半。*1394*は口縁端部を巻き込むもので，９世紀後半～10世紀前半と考えられる。

灰釉陶器（*1395*～*1404*）　全て猿投産とみられ，折戸53号窯式（10世紀前半）の中でも古手のものを中心とする。皿（*1395*），椀（*1396*～*1398*），壺瓶類（*1402*～*1404*）がある。

*1395*は口縁端部を強く外方に折り曲げ，体部外面下半を回転ヘラ削りする。淡緑色の灰釉が残存範囲全体に掛かる。*1396*・*1397*は口縁部を強く外反させ，灰釉を漬け掛けする。*1396*は釉が厚く掛かり，一部白濁する。*1397*は内全面に施釉され，見込みに輪状の重ね焼き痕が残る。体部外面下半は回転ヘラ削りを施し，外面に稜のある三日月高台を貼り付ける。*1398*は厚みのある底部から内湾する体部が延びる。外面下端に高台の剥離痕が残る。*1399*～*1401*は椀か皿の底部片。一様に内底面に輪状の重ね焼き痕を残しており，見込みが摩耗して滑らかである。*1400*・*1401*は高台の外面にまで釉が及ぶ。丸みを帯びた三日月高台である。*1402*・*1403*は壺か瓶の胴部片。傾きと屈曲から，胴部中程から下半にあたると思われる。*1402*は外面に釉が厚く掛かる。*1403*は外面を回転ヘラ削りし，灰白色の灰釉が薄く掛かる。*1404*は小瓶の底部片。外底面に回転糸切り痕を残し，胴部下端の，底部との境に２～３条回転ヘラ削りを施す。内面にはロクロ目が強く残る。釉は外面の胴部下半に施す。内底面にもガラス質の釉溜まりがみられる。

中近世の土器・陶磁器（*1405*～*1420*）　*1405*は中世土師器皿。口縁部を一段ナデして端部を外反気味にする。13世紀後半～14世紀。*1406*は中国製白磁。大宰府分類の椀Ⅳ－１ａ類。削り出し高台で幅広の高台を持つ。高台内側の削りは浅いが，内底面が内湾するため底部の器壁はさほど厚くならない。内底面に沈線を１条巡らせる。Ｃ期（11世紀後半～12世紀前半）。*1407*は古瀬戸の天目茶椀。口縁部

は厚みを持ち緩やかに立ち上がる。後期様式のⅢ期（1420～1440年）。*1408*は瀬戸美濃の丸皿。口縁部を僅かに外反気味に立ち上げて，灰釉を全面に施す。*1409*～*1418*は珠洲。*1409*～*1412*は擂鉢。*1409*は口縁端部が外傾し，卸目は細密で鋭利である。吉岡編年のⅢ期（1250年代～1280年代）。*1410*は口縁端部が水平で卸目は太く幅が広い。Ⅳ$_2$～Ⅳ$_3$期（1320年代～1380年代）。*1411*は体部が直線的に開く。口縁内端の面取りは明瞭ではなく，櫛目波状文も粗大なものである。Ⅵ期（1450年代～1480年代）。*1412*の内底面には米状に浅く引かれた卸目の一部がみられる。Ⅲ～Ⅳ期（1250年代～1380年代）。*1413*は壺底部。器壁が薄く，内底面にロクロ目が明瞭に残る。*1414*～*1417*は甕口縁部。口縁を短く折り返す円頭で，肩の張る器形である。Ⅲ期。*1418*は甕底部。砂底で外面に指頭圧痕を残す。

1419・*1420*は越中瀬戸の内禿皿。宮田編年[注36]のⅠ期（16世紀末～17世紀初め）にあたる。*1419*は体部に灰釉を施す。内底面を凸状に削り，見込みに12弁菊の印花紋を押す。印花紋の周囲には輪状の重ね焼き痕が残る。*1420*は灰釉と鉄釉をかけ分ける皿。内底面には釉止めの段があり，その内側に重ね焼き痕を薄く残す。

土製品（*1421*～*1427*）　*1421*・*1422*は鞴の羽口。先端部の断片で，外面にガラス状の結晶が付着する。*1423*～*1427*は管状土錘。いずれも樽形である。*1423*～*1426*は長さ4.0～5.0㎝，幅3.1～3.9㎝を測る。重さは，完形の*1423*が33.2ｇ，*1424*が49.9ｇである。*1427*は若干大型で，長さ6.2㎝，幅4.2㎝，117.0ｇを測る。孔径は*1426*のみ1.6㎝と大きく，他は1.2～1.4㎝である。

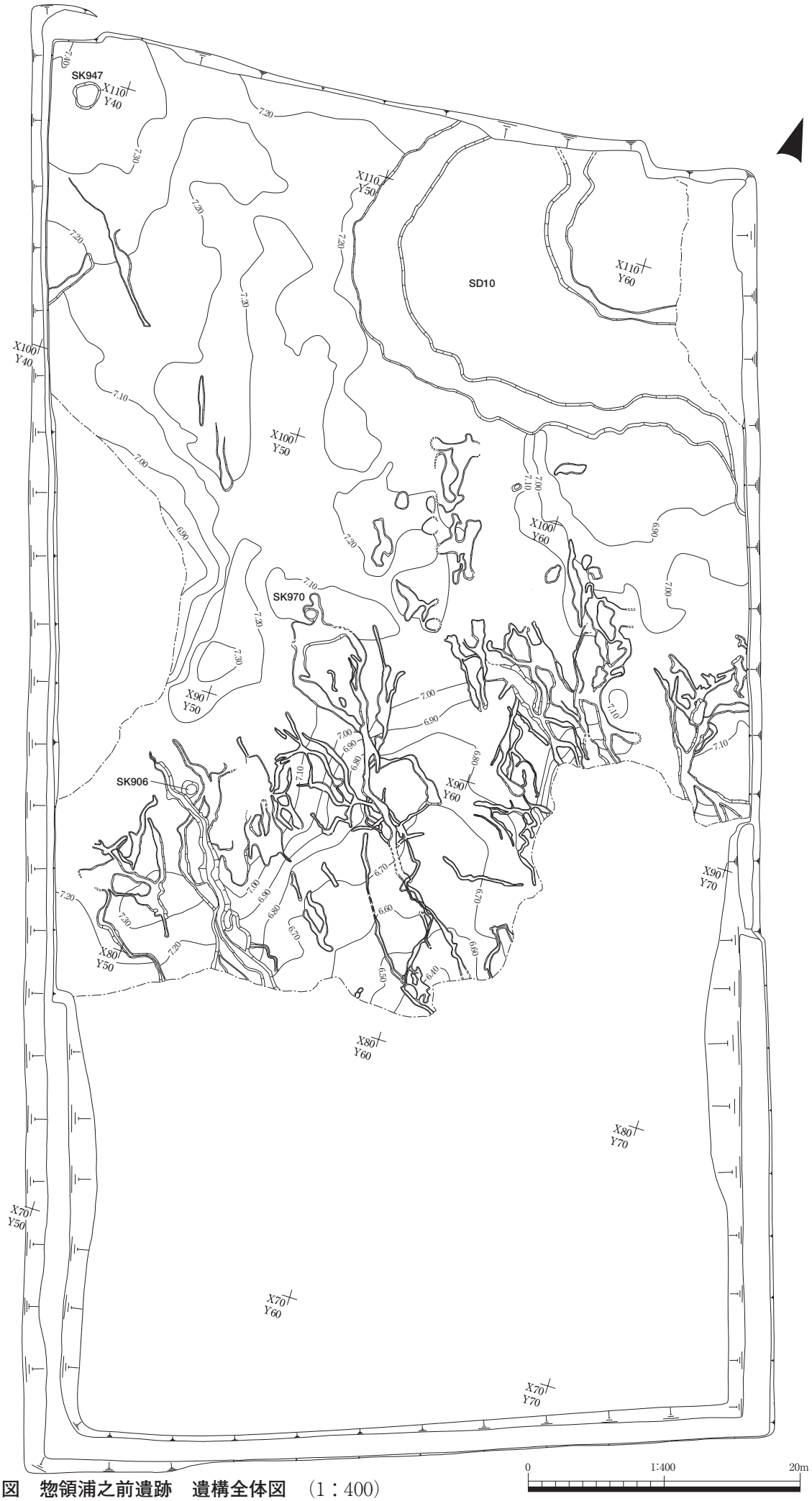
木製品（*1428*）　*1428*は栓。上面を丸く削って甲高に仕上げる。下端は段をつけて削り，短い円柱状とする。

金属製品（*1430*～*1442*）　*1430*は輪状の鉄製品。金属が痩せて細くなっている部分はあるが，継ぎ目はみられない。*1431*は煙管の吸口。意図をもって折り曲げているようである。肩のつかない，18世紀以降多くみられるものである。*1432*は簪。先端に耳掻きのついた２本脚のものである。*1433*～*1436*は鉄滓。*1436*は椀形滓。長さ10.4㎝を測る大型のものである。*1437*～*1442*は銅銭。*1437*は咸平元寶。北宋銭で998年初鋳。*1438*は錆により判読し難いが，祥符元寶（1008年初鋳）か。*1439*は永楽通寶。明の渡来銭で1408年初鋳。*1440*～*1442*は寛永通寶。*1440*・*1441*は寛永13（1634）年～明暦２（1656）年鋳造の古寛永。*1442*は寛文８（1668）年以降鋳造された新寛永である。

注36　宮田進一　2007「越中瀬戸窯」『中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～』補遺編　全国シンポジウム「中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～」実行委員会

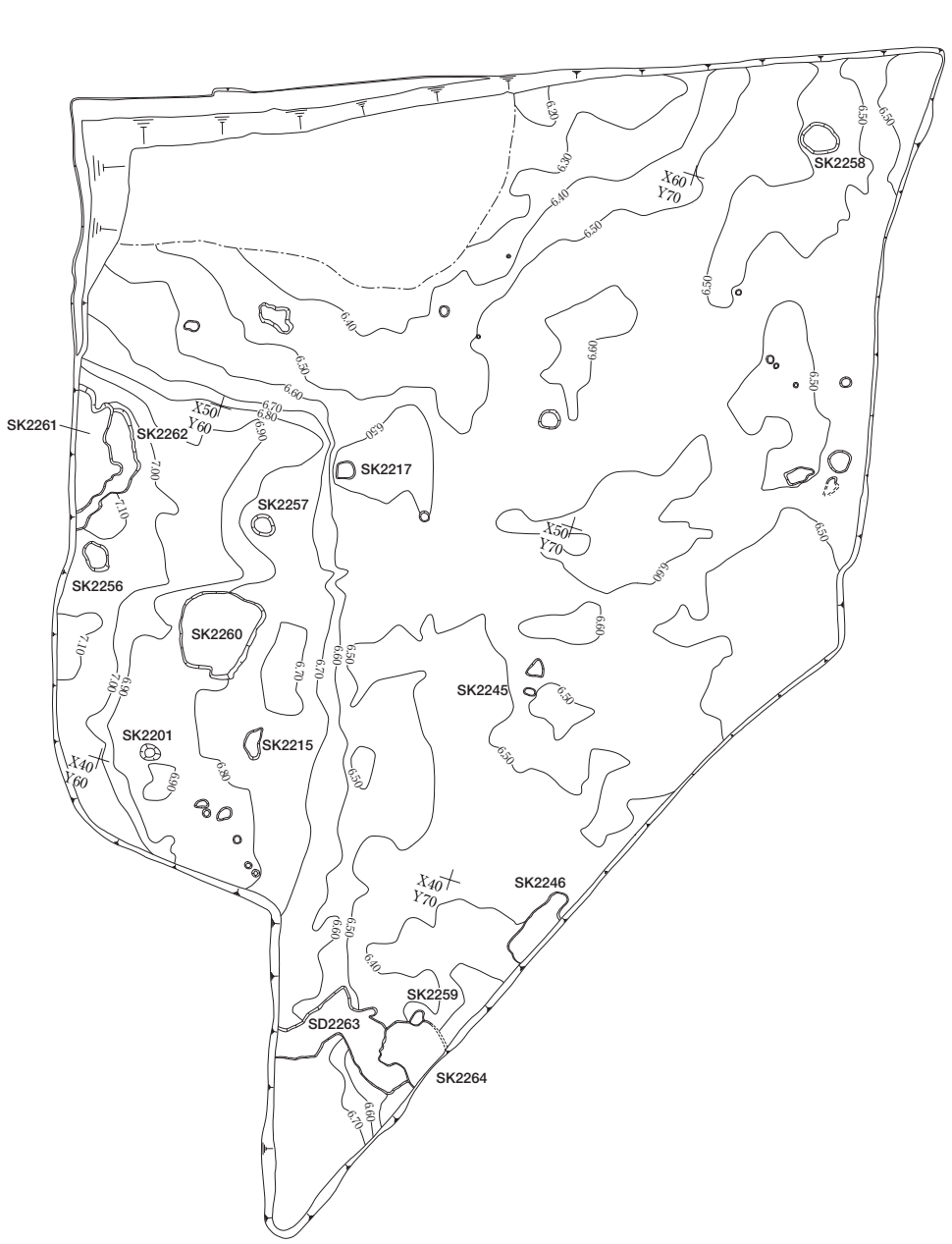
参考文献

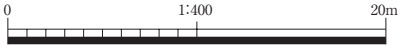
石川県立埋蔵文化財センター　1986『漆町遺跡』
井上尚明　1994「コップ形須恵器の考察－奈良時代の計量器について－」『考古学雑誌』第79巻第４号　日本考古学会
大沢野町教育委員会　1977『富山県大沢野町布尻遺跡緊急発掘調査概要』
金沢市・金沢市教育委員会　1989『金沢市西念・南新保遺跡Ⅳ』
岸本雅敏　1983「富山県における土器製塩の成立と展開」『北陸の考古学』石川考古学研究会
齋藤孝正　1981「猿投窯・尾北窯・美濃窯における灰釉陶器の変遷」『北丘古窯跡群・古墳群発掘調査報告書』岐阜県多治見市教育委員会
善端直　1994「北陸の古代瓦塔」『文化財学論集』文化財学論集刊行会
高橋照彦　1995「平安期緑釉陶器生産の展開と終焉」『国立歴史民俗博物館研究報告』第60集
瀧澤武雄・西脇康編　1999『日本史小百科　貨幣』
楢崎彰一　1982「日本古代の陶硯－とくに分類について－」『考古学論考　小林行雄博士古稀記念論文集』小林行雄博士古稀記念論文集刊行委員会
氷見市史編さん委員会　2002『氷見市史』７　資料編五　考古
平川南他　2000『古代日本の文字世界』大修館書店
平川南他　2005『古代日本文字の来た道』大修館書店
百瀬正恒　1986「平安時代の緑釉陶器－平安京近郊の生産窯について－」『中近世土器の基礎研究Ⅱ』日本中世土器研究会
山田昌久　2003『考古資料大観』第８巻　弥生・古墳時代　木・繊維製品
山本正敏　1990「Ⅲ調査の成果　1．縄文土器の編年的位置」『富山県福野町安居五百歩遺跡Ⅰ』福野町教育委員会
米澤義光　2008「気屋式土器」『総覧縄文土器』『総覧縄文土器』刊行委員会



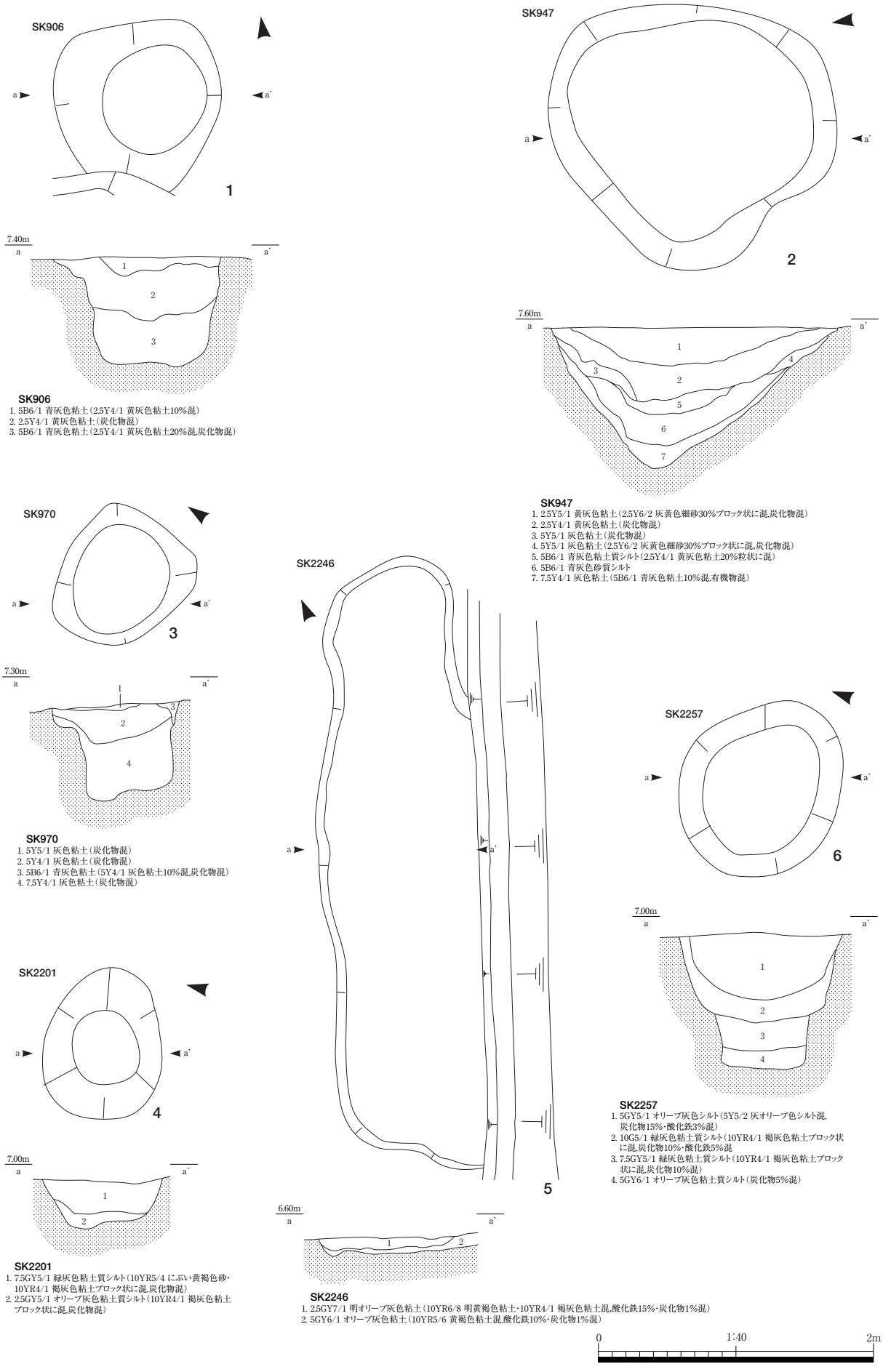
第 7 図　惣領浦之前遺跡　遺構全体図　（1：400）

A 地区　縄文時代　地震痕跡



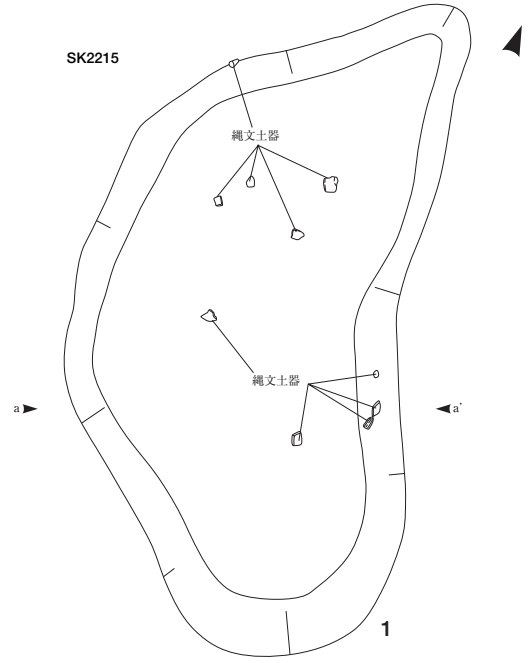


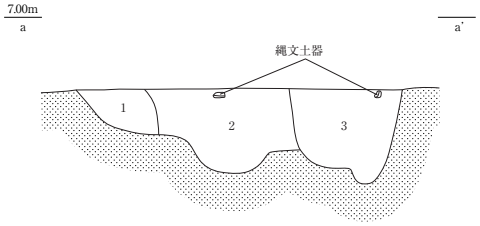
第 8 図　惣領浦之前遺跡　遺構全体図　（1：400）
B 地区　縄文時代



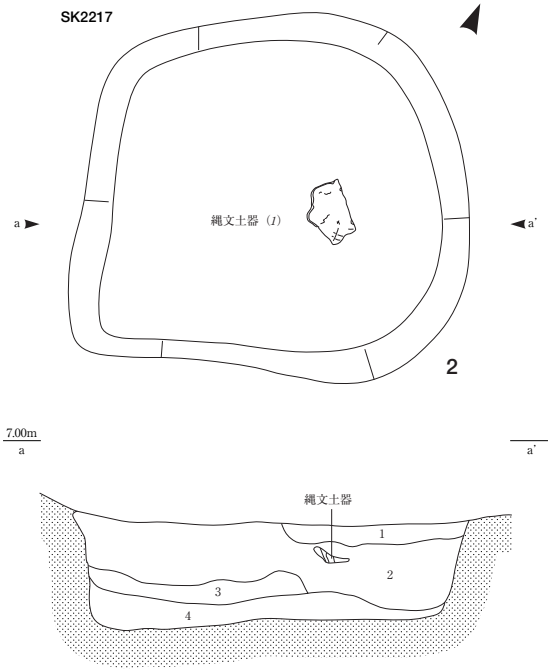
第 9 図　惣領浦之前遺跡　縄文時代遺構実測図

1．SK906　2．SK947　3．SK970　4．SK2201　5．SK2246　6．SK2257

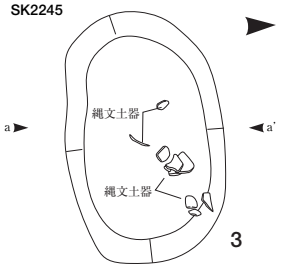


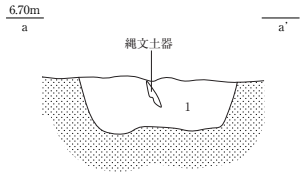


SK2215
1. 5Y6/2 灰オリーブ色シルト（10YR5/6 黄褐色粘土質シルトブロック状に混,炭化物混）
2. 5Y5/2 灰オリーブ色シルト（10YR5/6 黄褐色粘土質シルト混,炭化物5%混）
3. 7.5GY6/1 緑灰色粘土質シルト（10YR4/1 褐灰色粘土ブロック状に混,炭化物混）

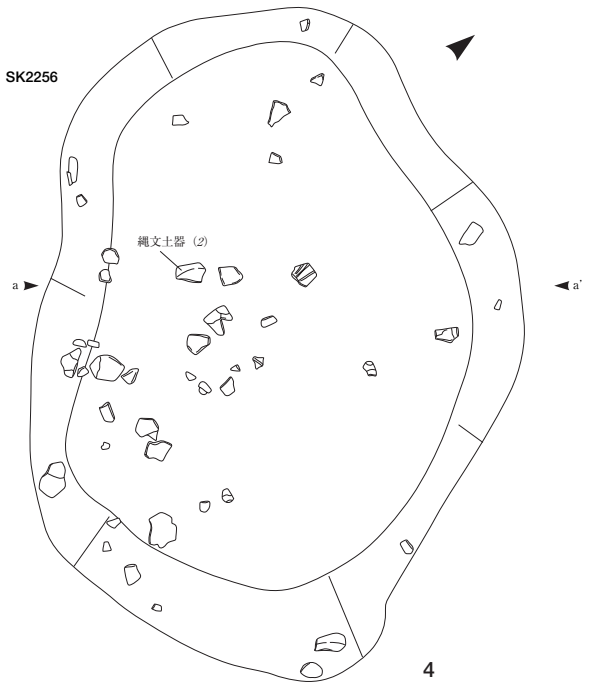


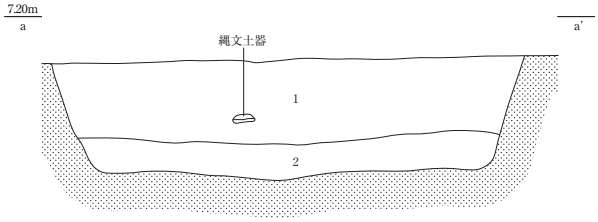
SK2217
1. 7.5GY5/1 緑灰色シルト（炭化物1%混）
2. 10GY4/1 暗緑灰色粘土（炭化物30%混）
3. 10GY4/1 暗緑灰色粘土（10YR4/1 褐灰色粘土混,炭化物1%混）
4. 7.5GY4/1 暗緑灰色粘土



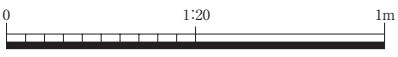


SK2245
1. 2.5GY6/1 オリーブ灰色粘土質シルト（2.5Y6/4 にぶい黄色粘土質シルト混,
酸化鉄15%・炭化物5%混）



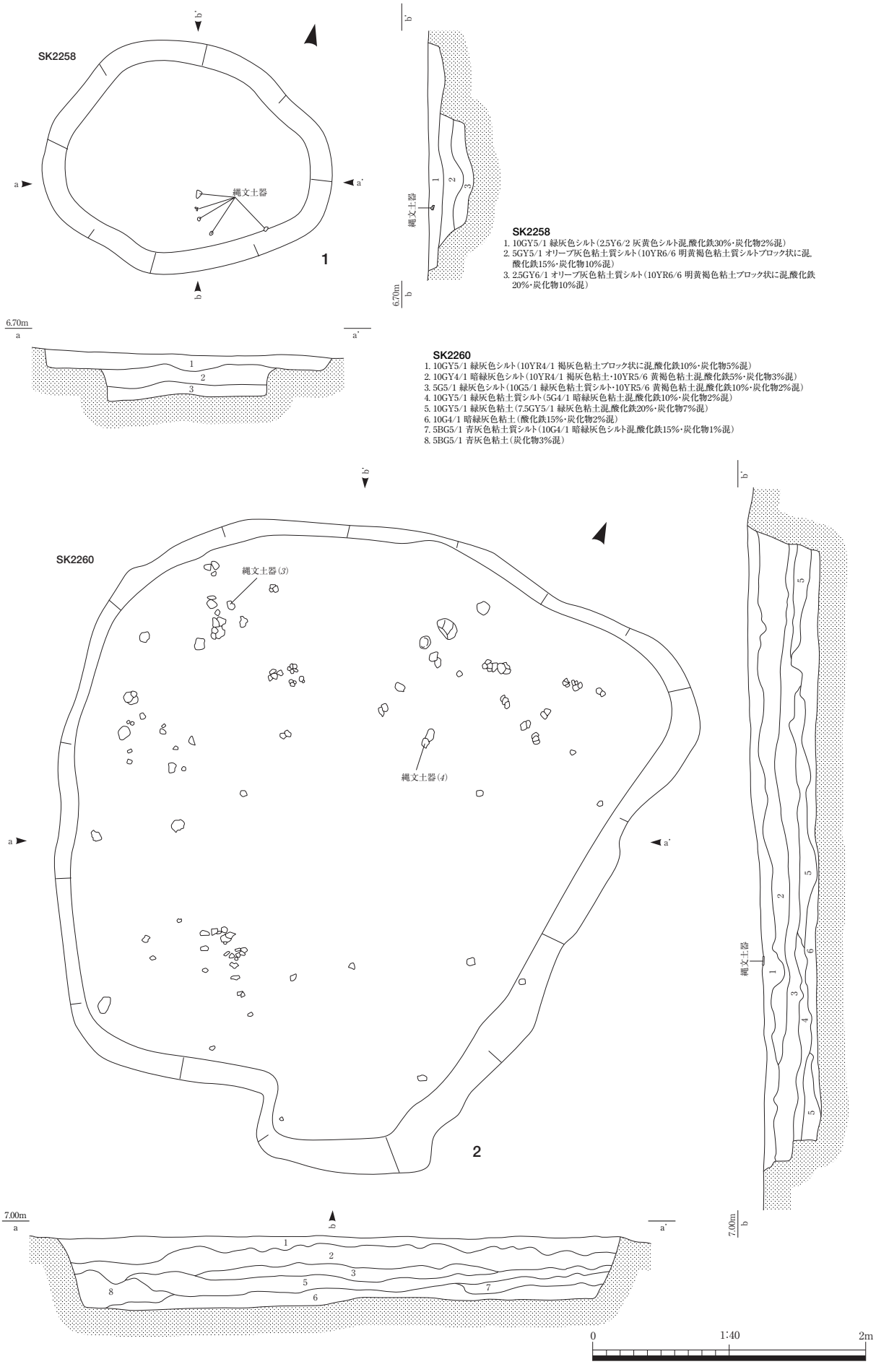


SK2256
1. 7.5GY5/1 緑灰色シルト（10YR4/1褐灰色粘土ブロック状に混,炭化物5%・酸化鉄2%混）
2. 5GY4/1 暗オリーブ灰色粘土質シルト（10YR4/1 褐灰色粘土ブロック状に混,炭化物5%混）



第10図　惣領浦之前遺跡　縄文時代遺構実測図

1．SK2215　2．SK2217　3．SK2245　4．SK2256



第11図　惣領浦之前遺跡　縄文時代遺構実測図

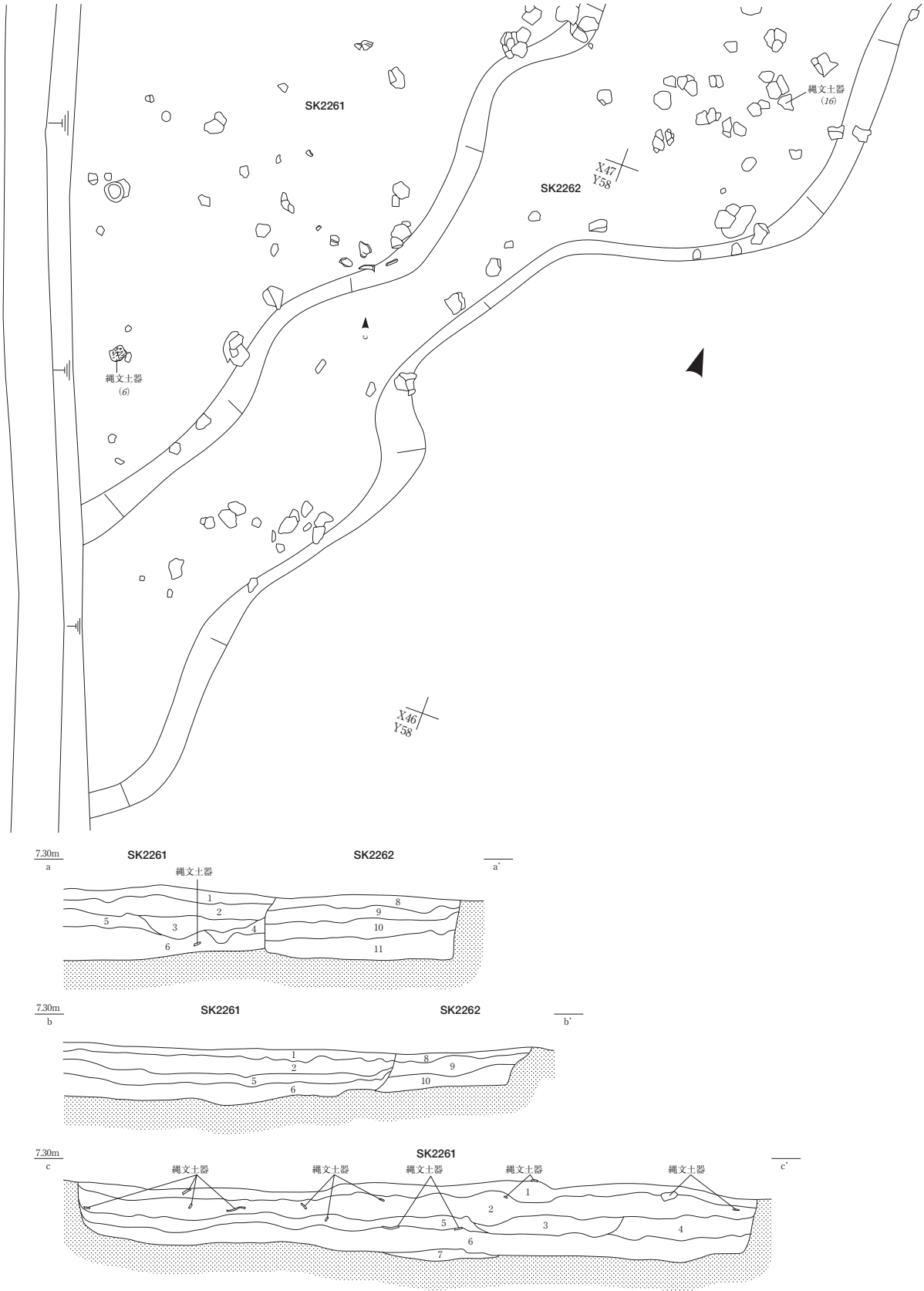
1．SK2258　2．SK2260

SK2259
1. 2.5GY6/1 オリーブ灰色シルト（10YR4/1 褐灰色粘土ブロック状に混,酸化鉄20%・炭化物5%混）
2. 5G6/1 緑灰色粘土（10YR6/6 明黄褐色粘土ブロック状に混,酸化鉄15%・炭化物3%混）
3. 10G6/1 緑灰色粘土（10YR6/6 明黄褐色粘土ブロック状に混,酸化鉄20%・炭化物5%混）

SK2264
1. 10GY4/1 暗緑灰色シルト（5Y3/1 オリーブ黒色シルト混,炭化物2%・酸化鉄2%混）
2. 2.5GY5/1 オリーブ灰色シルト（5Y3/1 オリーブ黒色シルト混,酸化鉄15%・炭化物7%混）
3. 2.5Y2/1 黒色シルト（2.5GY5/1 オリーブ灰色シルト混,炭化物30%・酸化鉄10%混）
4. 2.5GY6/1 オリーブ灰色粘土（5GY6/1 オリーブ灰色粘土質シルト混,酸化鉄20%・炭化物2%混）
5. 7.5GY6/1 緑灰色粘土（炭化物10%混）
6. 10GY5/1 緑灰色粘土質シルト（7.5GY5/1 緑灰色粘土質シルト混,酸化鉄15%・炭化物10%混）
7. 7.5Y6/1 灰色シルト（5GY6/1 オリーブ灰色シルト混,酸化鉄10%・炭化物3%混）
8. 10YR6/8 明黄褐色粘土（5G6/1 緑灰色粘土混,酸化鉄50%・炭化物5%混）

第12図　惣領浦之前遺跡　縄文時代遺構実測図
1．SK2259　2・3．SK2264

第13図　惣領浦之前遺跡　縄文時代遺構実測図
SK2261・SK2262



SK2261

1. 5GY5/1 オリーブ灰色シルト（10YR4/1 褐灰色粘土ブロック状に混,炭化物20%・酸化鉄7%混）
2. 10GY5/1 緑灰色シルト（10YR4/1 褐灰色粘土ブロック状に混,炭化物15%・酸化鉄5%混）
3. 2.5GY4/1 暗オリーブ灰色粘土質シルト（7.5Y5/2 灰オリーブ色粘土質シルト混,炭化物15%・酸化鉄2%混）
4. 2.5GY4/1 暗オリーブ灰色粘土質シルト（10YR4/1 褐灰色粘土ブロック状に混,炭化物3%・酸化鉄2%混）
5. 10GY5/1 緑灰色粘土質シルト（10YR4/1 褐灰色粘土ブロック状に混,炭化物5%・酸化鉄3%混）
6. 10G4/1 暗緑灰色粘土質シルト（10YR4/1 褐灰色粘土ブロック状に混,酸化鉄5%・炭化物2%混）
7. 7.5GY4/1 暗緑灰色粘土質シルト（10GY5/1 緑灰色粘土質シルト混,酸化鉄7%・炭化物2%混）

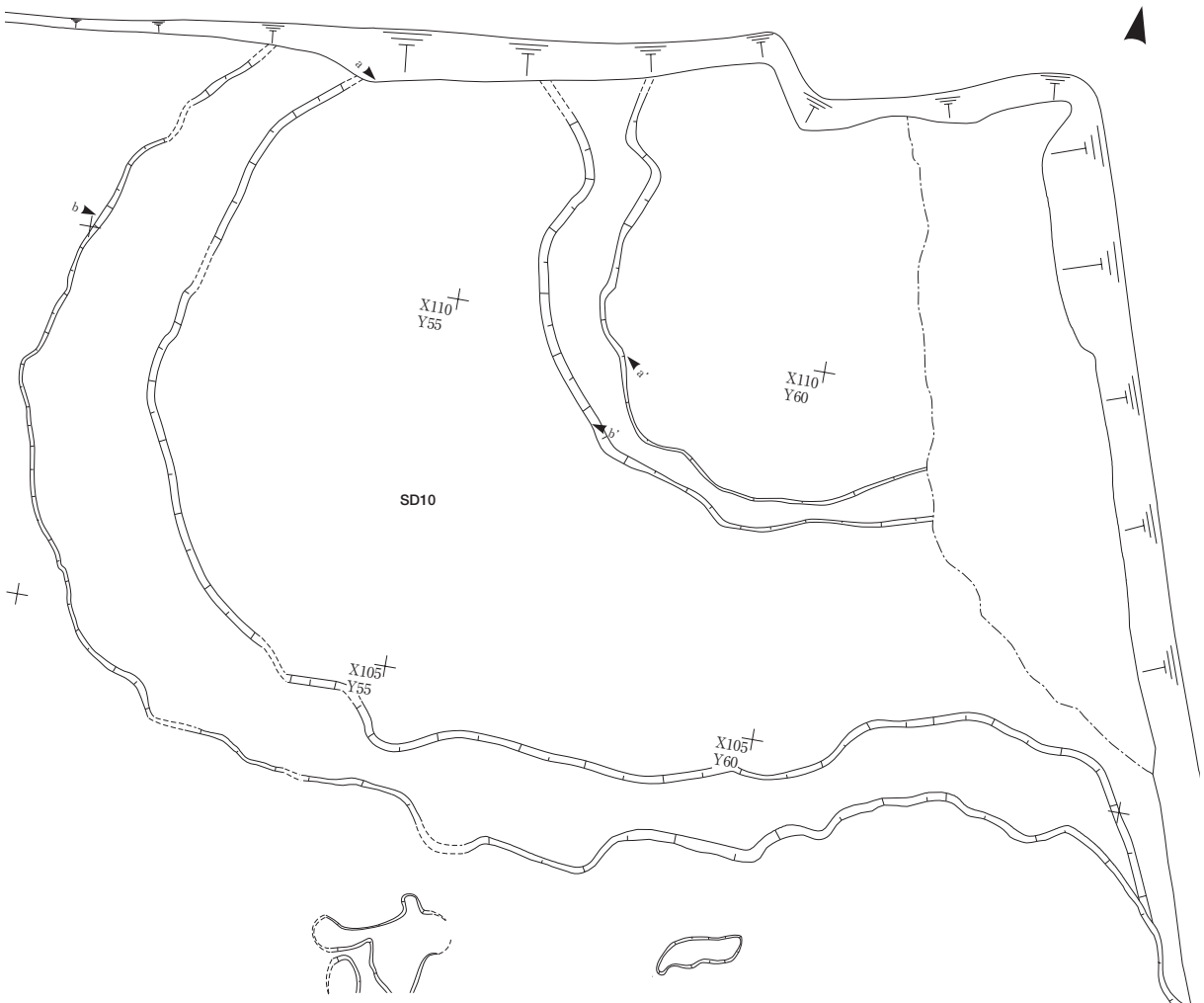
SK2262

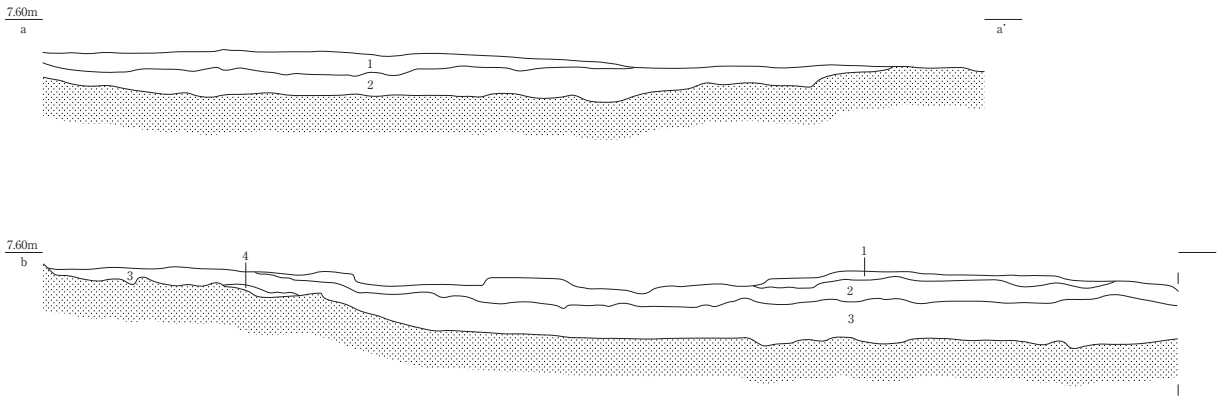
8. 2.5GY5/1 オリーブ灰色シルト（10YR4/1 褐灰色粘土ブロック状に混,炭化物15%・酸化鉄5%混）
9. 5GY4/1 暗オリーブ灰色シルト（10YR4/1 褐灰色粘土ブロック状に混,炭化物10%・酸化鉄7%混）
10. 7.5GY5/1 緑灰色粘土質シルト（10YR4/1 褐灰色粘土ブロック状に混,酸化鉄10%・炭化物5%混）
11. 7.5GY4/1 暗緑灰色粘土質シルト（7.5GY5/1 緑灰色粘土質シルト混,酸化鉄5%・炭化物3%混）

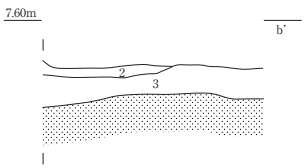
0　1:20　80cm
0　1:40　1m（断面）

第14図　惣領浦之前遺跡　縄文時代遺構実測図

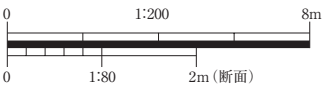
SK2261・SK2262







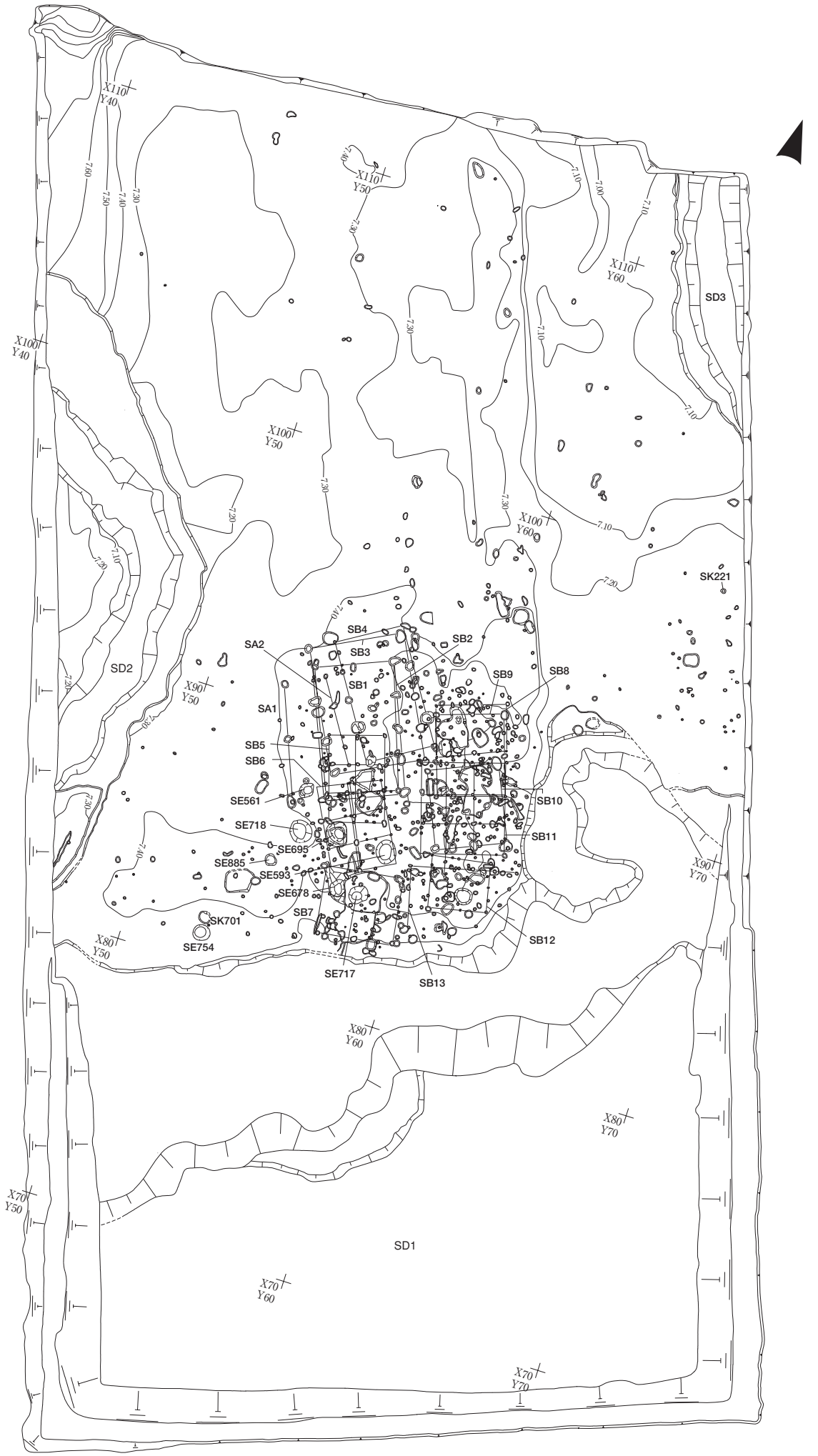
SD10
1. 2.5GY5/1 オリーブ灰色粘土
2. 2.5Y4/1 黄灰色粘土（炭化物混）
3. 2.5Y4/1 黄灰色粘土（2.5GY4/1 暗オリーブ灰色砂質シルト20%混,炭化物混）
4. 10YR5/1 褐灰色粘土（炭化物混）



第15図　惣領浦之前遺跡　縄文時代遺構実測図
SD10

SD2263
1. 2.5Y7/2 灰黄色シルト（10YR4/1 褐灰色粘土・2.5Y6/2 灰黄色シルトブロック状に混.酸化鉄15%・炭化物2%混）
2. 2.5Y6/3 にぶい黄色粘土（2.5Y7/2 灰黄色シルト・10YR4/1 褐灰色粘土ブロック状に混.酸化鉄20%・炭化物1%混）
3. 5GY6/1 オリーブ灰色粘土（2.5Y6/6 明黄褐色粘土・10YR4/1 褐灰色粘土ブロック状に混.酸化鉄10%・炭化物1%混）
4. 7.5GY6/1 緑灰色粘土（2.5Y6/6 明黄褐色粘土・10YR4/1 褐灰色粘土ブロック状に混.酸化鉄25%・炭化物1%混）
5. 7.5GY5/1 緑灰色粘土質シルト（10YR4/1 褐灰色粘土混.酸化鉄5%・炭化物1%混）

第16図　惣領浦之前遺跡　縄文時代遺構実測図
SD2263・SK2259・SK2264

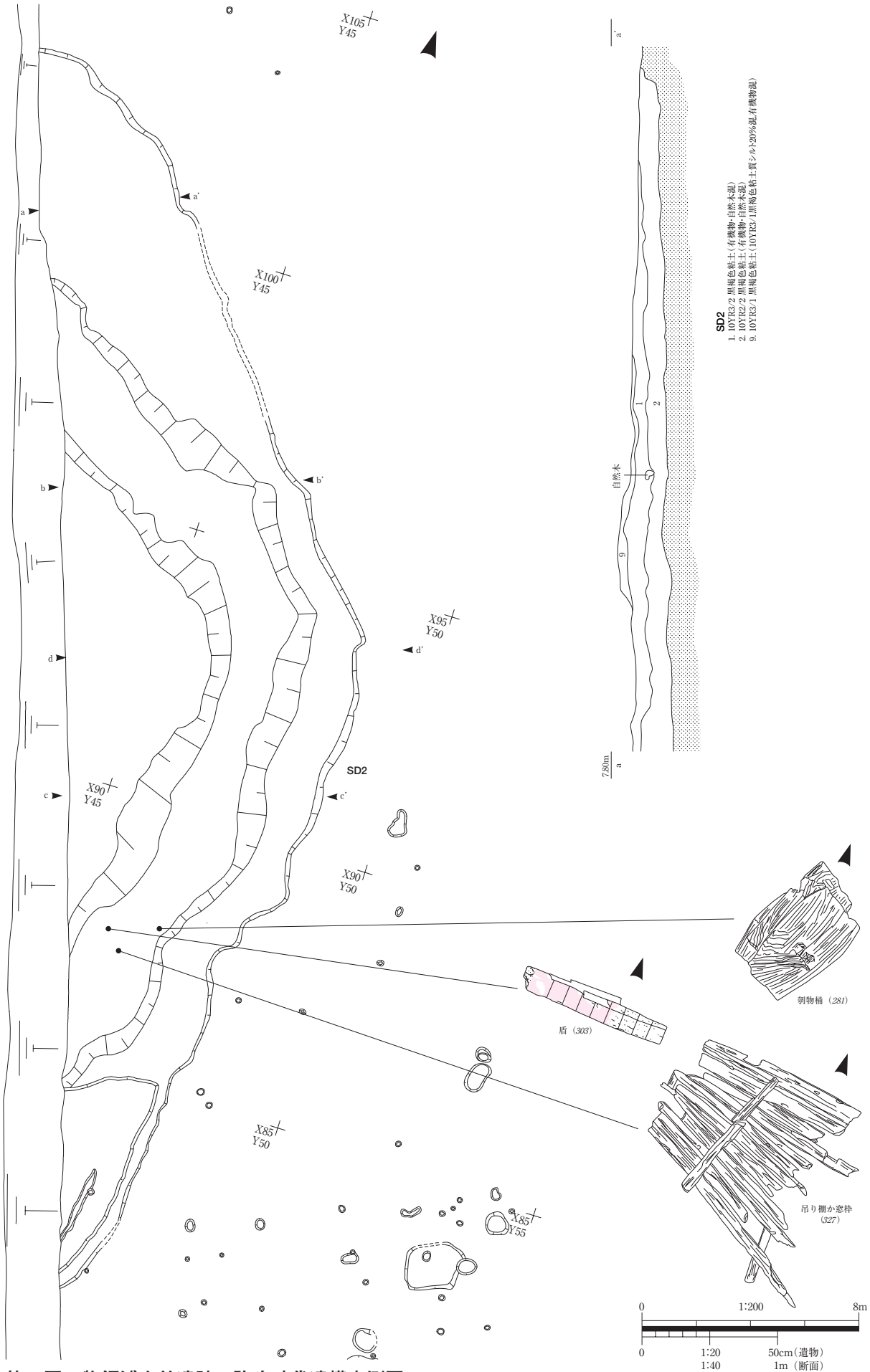


第17図　惣領浦之前遺跡　遺構全体図　(1：400)

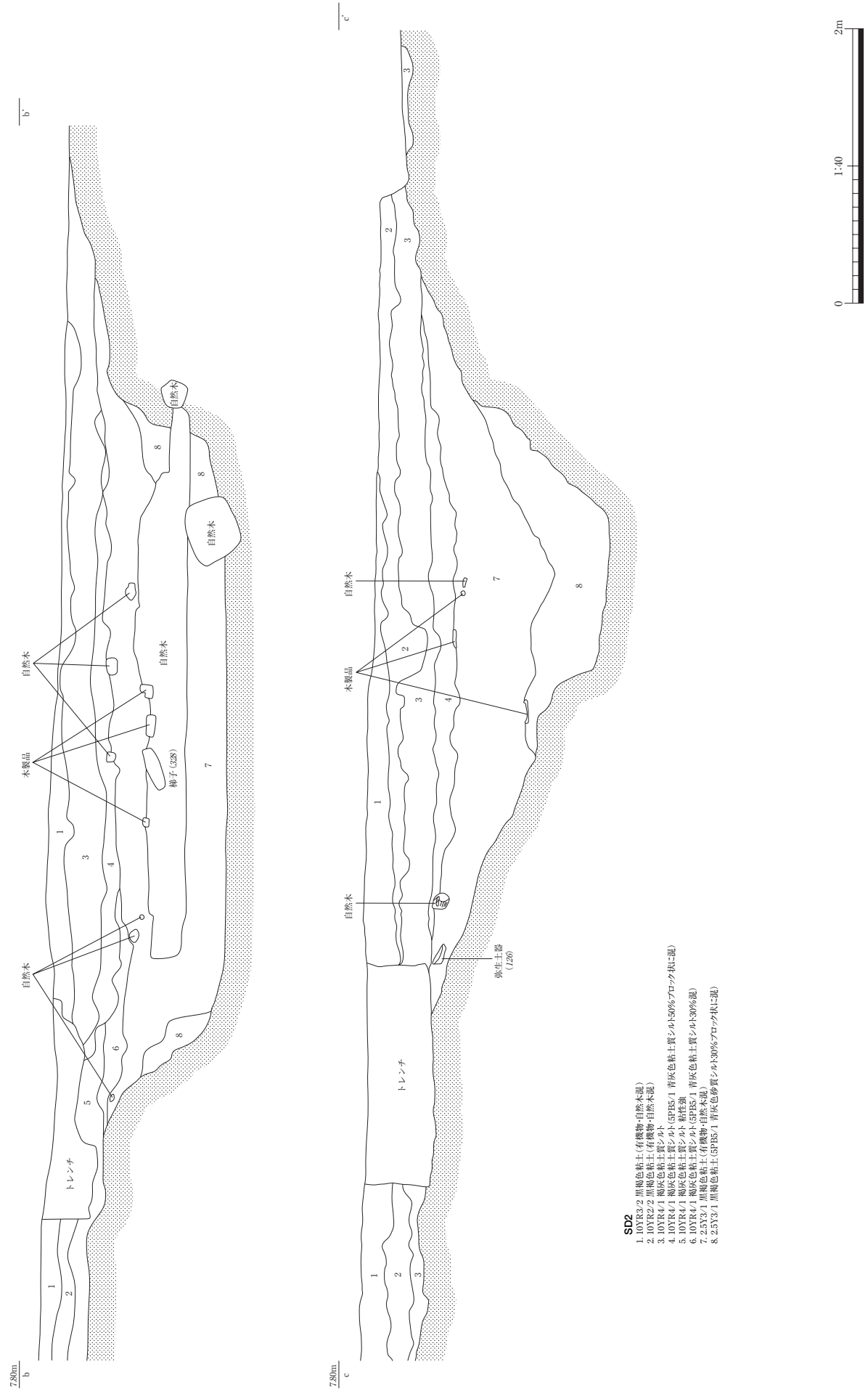
A地区　弥生時代・古代・中世

0　1:400　20m

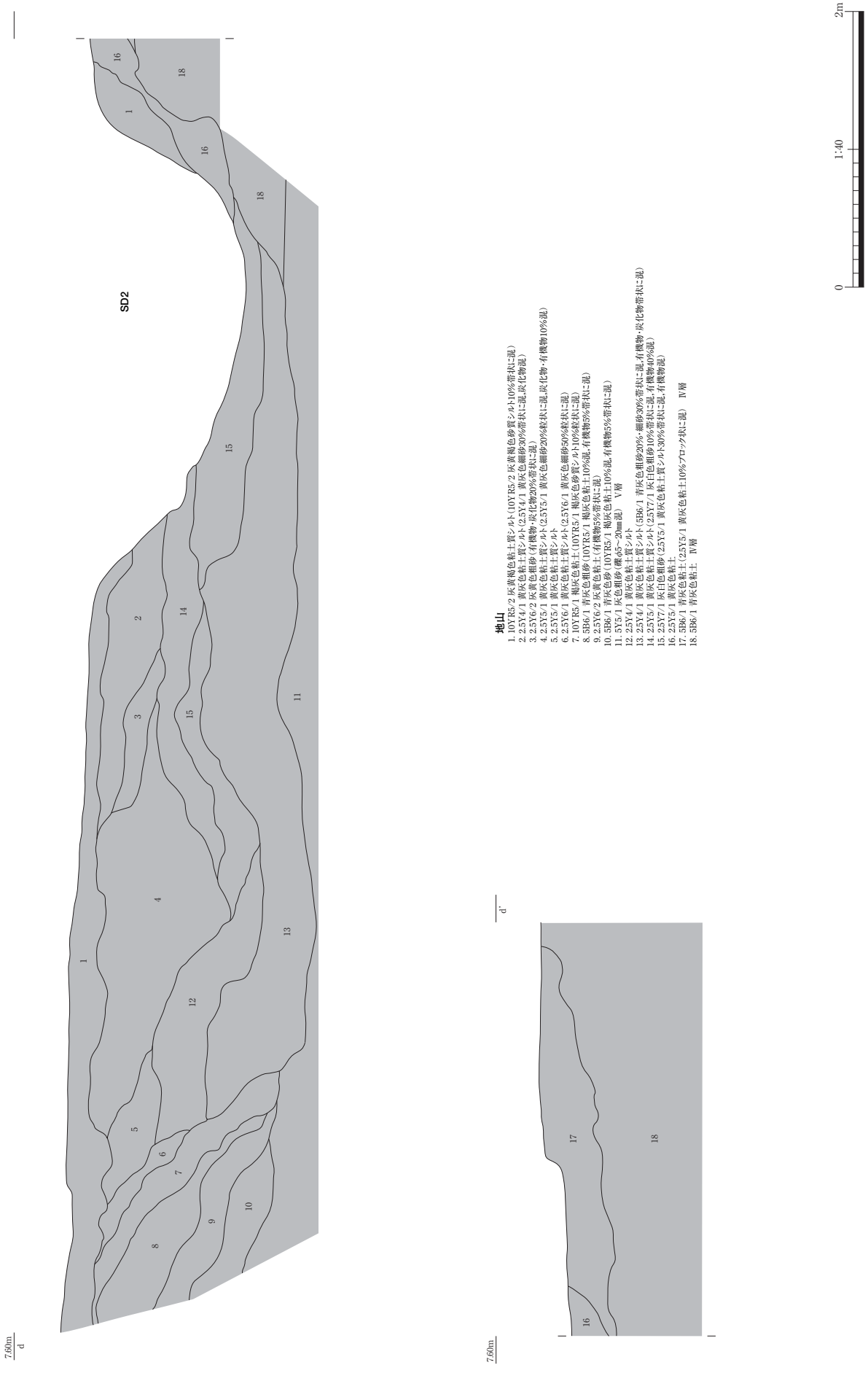
第18図　惣領浦之前遺跡　遺構全体図　（1：400）
B地区　弥生時代・古代・中世



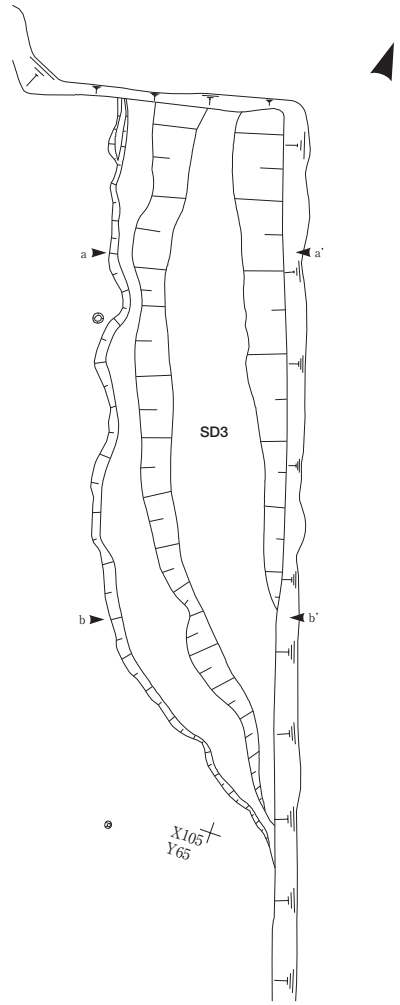
第19図　惣領浦之前遺跡　弥生時代遺構実測図
SD2



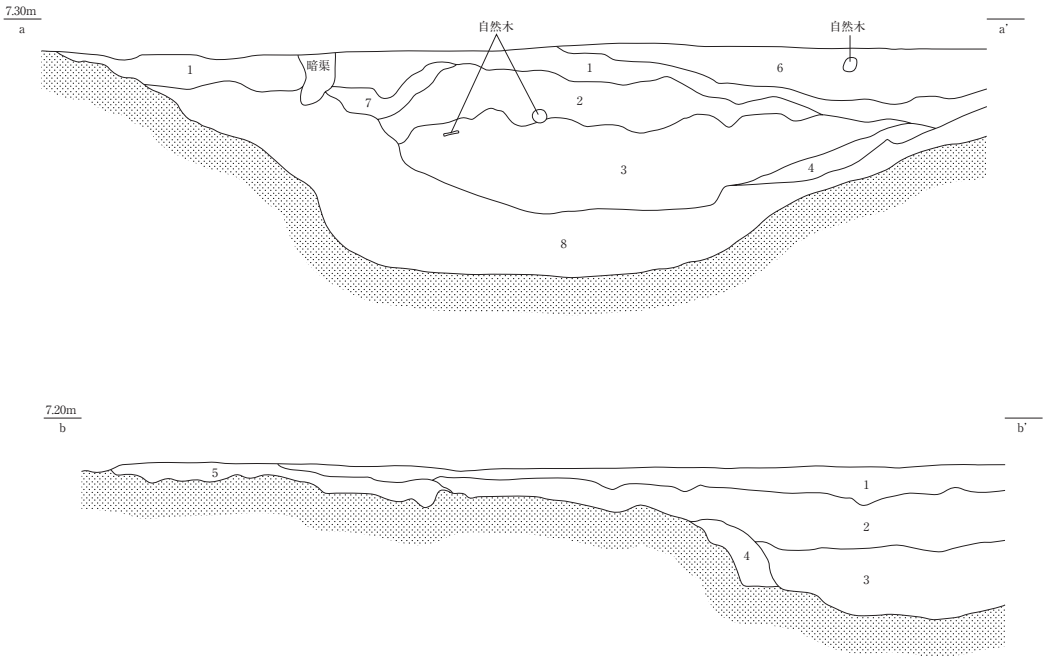
第20図　惣領浦之前遺跡　弥生時代遺構実測図
SD2

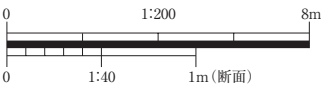


第21図　惣領浦之前遺跡　弥生時代遺構実測図
SD2

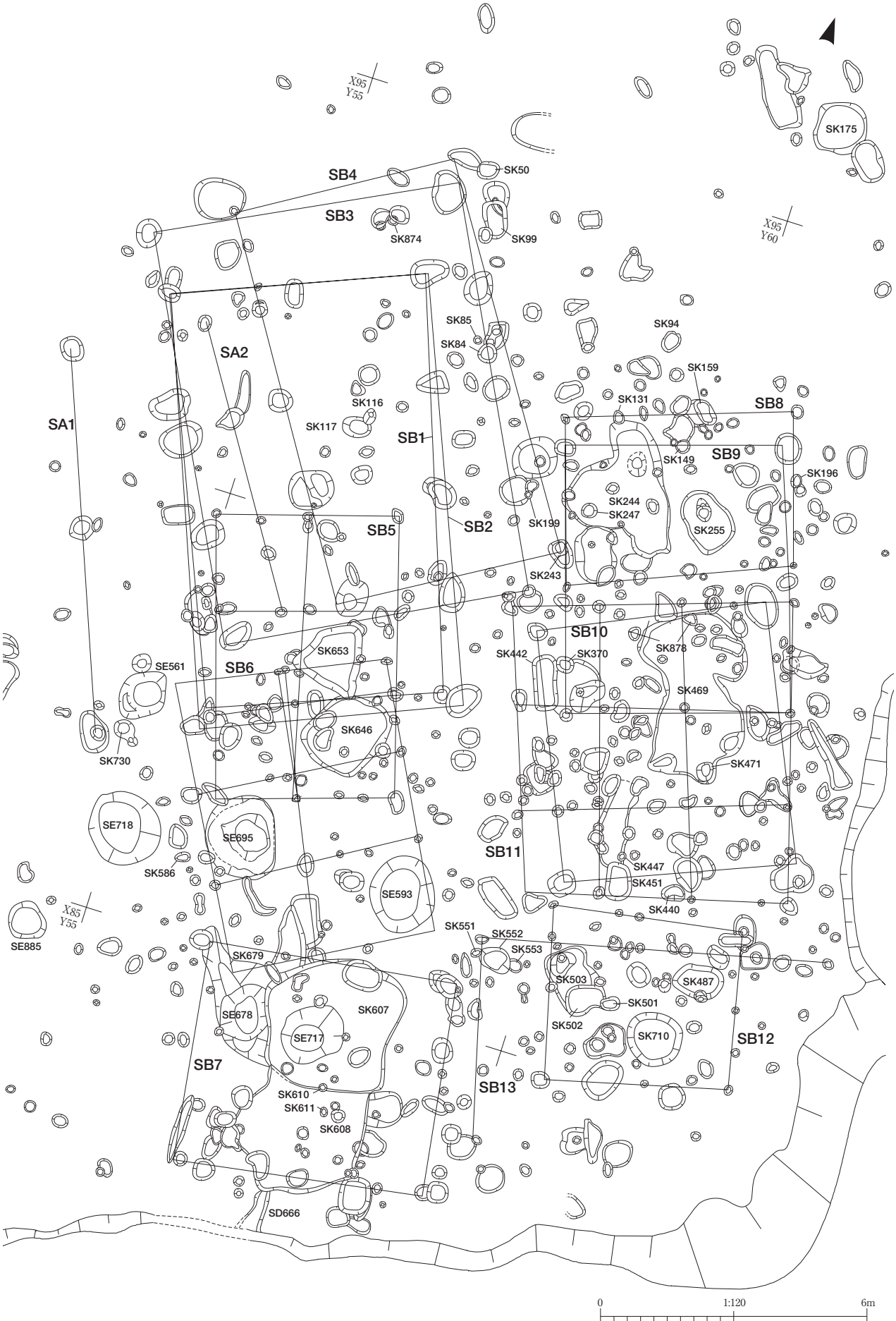


SD3
1. 2.5Y3/1 黒褐色粘土（有機物・自然木混）
2. 2.5Y3/1 黒褐色粘土（5PB5/1 青灰色砂質シルト10%ブロック状に混,有機物・自然木混）
3. 2.5Y2/1 黒色粘土（有機物・自然木混）
4. 5PB5/1 青灰色細砂（2.5Y2/1 黒色粘土40%混,有機物・自然木混）
5. 5PB5/1 青灰色細砂（2.5Y3/1 黒褐色粘土10%マーブル状に混）
6. 2.5Y5/1 黄灰色粘土（5PB6/1 青灰色シルト10%・5B7/1 明青灰色細砂10%マーブル状に混）
7. 有機質土（2.5Y3/1 黒褐色粘土20%混,自然木混）
8. 2.5Y2/1 黒色粘土（2.5Y5/2 暗灰黄色粗砂50%帯状に混,有機物・自然木混）

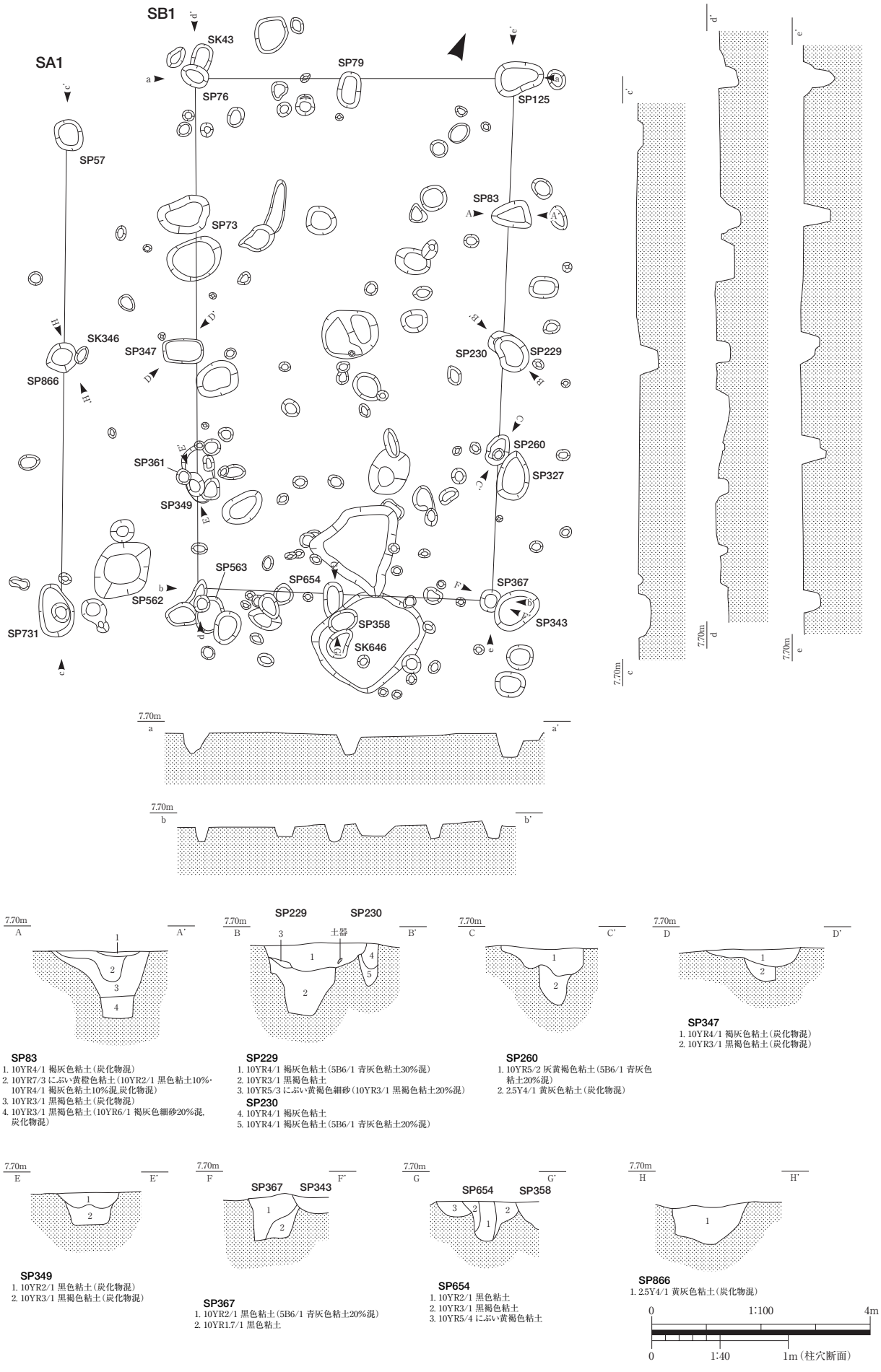




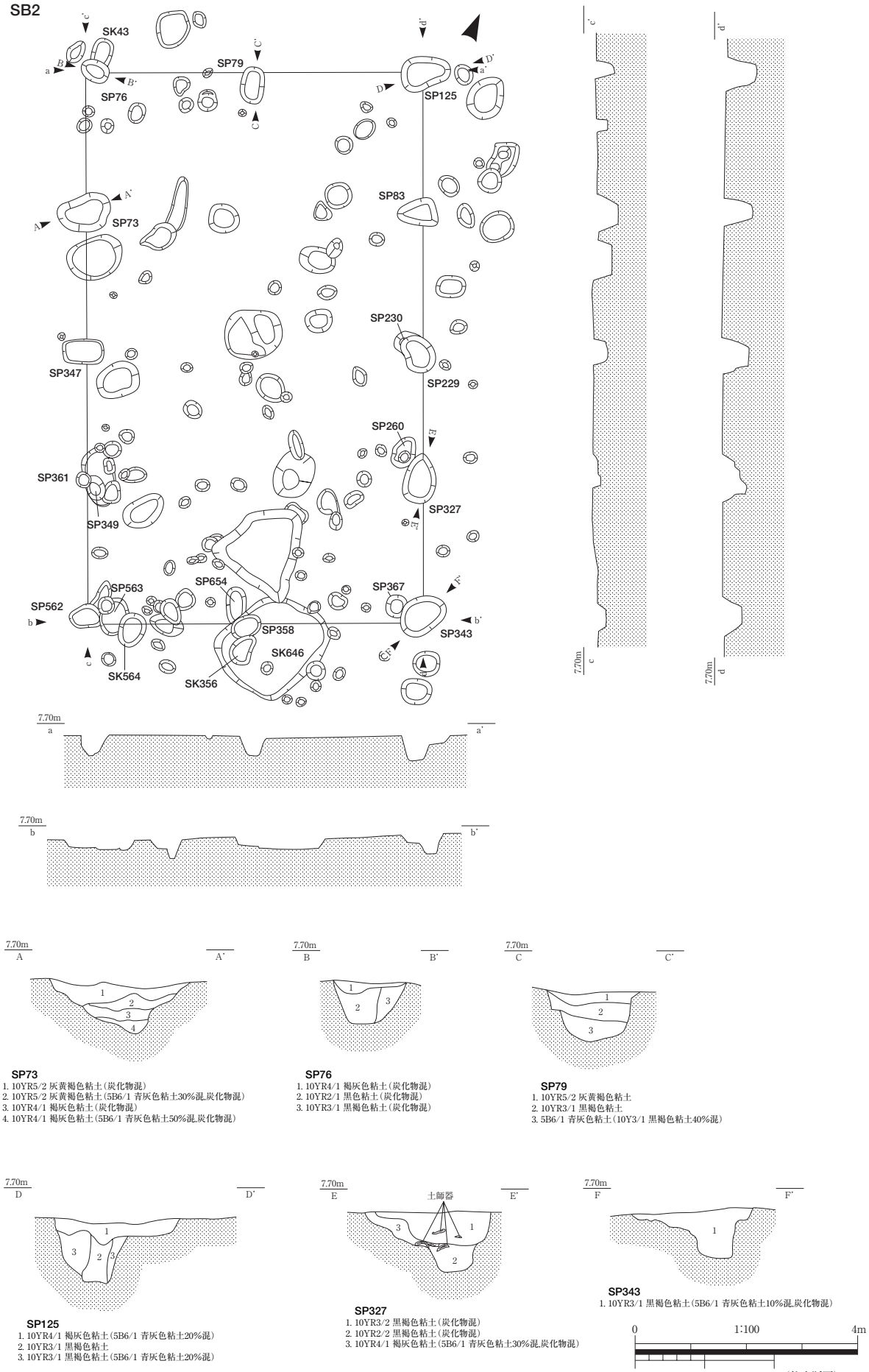
第22図　惣領浦之前遺跡　弥生時代遺構実測図
SD3



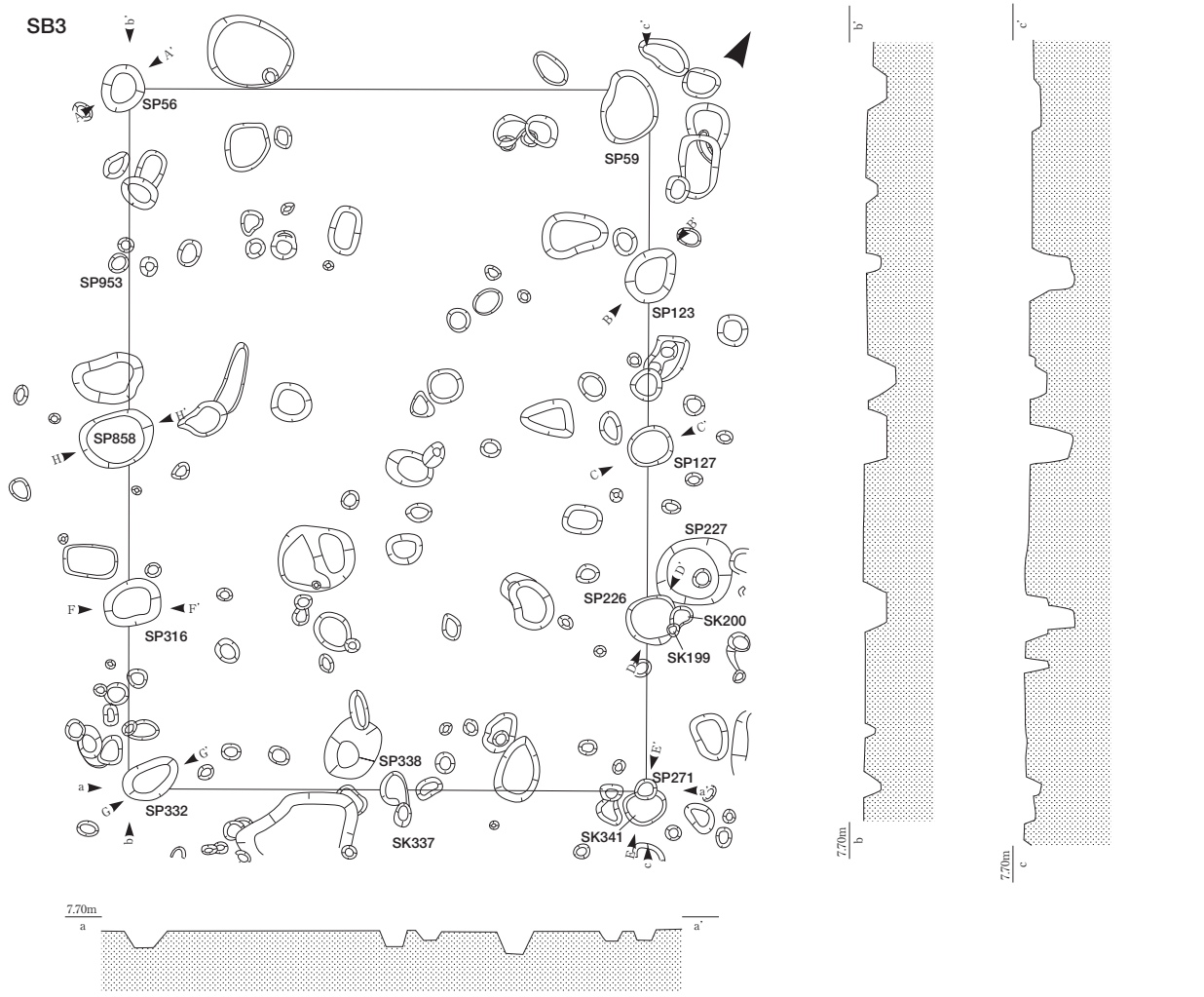
第23図　惣領浦之前遺跡　古代・中世遺構実測図
SB1～SB13　SA1・SA2

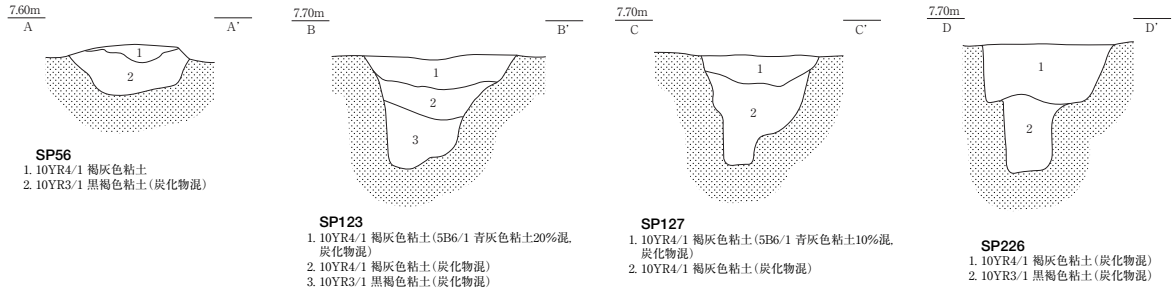


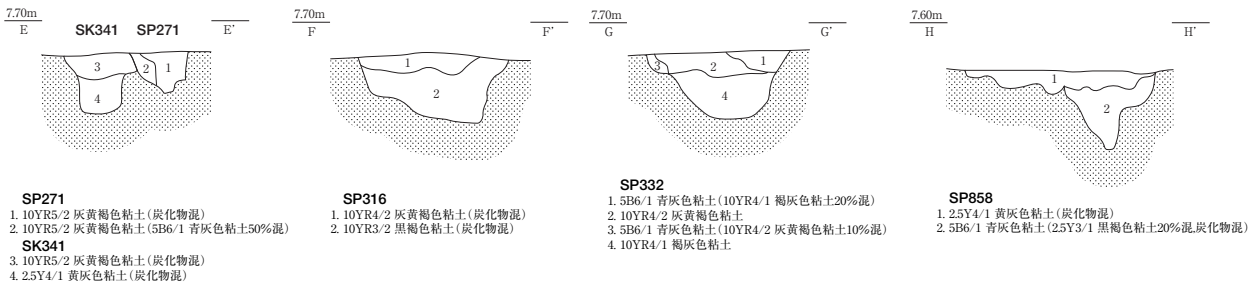
第24図　惣領浦之前遺跡　古代・中世遺構実測図
SB1　SA1

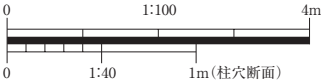


第25図　惣領浦之前遺跡　古代・中世遺構実測図
SB2

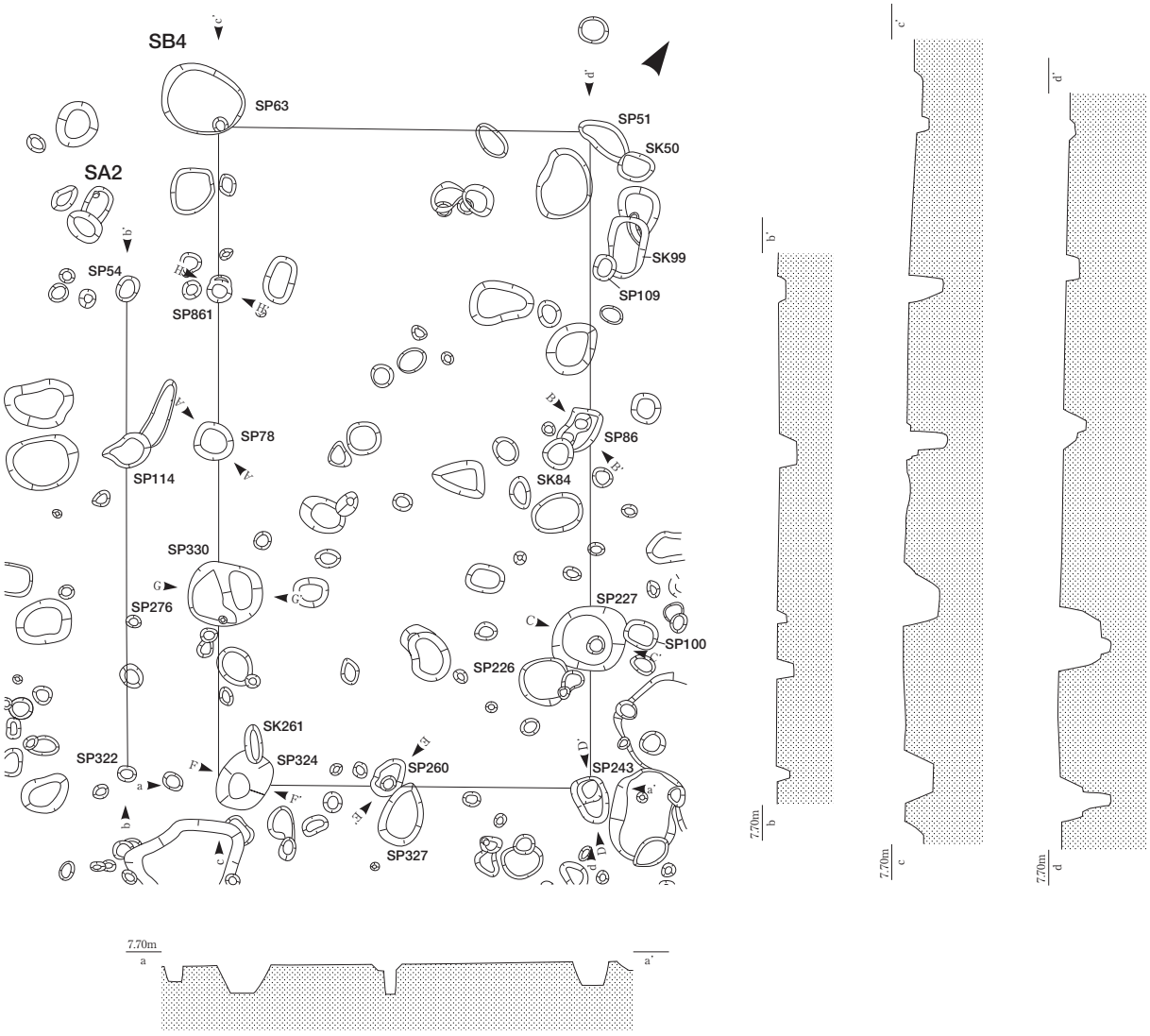


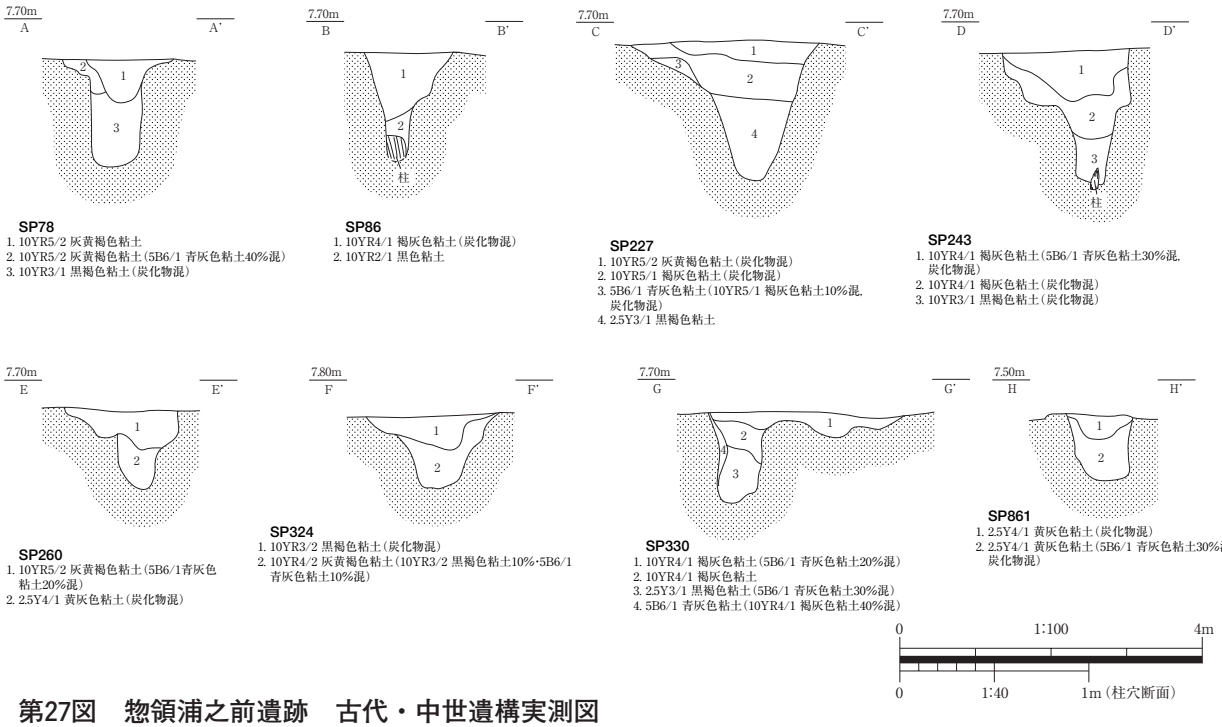




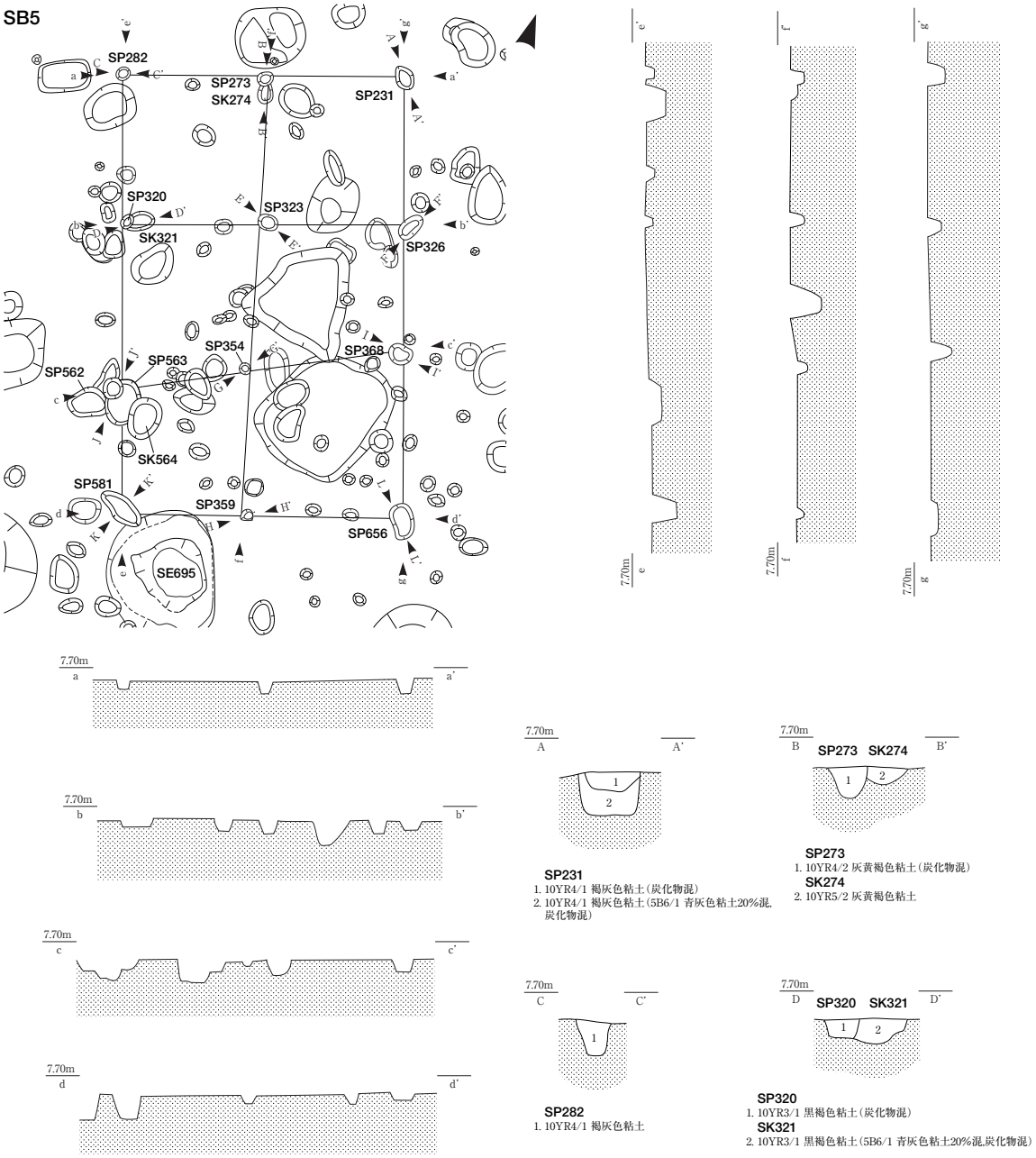


第26図　惣領浦之前遺跡　古代・中世遺構実測図
SB3

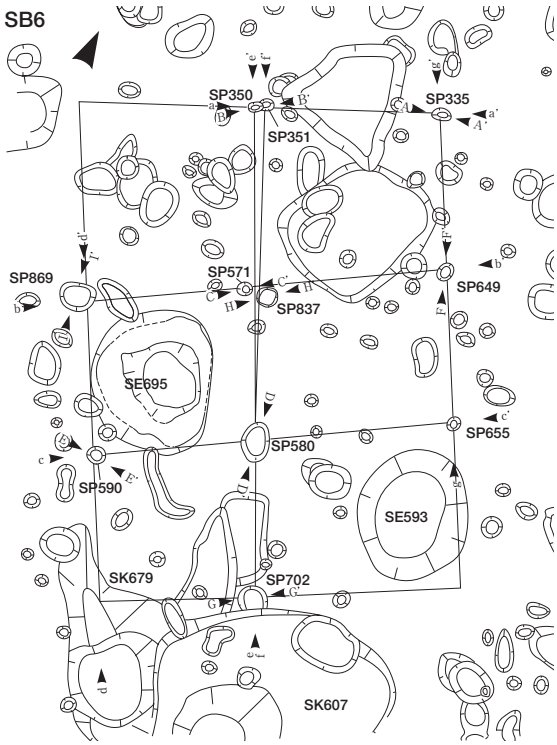


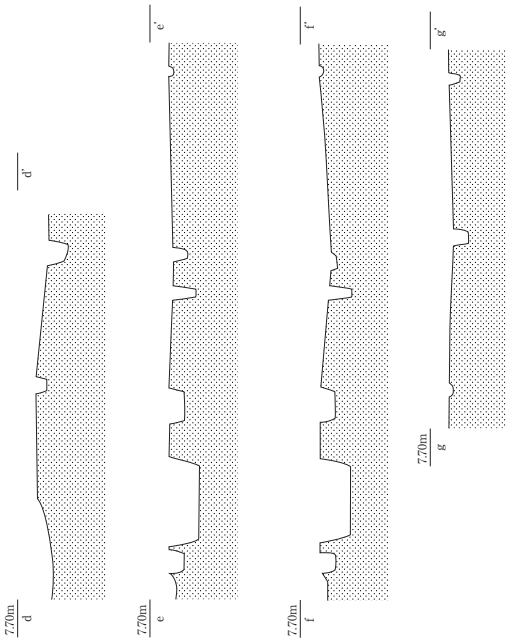


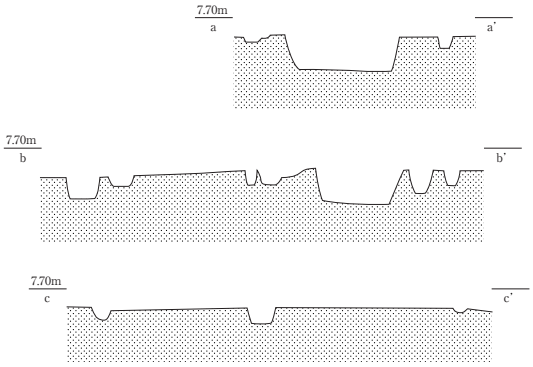
第27図　惣領浦之前遺跡　古代・中世遺構実測図
SB4　SA2

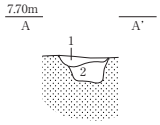


第28図　惣領浦之前遺跡　古代・中世遺構実測図
SB5

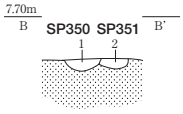






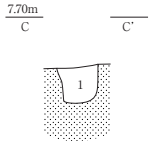


SP335
1. 10YR5/2 灰黄褐色粘土（炭化物混）
2. 5B6/1 青灰色粘土（10YR5/2 灰黄褐色粘土10%混,炭化物混）

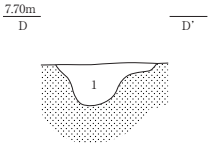


SP350
1. 10YR4/2 灰黄褐色粘土

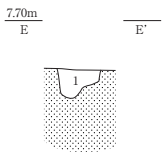
SP351
2. 10YR5/2 灰黄褐色粘土



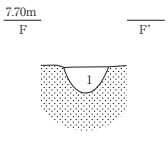
SP571
1. 10YR4/1 褐灰色粘土（炭化物混）



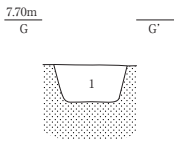
SP580
1. 10YR4/1 褐灰色粘土（炭化物混）



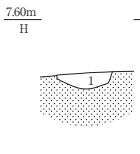
SP590
1. 10YR3/1 黒褐色粘土



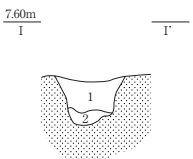
SP649
1. 10YR3/1 黒褐色粘土（炭化物混）



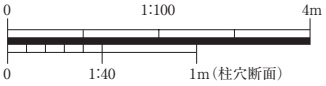
SP702
1. 10YR4/1 褐灰色粘土



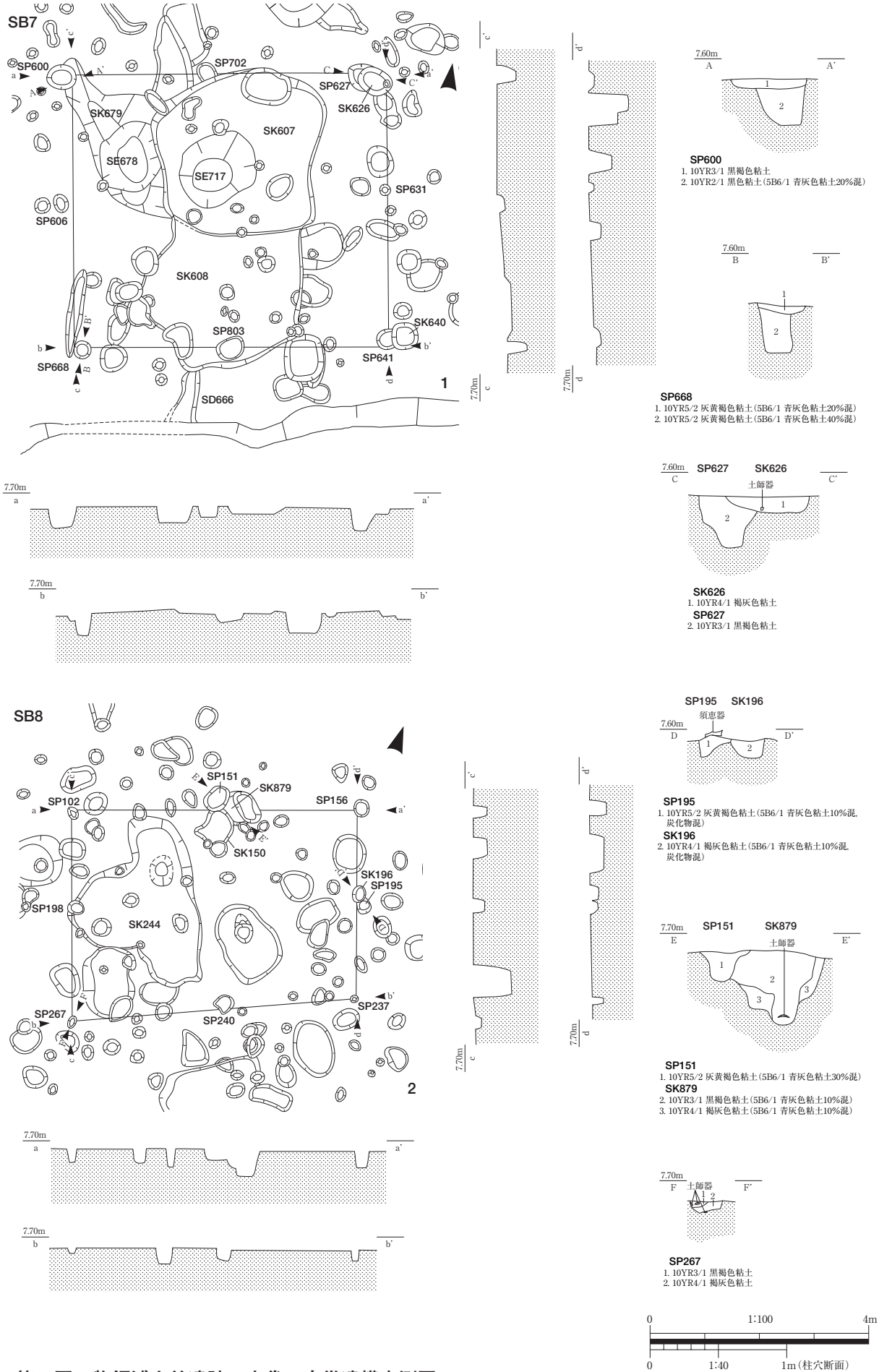
SP837
1. 10YR5/2 灰黄褐色粘土（10YR6/2 灰黄褐色粘土30%混,炭化物混）



SP869
1. 10YR4/2 灰黄褐色粘土
2. 10YR5/2 灰黄褐色粘土

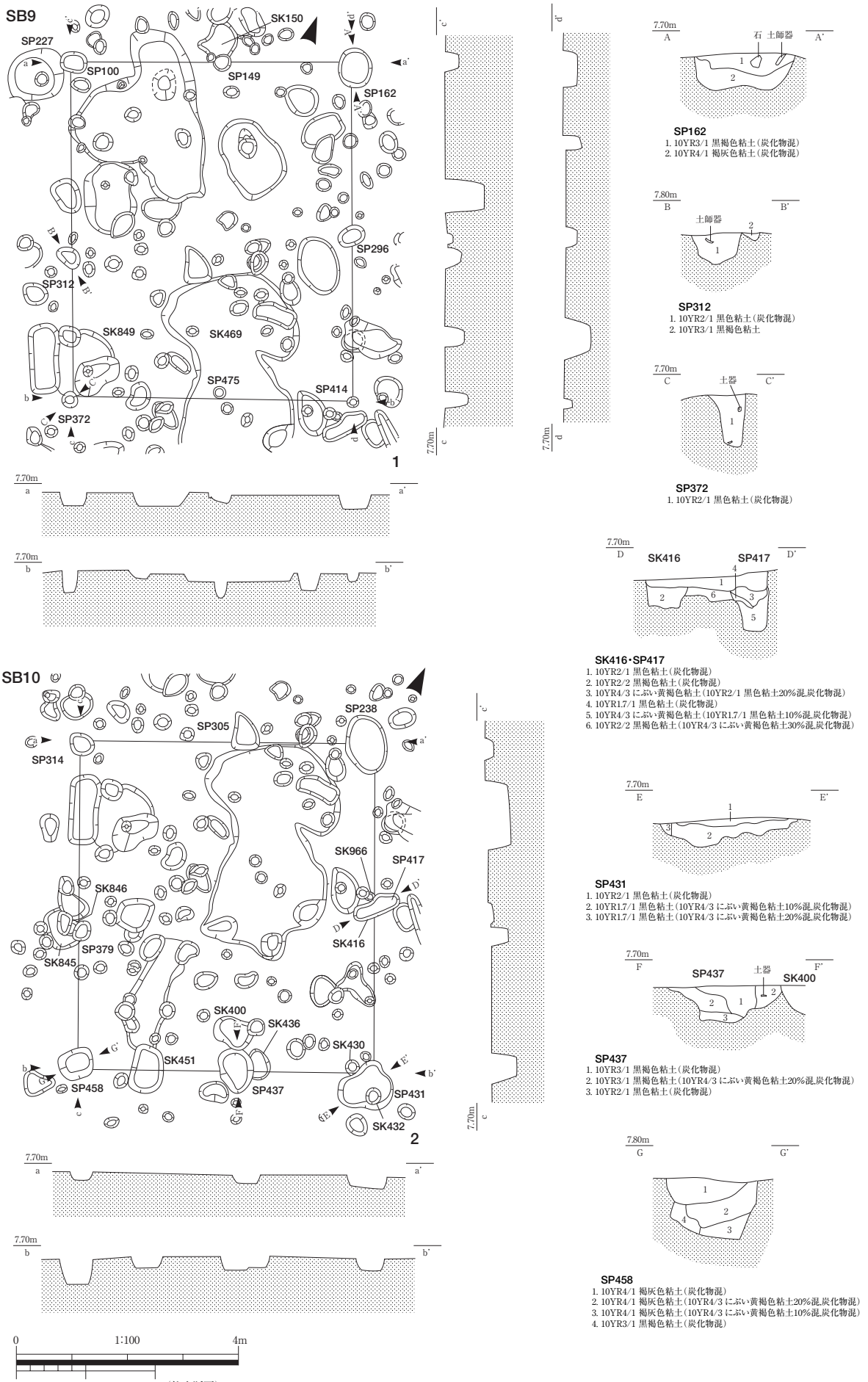


第29図　惣領浦之前遺跡　古代・中世遺構実測図
SB6



第30図　惣領浦之前遺跡　古代・中世遺構実測図

1．SB7　2．SB8



SP162
1. 10YR3/1 黒褐色粘土（炭化物混）
2. 10YR4/1 褐灰色粘土（炭化物混）

SP312
1. 10YR2/1 黒色粘土（炭化物混）
2. 10YR3/1 黒褐色粘土

SP372
1. 10YR2/1 黒色粘土（炭化物混）

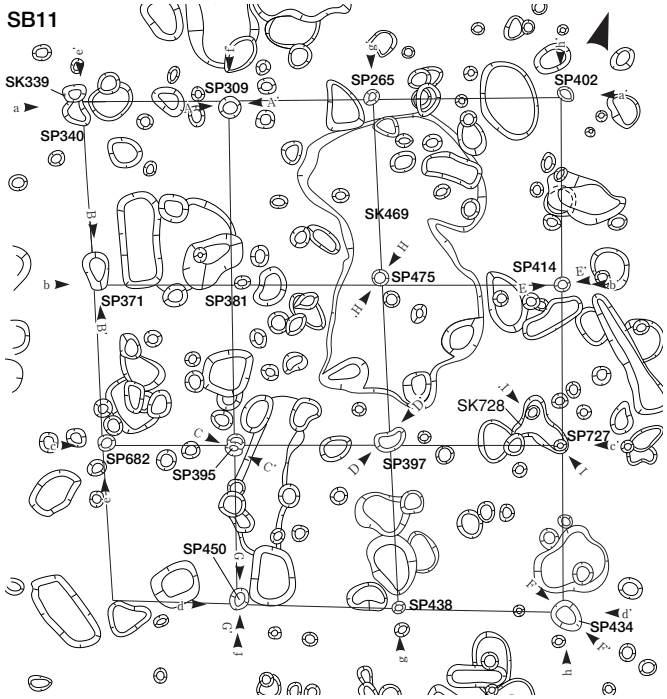
SK416・SP417
1. 10YR2/1 黒色粘土（炭化物混）
2. 10YR2/2 黒褐色粘土（炭化物混）
3. 10YR4/3 にぶい黄褐色粘土（10YR2/1 黒色粘土20%混,炭化物混）
4. 10YR1.7/1 黒色粘土（炭化物混）
5. 10YR4/3 にぶい黄褐色粘土（10YR1.7/1 黒色粘土10%混,炭化物混）
6. 10YR2/2 黒褐色粘土（10YR4/3 にぶい黄褐色粘土30%混,炭化物混）

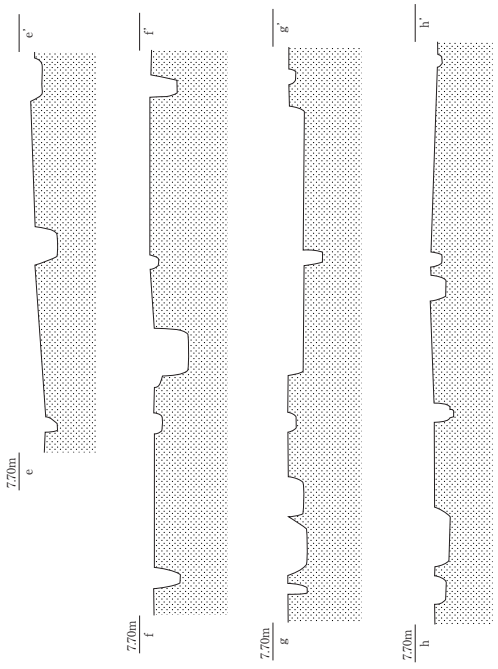
SP431
1. 10YR2/1 黒色粘土（炭化物混）
2. 10YR1.7/1 黒色粘土（10YR4/3 にぶい黄褐色粘土10%混,炭化物混）
3. 10YR1.7/1 黒色粘土（10YR4/3 にぶい黄褐色粘土20%混,炭化物混）

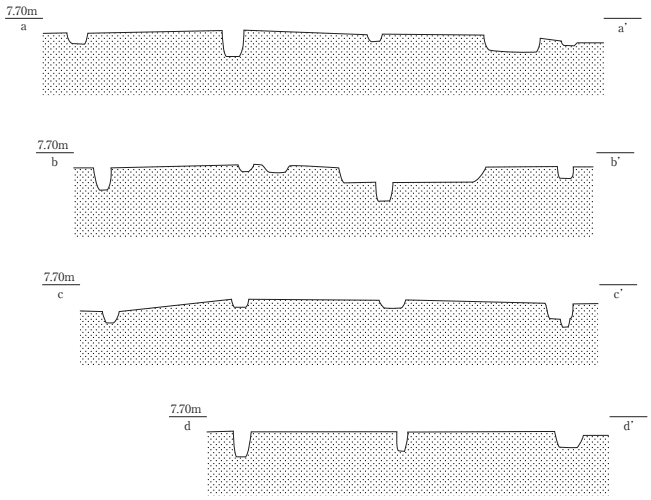
SP437
1. 10YR3/1 黒褐色粘土（炭化物混）
2. 10YR3/1 黒褐色粘土（10YR4/3 にぶい黄褐色粘土20%混,炭化物混）
3. 10YR2/1 黒色粘土（炭化物混）

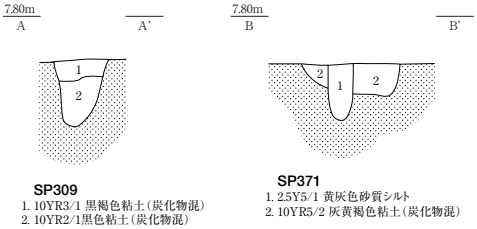
SP458
1. 10YR4/1 褐灰色粘土（炭化物混）
2. 10YR4/1 褐灰色粘土（10YR4/3 にぶい黄褐色粘土20%混,炭化物混）
3. 10YR4/1 褐灰色粘土（10YR4/3 にぶい黄褐色粘土10%混,炭化物混）
4. 10YR3/1 黒褐色粘土（炭化物混）

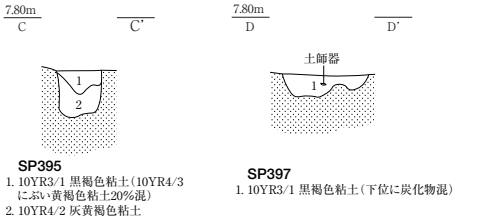
第31図　惣領浦之前遺跡　古代・中世遺構実測図
1．SB9　2．SB10

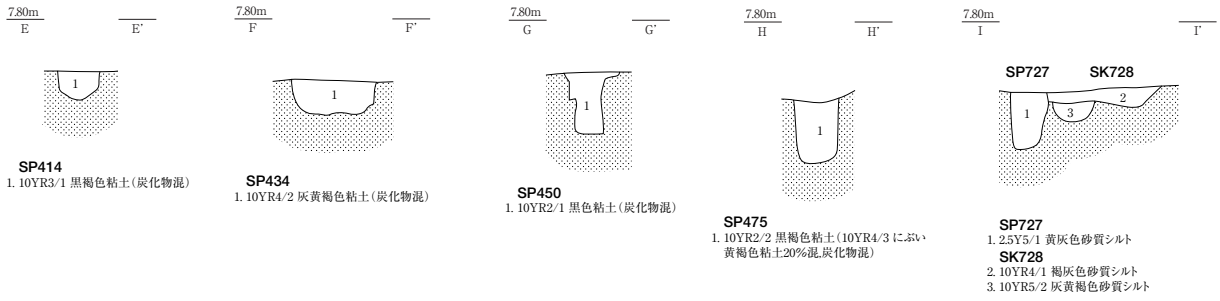


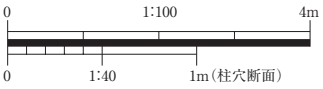




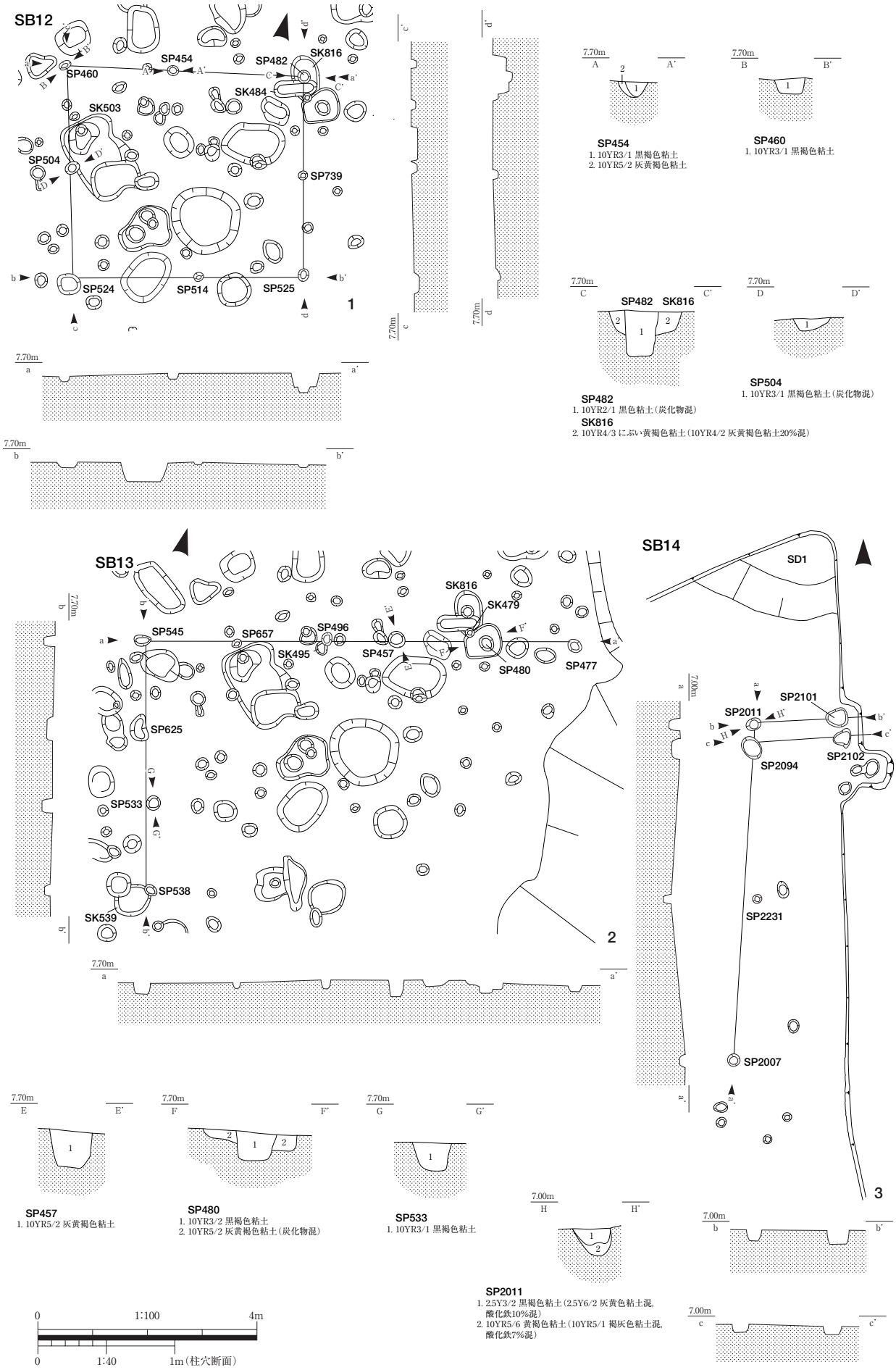








第32図　惣領浦之前遺跡　古代・中世遺構実測図
SB11

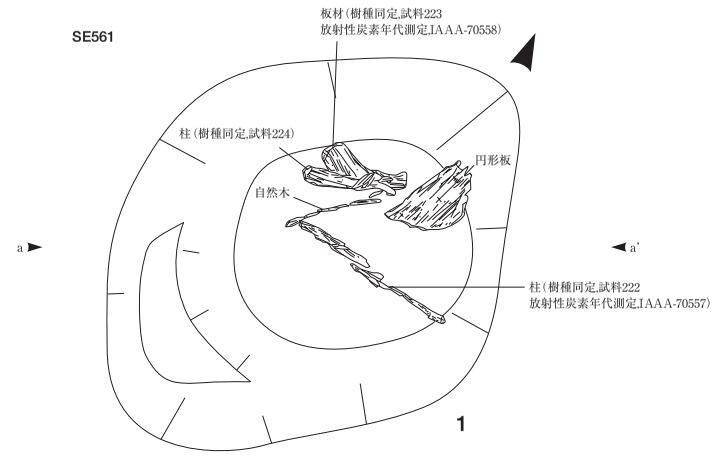


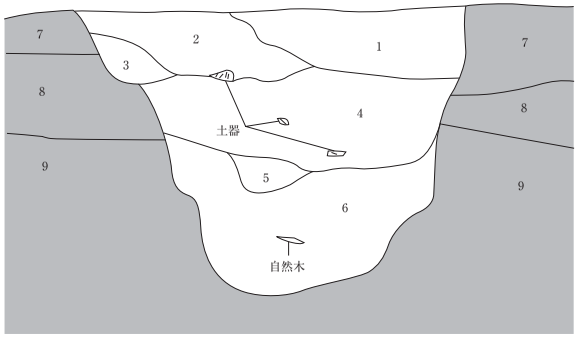
第33図　惣領浦之前遺跡　古代・中世遺構実測図

1．SB12　2．SB13　3．SB14

第34図　惣領浦之前遺跡　中世遺構実測図

1. SE561　2. SE718



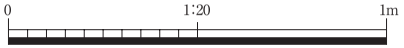


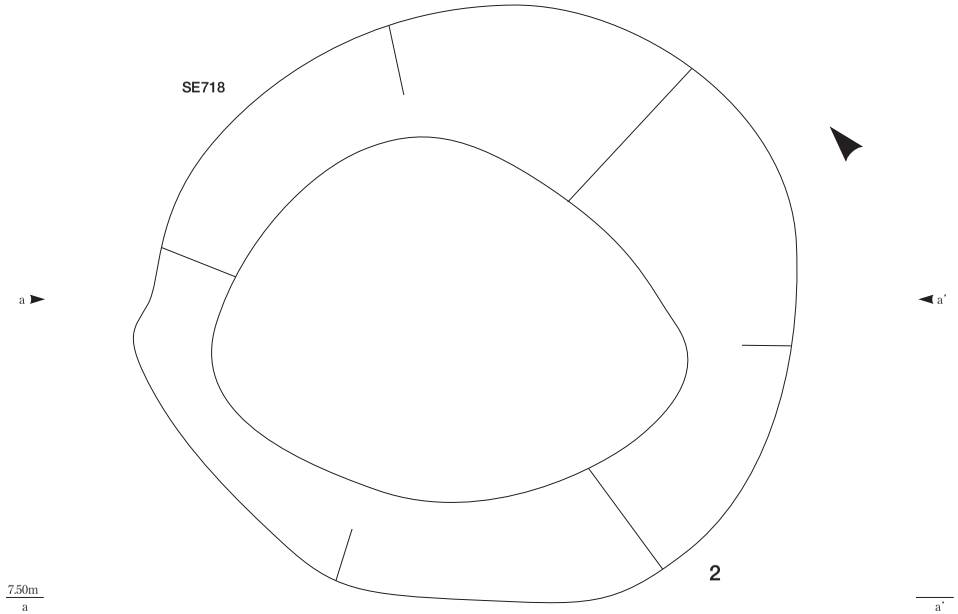
SE561

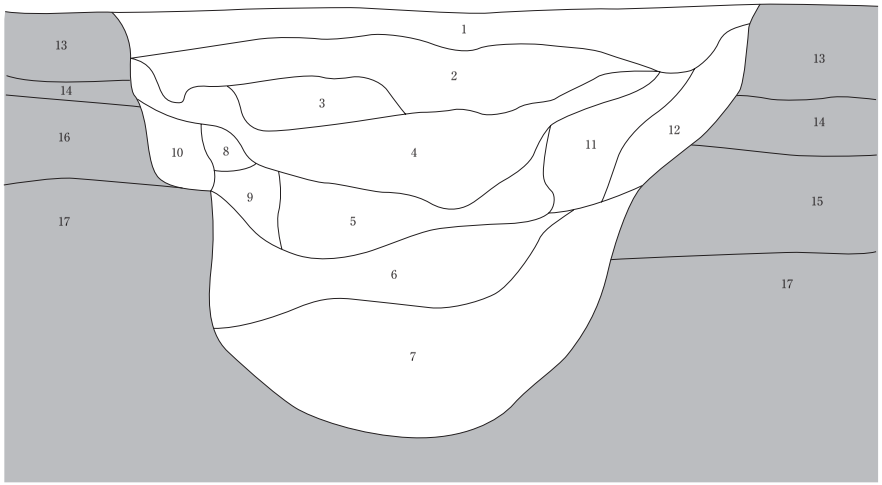
1. 10YR4/1 褐灰色粘土（5B6/1 青灰色粘土40%混,炭化物混）
2. 10YR4/1 褐灰色粘土（5B6/1 青灰色粘土10%混,炭化物混）
3. 5B6/1 青灰色粘土（10YR4/1 褐灰色粘土20%混,炭化物混）
4. 10YR3/1 黒褐色粘土（5B6/1 青灰色粘土10%混,炭化物混）
5. 5B6/1 青灰色粘土（10YR3/1 黒褐色粘土20%ブロック状に混,炭化物混）
6. 10YR1.7/1 黒色粘土（炭化物混）

地山

7. 10YR4/1 褐灰色粘土（10YR6/2 灰黄色粘土50%混）　Ⅲa層
8. 10YR7/2 にぶい黄橙色粘土（10YR4/1 褐灰色粘土10%混）　Ⅲb層
9. 5B6/1 青灰色粘土　Ⅳ層





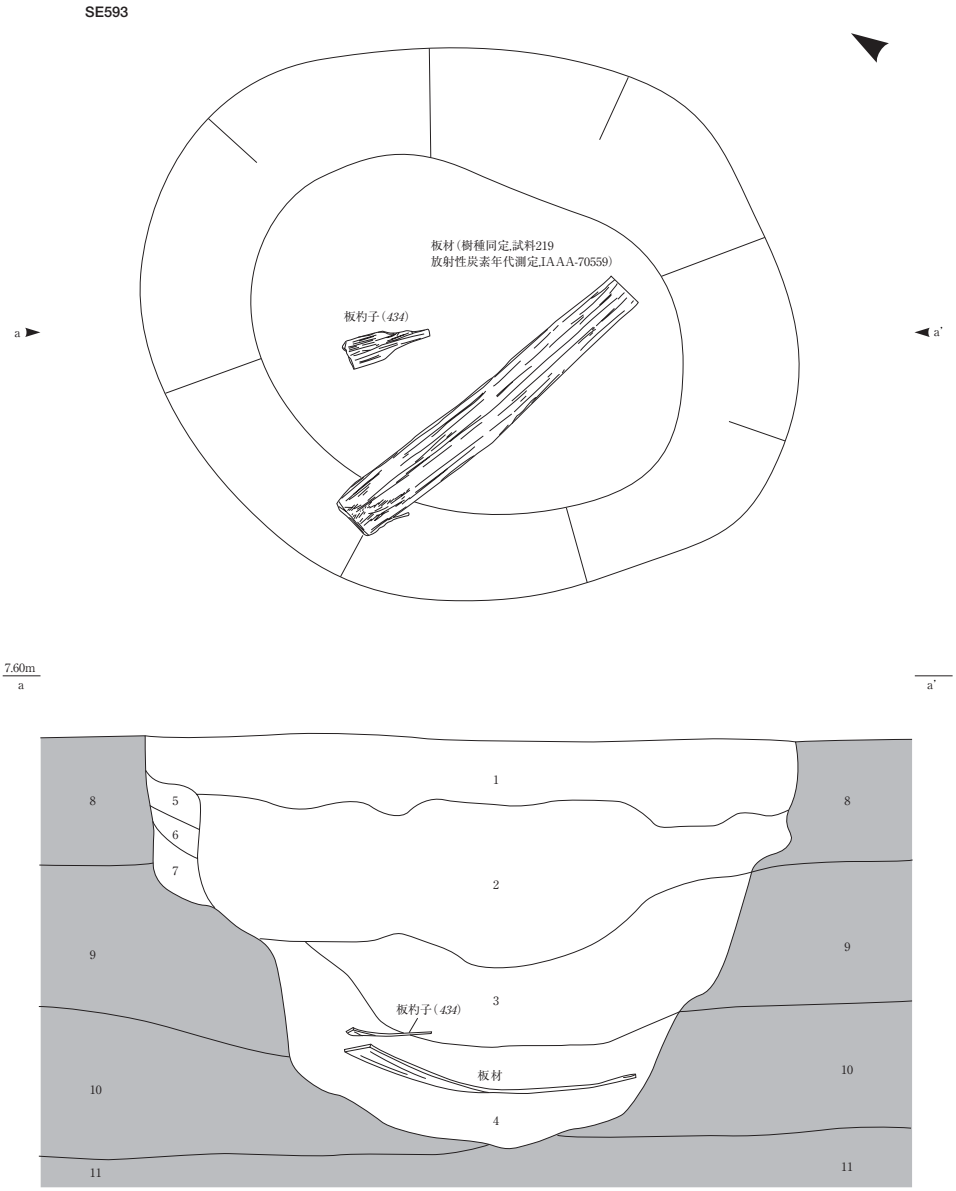


SE718

1. 10YR3/2 黒褐色粘土
2. 10YR6/3 にぶい黄橙色粘土（10YR3/2 黒褐色粘土20%混）
3. 10YR6/3 にぶい黄橙色粘土（10YR2/1 黒色粘土10%混）
4. 10YR2/1 黒色粘土
5. 2.5Y5/2 暗灰黄色粘土（2.5Y5/2 暗灰黄色砂30%混）
6. 2.5Y3/1 黒褐色粘土
7. 5Y4/1 灰色粘土
8. 10YR6/3 にぶい黄橙色粘土（2.5Y3/1 黒褐色粘土10%混）
9. 10YR6/3 にぶい黄橙色粘土（有機物混）
10. 2.5Y3/1 黒褐色粘土（10YR6/3 にぶい黄橙色粘土40%帯状に混）
11. 10YR6/3 にぶい黄橙色粘土（10YR 2/1黒色粘土10%ブロック状に混）
12. 10YR2/1 黒色粘土（10YR6/3 にぶい黄橙色粘土50%ブロック状に混）

地山

13. 10YR4/1 褐灰色粘土（10YR6/2 灰黄褐色粘土20%混）　Ⅲa層
14. 10YR7/2 にぶい黄橙色粘土（10YR4/1 褐灰色粘土20%混）　Ⅲb層
15. 10YR7/2 にぶい黄橙色粘土　Ⅲc層
16. N4/0灰色粘土　Ⅳ層
17. 5B6/1 青灰色粘土　Ⅳ層



SE593
1. 10YR4/1褐灰色粘土
2. 10YR3/1黒褐色粘土
3. 2.5Y3/1黒褐色粘土
4. 5Y3/1オリーブ黒色粘土
5. 5B6/1青灰色粘土（10YR4/1褐灰色粘土20%混）
6. 10YR4/1褐灰色粘土（5B6/1青灰色粘土20%混）
7. 5B6/1青灰色粘土（10YR4/1褐灰色粘土20%混）

地山
8. 10YR7/2 にぶい黄橙色粘土（10YR4/1 褐灰色粘土20%混）　Ⅲb層
9. 10YR7/2 にぶい黄橙色粘土　Ⅲc層
10. 5B6/1 青灰色粘土　Ⅳ層
11. 5B6/1 青灰色砂　Ⅳ層

第35図　惣領浦之前遺跡　中世遺構実測図
SE593